

河南町文化財調査報告第4冊

# 芹生谷遺跡・石塚古墳群

スーパーセンターオークワ河南店建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

2015年3月

河南町教育委員会

## 序 文

南河内郡河南町は大阪府の東南部、東を金剛山地の峰々に画されて奈良の地と接しています。町は葛城山を頂とする山地と、その前面に広がる丘陵、段丘から成り、山並みの青がたなびく万葉の「青旗の葛城山」が緑の豊かさを古くから伝えつづけています。

遺跡には、太子町にまたがる一須賀古墳群、その周辺に広がる7世紀の王陵、王陵にならぶ規模をもつ平石古墳群、双円墳である金山古墳などがあり、古代国家の成立において大きな位置付けをもった地であったことを物語っています。

芹生谷遺跡は金山古墳の周辺、「河南台地」の最奥部に広がります。2007年に一般国道309号の整備に伴ってその存在が見出されました。大阪府教育委員会の継続的な調査によって、今に続く中世の集落や耕作地の様子が明らかにされ、さらには古墳時代の集落があったことも分かってきました。

本書はその東側で計画された、大型商業施設の建築に伴う発掘調査の成果を報告しています。何よりも、まったく知られていなかった4基の古墳「石塚古墳群」が発見されたことは驚きの成果でした。横穴式石室には、埋葬時を彷彿とさせる多くの副葬品が残り当時の葬礼を物語るかのようなものでした。古墳時代の終焉に、河南の地にいつそうの輝きをもたらす古墳の群像に新たな光が加わったのです。そして現地に3基の石室が保存されたことは、地域にとっての大きな財産となることでしょう。

最後になりましたが、調査の実施にあたっては株式会社オークワをはじめ、施工関係者、土地所有者、近隣の住民の皆様に、深いご理解と多大なご協力を、関係諸機関、諸氏にご指導とご配慮を賜りました。ここに各位に対し厚く感謝いたしますとともに、今後もより一層のご理解とご支援をお願い申し上げます。

平成27年3月

河南町教育委員会  
教育長 新田晃之



## 例 言

1. 本書は、大阪府南河内郡河南町大字中に所在する芹生谷遺跡・石塚古墳群発掘調査（SRT12）の報告書である。
2. 発掘調査と報告書作成の費用は、株式会社オークワが負担した。
3. 発掘調査は平成24年3月に試掘調査を、平成24年7月17日から平成24年10月31日まで本調査を行い、平成24年から平成27年にかけて整理作業を行い、本書刊行をもって完了した。
4. 発掘調査および整理作業は、河南町教育委員会が向井 妙を担当者として以下の体制で実施した。

平成24年3月～25年3月	教育長 浅野雅美、教・育部長 松田友宏、教育課長 赤井毅彦
平成25年4月～12月19日	教育長 浅野雅美、教・育部長 新田晃之、教育課長 赤井毅彦
平成25年12月20日～26年3月	教育長 新田晃之、教・育部長 久保広一、教育課長 赤井毅彦
平成26年4月以降	教育長 新田晃之、教・育部長 久保広一、教育課長 辻本幸司 文化財係長 森口竜也
5. 本書の編集・執筆は向井が行った。
6. 遺構写真は主として向井が撮影した。河南町教育委員会の監督のもと、遺物の実測は株式会社 アート、写真撮影は株式会社地域文化財研究所に委託して行った。
7. 鉄製品のX線撮影は大手前大学にご協力を賜った。記して感謝したい。
8. 調査の実施にあたっては、下記の関係機関、諸氏にご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表したい（敬称略）。

大阪府教育委員会、羽曳野市教育委員会、太子町教育委員会、千早赤阪村教育委員会、  
藤井寺市教育委員会、大手前大学、公益財団法人大阪府文化財センター、  
大阪府立近つ飛鳥博物館  
飯田浩光、池田貴則、和泉大樹、植田隆司、植田直見、魚津克久、大向智子、笹栗 拓、中西裕見子、  
鍋島隆宏、西川寿勝、廣瀬時習、藤田徹也、森下章司、森本 徹、山田孝弘、吉光貴裕
9. 本調査に係わる遺物・写真・実測図などの資料は河南町教育委員会が保管している。

## 凡 例

1. 水準値は、T.P. 値（東京湾平均海面値）を用い、本文中では「T.P.+〇m」と表記する。
2. 遺構平面図の座標値は、世界測地形（測地成果 2000）に基づく国土地理座標第VI系で表記する。報告書内での単位は、cm である。
3. 遺構実測図に付す方位針は、全て国土座標第VI系の座標北を示す。磁北は西に  $0^{\circ} 15' 39''$  傾いている。
4. 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳』農林水産省農林水産技術会事務局監修・財団法人日本色彩研究所監修を用いた。
5. 本書における遺構名の表記には、柱穴はSP、溝はSD、土壌はSK、河川等はSR、その他のものはSXを冠している。遺構番号は遺構の種別を問わず、調査区ごとに分けて付した。遺物は種類を問わず通し番号を付した。具体的には以下の通りである。なお、調査時の石室出土遺物の取り上げ番号については、表2に記した。

1区	遺構番号 1～20	遺物掲載番号 1～149	（登録番号 No. 1～215）
2区	遺構番号 1～5	遺物掲載番号 なし	（登録番号 No. 300～305）
3区	遺構番号 1～79	遺物掲載番号 150～153	（登録番号 No. 400～406（東）、No. 500～507（西））
6. 本書内の挿図・図版は通し番号とする。
7. 掲載図面の縮尺は、調査区平面は1/100、遺構図は1/40・1/80、土器1/4、鉄製品1/2、玉類1/2を基本とする。なお、必要に応じて縮尺を変更したものについては各図中に縮尺を明示した。
8. 土器類の断面は、須恵器を黒塗り、瓦質土器・瓦をアミフセ40%、土師器を白抜きとした。鉄製品・石製品、木製品の断面は、斜線で示した。
9. 図版掲載遺物の縮尺は任意である。
10. 出土遺物の記述に関しては第IV章に挙げた文献を参考にしており、本文中では煩雑さを避けるため、これらの引用文献の記載を割愛した。

# 本文目次

序文	i
例言	iii
凡例	iv
本文目次	v
挿図目次	vi
表目次	vii
写真目次	vii
図版目次	vii
第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査地の位置と周辺調査	1
(1) 調査地の位置と地理的環境	
(2) 既往の調査成果と歴史的環境	
第2節 調査に至る経緯と経過	8
(1) 調査に至る経緯	
(2) 調査の経過	
(3) 調査の方法	
第2章 試掘・確認調査成果	
第1節 調査区の設定	11
第2節 各トレンチの調査成果	11
(1) 1トレンチ	
(2) 2トレンチ	
(3) 3トレンチ	
(4) 4トレンチの遺構と遺物	
i) 寝敷状遺構	
ii) 谷	
iii) 土坑	
(5) 5トレンチ	
(6) 6トレンチ	
(7) 7トレンチ	
(8) 8トレンチ	
(9) 9トレンチ	
(10) 10トレンチ	
第3節 小結	15
(1) 遺物	
(2) 遺構	
(3) 本調査の範囲	
第3章 調査成果	
第1節 基本層序	17
第2節 石塚古墳群(1区)	
(1) 層序と自然地形	19
(2) 石塚1号墳(試掘4-3トレンチ)	19
i) 検出の経緯	
ii) 墳丘と周溝	
iii) 埋葬施設の構造	
iv) 出土遺物	
(3) 石塚2号墳	21
i) 検出の経緯	
ii) 墳丘と周溝	
iii) 埋葬施設の構造	
iv) 遺物出土状況	
v) 出土遺物	
(4) 石塚3号墳	33
i) 検出の経緯	
ii) 墳丘と周溝	
iii) 埋葬施設の構造	
iv) 遺物出土状況	
v) 出土遺物	
vi) 上層の中世土器	
(5) 石塚4号墳	51
i) 検出の経緯	
ii) 墳丘と周溝	
iii) 埋葬施設の構造	
iv) 埋葬主体の構造と位置	
v) 遺物出土状況	
vi) 出土遺物	
(6) 小結	67
第3節 古墳以外の調査の結果(芹生谷遺跡1~3区)	
(1) 1区の遺構と遺物	67
i) ビット	
ii) 溝	
iii) 遺構に伴わない遺物	
iv) 小結	
(2) 2区の遺構と遺物	68

i) 層序    ii) 河谷状地形    iii) 溝・ピット    iv) 遺構に伴わない遺物    v) 小結	
(3) 3区の遺構と遺物	72
i) 層序    ii) ピット    iii) 溝群    iv) 出土遺物    v) 小結	
第IV章 調査成果のまとめ	
第1節 芹生谷遺跡の調査成果	75
(1) 古墳時代    (2) 中世	
第2節 石塚古墳群の特徴	75
(1) 墳丘と石室    (2) 遺物の検討    (3) 石塚古墳群の位置付け	
引用・参考文献	82
図版	91
報告書抄録	巻末

## 挿 図 目 次

図 1  河内町周辺主要遺跡分布図 (1/50,000)	図 25  3号墳遺物出土状況・ 床面断ち割り平面図 (1/40)
図 2  調査地位置図 (1/4,000)	図 26  3号墳遺物出土状況拡大図 (1/20)
図 3  調査地周辺小字図 (1/5,000)	図 27  3号墳出土遺物実測図 (1) (1/4)
図 4  試掘4トレンチ遺構検出状況平面・ 土層断面略図 (平面1/400、断面1/200)	図 28  3号墳出土遺物実測図 (2) (1/4)
図 5  調査区配置図・遺構分布図 (1/1,000)	図 29  3号墳出土遺物実測図 (3) (1/4)
図 6  基本層序模式図	図 30  3号墳出土遺物実測図 (4) (1/4)
図 7  1区 (石塚2～4号墳) 平面図 (1/200)	図 31  3号墳出土遺物実測図 (5) (1/4)
図 8  1区西壁土層断面図 (1/100)	図 32  3号墳出土遺物実測図 (6) (1/2)
図 9  1号墳墳丘断面略図 (1/100)	図 33  3号墳出土遺物実測図 (7) (1/2)
図 10  2号墳平面図 (1/100)	図 34  3号墳出土遺物実測図 (8) (1/4)
図 11  2号墳周溝土層断面図 (1/40)	図 35  4号墳平面図 (1/100)
図 12  2・3号墳周溝遺物出土状況・ 土層断面図 (1/40)	図 36  4号墳石室平面・立面図 (1/40)
図 13  2号墳石室平面・立面図 (1/40)	図 37  4号墳石室・墳丘土層断面図 (1) (1/40)
図 14  2号墳石室・墳丘土層断面図 (1/40)	図 38  4号墳石室・墳丘土層断面図 (2) (1/40)
図 15  2号墳遺物出土状況図 (1/40)	図 39  4号墳遺物出土状況図 (1/40、1/20)
図 16  2号墳出土遺物実測図 (1) (1/4)	図 40  4号墳出土遺物実測図 (1) (1/4)
図 17  2・3号墳周溝出土遺物実測図 (1/4)	図 41  4号墳出土遺物実測図 (2) (1/4)
図 18  2号墳出土遺物実測図 (2) (1/2)	図 42  4号墳出土遺物実測図 (3) (1/4)
図 19  2号墳出土遺物実測図 (3) (1/2)	図 43  4号墳出土遺物実測図 (4) (1/2)
図 20  3号墳平面図 (1/100)	図 44  4号墳出土遺物実測図 (5) (1/2)
図 21  3号墳石室平面・立面図 (1/40)	図 45  4号墳出土遺物実測図 (6) (1/2)
図 22  3号墳石室遺物・礎床検出状況図 (1/40)	図 46  4号墳出土遺物実測図 (7) (1/4)
図 23  3号墳石室・墳丘土層断面図 (1/40)	図 47  1区包含層出土遺物実測図 (1/4)
図 24  3号墳茨道～墓道黒色土中礎・ 須臾器検出状況図 (1/40)	図 48  2区遺構平面・北壁土層断面図 (1/200)
	図 49-1  3区西遺構平面図 (1/200)
	図 49-2  3区東遺構平面図 (1/200)
	図 50  3区東壁・西壁土層断面図 (1/80)

図 51	3区ほか包含層出土遺物実測図 (1/4)	図 54	遺物組成・器種組成
図 52	調査区地形復元図 (1/2,000)	図 55	須恵器法量
図 53	石室規模の比較	図 56	芹生谷遺跡周辺の古墳 (1/25,000)

## 表 目 次

表 1 石塚古墳群一覧

表 2 遺物観察表

## 写真目次

写真 1 2区南壁東側(北西から)

写真 5 3号墳墓道検出状況(南西から)

写真 2 2・3号墳周溝検出状況(南東から)

写真 6 3号墳東側壁と袖石(北西から)

写真 3 2号墳西側大石検出状況(西から)

写真 7 3号墳石室上層の礎(東から)

写真 4 3号墳羨道・墓道上層の礎(北西から)

## 図版目次

図版 1	芹生谷遺跡調査地遠景・調査前	1. 芹生谷遺跡遠景	2. 金山古墳から調査地を臨む(南から)	3. 1区調査前(南から)	4. 2区調査前(西から)	5. 3区調査前(東から)
図版 2	石塚 1号墳	1. 石室検出状況(南から)	2. 北壁土層断面・石室奥壁部(北から)	3. 不定形土坑土層断面(北から)		
図版 3	芹生谷遺跡 1区 全景(石塚 2～4号墳)	1. 1区全景(南東から)	2. 2号墳全景(西から)			
図版 4	石塚 2・3号墳周溝	1. 2号墳北側周溝土層断面(西から)	2. 拡張前調査区南壁断面(北から)	3. 拡張前2号墳墓道 須恵器検出状況(西から)		
図版 5	石塚 2号墳 石室	1. 石室検出状況(拡張後・西から)	2. 奥壁側(西から)			
図版 6	石塚 2号墳 石室完掘状況	1. 北から	2. 南から	3. 東から		
図版 7	石塚 2号墳 石室掘り方土層断面	1. 北側壁(西から)	2. 奥壁(南から)	3. 南側壁(西から)		
図版 8	石塚 2号墳 石室内遺物出土状況/床面断り割り状況	1. 奥壁方向(西から)	2. 奥壁南隅(西から)	3. 床面断り割り・排水溝土層断面(西から)		
図版 9	石塚 3号墳 全景	1. 南西から	2. 南東から(手前は2号墳)	3. 南西から		
図版 10	石塚 3号墳 石室完掘状況(1)	1. 南西から	2. 玄室(南東から)	3. 玄室～羨道(南東から)		
図版 11	石塚 3号墳 石室完掘状況(2)	1. 玄室(北西から)	2. 玄室～羨道(北西から)	3. 床面断り割り状況(北東から)		
図版 12	石塚 3号墳 石室掘り方土層断面/石室内埋土堆積状況	1. 東側壁掘り方(北東から)	2. 掘り状況(南から)	3. 玄室中央断面(北東から)		
図版 13	石塚 3号墳 墓道遺物出土状況	1. 墓道上層堆積土中 須恵器長頸壺(南西から)	2. 墓道床面(南東から)			
図版 14	石塚 3号墳 墓道～羨道下層・床面遺物出土状況	1. 墓道床面(南東から)	2. 玄室から羨道方向(北東から)	3. 左袖部(南東から)		
図版 15	石塚 3号墳 玄室・奥壁部分遺物出土状況	1. 羨道から奥壁方向(南西から)	2. 北東側(手前は奥壁)	3. 須恵器取り上げ後 下層須恵器・鉄製品出土状況(南西から)		
図版 16	石塚 4号墳 全景	1. 検出状況(トレンチ拡張前・南東から)	2. トレンチ拡張後(南西から)			

- 図版 17 石塚 4 号墳 石室完掘状況 (1) 1. 奥道から奥壁方向 (南西から) 2. 玄室から奥道方向 (北東から)
- 図版 18 石塚 4 号墳 石室完掘状況 (2) / 石室掘り方断面  
1. 南東側壁を臨む (北西から) 2. 北西側壁を臨む (南東から) 3. 南東側壁掘り方土層断面 (北東から)
- 図版 19 石塚 4 号墳 玄室遺物出土状況 1. 奥道から奥壁方向 (南西から) 2. 奥壁から奥道方向 (北東から)
- 図版 20 芥生谷遺跡 1 区 溝・土坑土層断面 / 2 区 完掘状況  
1. SP1 (南から) 2. SP7 (南から) 3. SP3 (南から) 4. SD12 (南から) 5. SD15・16 (西から)  
6. SD17・18 (南西から) 7. 2 区完掘状況全景 (東から)
- 図版 21 芥生谷遺跡 3 区 完掘状況 1. 西側 (東から) 2. 東側 (東から)
- 図版 22 芥生谷遺跡 3 区 土層断面 / 遺構検出状況  
1・2. 東壁土層断面 (西から) 3. 西側完掘状況 (南から) 4. SP77 (西から) 5. SD59 ~ 61 (北東から)  
6. 東側検出状況 (東から) 7. SP42 (西から) 8. SP43 (西から) 9. SD37・38・40 (東から) 10. SD25・30 ~ 32 (東から)
- 図版 23 芥生谷遺跡 式掘 3・4 トレンチ / 石塚 2 ~ 4 号墳保存状況  
1. 3 - 2 トレンチ遺構検出状況 (西から) 2. 4 - 2 トレンチ緩衝状遺構 (南西から) 3. 保存・看板設置状況 (北から)
- 図版 24 石塚 2 号墳・4 号墳出土遺物集合 1. 石塚 2 号墳石室出土遺物 2. 石塚 4 号墳石室出土遺物
- 図版 25 石塚 3 号墳出土遺物集合 1. 須恵器・土師器 2. 鉄製品・耳環・玉類・石製紡錘車
- 図版 26 石塚 2 号墳石室出土須恵器 [1 ~ 8]
- 図版 27 石塚 2 号墳石室出土須恵器・土師器 [9 ~ 16]
- 図版 28 石塚 2 号墳・3 号墳周溝出土須恵器 [17 ~ 20]
- 図版 29 石塚 2 号墳石室出土鉄製品・装身具等  
1. 鉄鏃 2. 鉄釘 3. 農工具 4. 不明鉄製品 5. 耳環 6. 水晶切子玉 [21 ~ 36]
- 図版 30 石塚 3 号墳石室出土須恵器 (1) [37 ~ 48]
- 図版 31 石塚 3 号墳石室出土須恵器 (2) [49 ~ 54]
- 図版 32 石塚 3 号墳石室出土須恵器 (3) [55 ~ 61]
- 図版 33 石塚 3 号墳石室出土須恵器 (4)・土師器 (1) [62 ~ 69]
- 図版 34 石塚 3 号墳石室出土須恵器 (5)・土師器 (2)・石製紡錘車・有機物サンプル  
1. 須恵器・土師器 2. 石製紡錘車 3. 有機物サンプル (骨か) [70 ~ 73, 95]
- 図版 35 石塚 3 号墳石室出土鉄製品・装身具 1. 鉄鏃・刀子類 2. 鉄斧 3. 鉄釘 4. 耳環・玉類 [74 ~ 94]
- 図版 36 石塚 3 号墳石室上層出土土師器・瓦質土器 1. 土師器 2. 瓦質土器 [96 ~ 105]
- 図版 37 石塚 4 号墳石室出土須恵器 (1) [106 ~ 117]
- 図版 38 石塚 4 号墳石室出土須恵器 (2) / ヘラ記号 [118 ~ 120]
- 図版 39 石塚 4 号墳石室出土須恵器 (3) [121 ~ 125]
- 図版 40 石塚 4 号墳石室出土須恵器 (4)・周溝出土須恵器 [126 ~ 132]
- 図版 41 石塚 4 号墳石室出土鉄製品・装身具・木材 1. 鉄鏃 2. 鉄斧 3. 鉄釘 4. 玉類 5. 木材 [133 ~ 146]
- 図版 42 芥生谷遺跡 1 ~ 3 区包含層出土遺物 / 試掘トレンチ等出土遺物  
1. 1 区黄岩相出土瓦質土器・土師器 2. 1 区包含層出土瓦質土器・土師器 3. 2 区包含層出土遺物  
4. 3 区 SD00 出土土師器 / 包含層出土瓦質土器・土師器 5. 遺跡周辺出土土師器 6. 試掘トレンチ出土遺物 [147 ~ 153ほか]

## 第1章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査地の位置と周辺調査

#### (1) 調査地の位置と地理的環境

調査地は大阪府の東南部、南河内郡河南町大字中に所在する。河南町は北は太子町、西は富田林市、南は千早赤阪村、東は葛城山の頂をもって奈良県葛城市、御所市と接している。北には大和の飛鳥に通じる竹内峠があり、葛城山の南、金剛山の間には葛城の地へと通じる水越峠がある。また、西側には石川が北流し、陸路・水路の交通の要衝といえる。

葛城山からのびる山塊の西側では、東西約1km、南北約3kmの段丘地形が良く発達しており、通称「河南台地」と呼ばれる。現地表の標高は、台地南端の川野辺地区付近でT.P.+150m、金山古墳付近でT.P.+132m、北端付近の北別井地区でT.P.+72mを測り、平らな面が緩やかに北に傾斜するとともに徐々にその幅を広げる。台地の南では葛城山と金剛山の間を通過して水越川が流れ、千早川と合流する。この合流した千早川(旧東条川)は、急崖となった台地の西側を北流し石川に合流する。一方、台地の東縁辺では、馬谷川が台地と山地を区画するように北流する。この川は台地のほぼ中央を下刻する天満川、葛城山から西流してきた平石川などと合流後、梅川となって石川に流れ込む。こうして葛城山地からの豊富な谷水は、台地上に上ることなく台地の縁辺を北流することとなる。

地質的にみると葛城山は領家変成帯に属する花崗岩類によって構成され、その前面には砂礫と粘土からなる大阪層群、段丘礫層が、さらにその前面には軟弱な粘土と砂礫からなる沖積層がある。葛城山地の北にある二上山は瀬戸内火山系に属する火山で、安山岩類で構成される二上層群からなる特殊地域である。その噴出物である長石讃岐岩(サヌカイト)は石器の材料に、凝灰岩は石棺や建築材料に、ざくろ石安山岩の風化堆積物は金剛砂という研磨剤として古くから利用されており有名である。河南台地は花崗岩類が風化したマサ土で形成され、地形的には段丘高～中位面に分類されている。段丘中位面が大阪層群のM<sub>12</sub>層に対応するとの知見から、おおよそ4万年以降に形成された地形と考えられている(古川1993)。

**調査地の微地形** 調査地は、河南台地の南奥東寄りに位置し、南方約300mにある金山古墳と同じ台地上に立地する。台地の東は馬谷川が流れる谷、西は台地中央を侵食する谷と、二つの谷に挟まれて徐々に低くなりながら南北にのびている。しかしこの台地上も、調査地の北側に複数の溜池が分布することからも分かるように、平坦ではない。現地形では東西の道路(町道石線線)によって分断されているが、すぐ北の五分一池・白木下池へと続く低地が調査地に半ば以上入り込み、東側で比高差2m弱の崖面を伴ってごく小規模な谷を形成し、調査地の東から南東を微高地状に画している。この微高地は調査地のすぐ東の道路、府道柏原駒ヶ谷線付近が最高所となるものと考えられる。

**水利環境と条里** 水利環境については山田(1993)に詳しく、ここでは周辺域についてまとめておく。千早川や葛城山地からの水は台地縁辺や台地に下刻された谷を流れるため、台地表面へ引き込むことは困難である。したがって台地上への灌漑は南の水越川から取水された水路がその用を成すこととなる。基幹水路は3本あり、大島水路、保止路水路、畑田水路と呼ばれる。大島水路は台地の東を広く灌漑する水路である。式内建水神社の東約0.1kmにある取水樋から、水分、川野辺、芹生谷集落の中央を走る道路に沿って北流し、水垣水路や赤染水路などと分流しながら台地の東を覆うような水路網を形成する。調査地のすぐ東にはこの大島水路が流れ、西には金山古墳の東で分水された赤染水路が流れる。

川野辺の集落から金山古墳へは北北西へ自然谷が入りこみ、金山古墳の西側では比高差10m近い崖面を成している。川野辺集落で分水された水垣水路は、ちょうどこの谷を流れている。

現在の町村境界をまっすく北流するのは大柳水路で、大島水路とは水分集落の北端付近で分岐したものである。台地西側で最も高い位置を流れるこの水路は東西どちらへも灌漑が可能である。

台地の西側、保止路水路は大島水路の取水口から約600m下流で取水され、台地西縁の崖を北流、レベルを調整しながら台地上へと導かれる。畑田水路の取水口は、水越川と千早川の合流地点付近にあり、同じく台地西縁の崖を北流し台地上へ至る。

台地上の溜池は水路の不足を担うためのものであるが、文献史料からほとんどが江戸時代の開発に伴うものと考えられる。なお、調査地付近で年代が明記されているのは東にある上池の寛文4(1664)年である。水路の名は、文献史料では慶長9(1604)年に大島水路と見られるのが初出である(野村1952)。

また台地上には広範に条里の跡が残っている。元慶7(883)年に記された『観心寺勸修縁起資材帳』には石川郡「仲村荘」や「杜屋荘」の記載があり、田地の表記には条里呼称が使われている。文献史料からは、9世紀末以前には、台地全体に地割に基づいた開発が及んでいたかどうかは別として、条里プランが施行されていたこととなる。ただし、坪境が整然とした区画を成している一方で、一坪内の耕地一筆の区画は必ずしもそうではない。特に芹生谷遺跡周辺では、等高線に沿った弧状の区画が顕著にみと取られ、条里区画に従いながらも地形に沿った耕地開発が行われていたことが地図上から読み取れる。

## ② 既往の調査成果と歴史的環境

芹生谷遺跡は、一般国道309号(河南赤阪バイパス)整備工事に先立つ試掘調査で、平成19(2007)年度に発見され、周知された遺跡である。大阪府教育委員会が、河南町大字中から千早赤阪村大字川野辺にかけての全長約700m、幅員約21mの南北に走る新設道路区域全面が調査対象として、平成26年度までに計8回の調査を行っている(図2、大阪府教委2011～2013)。調査の経緯についてはここでは詳述を避け、調査の成果を時期ごとにまとめ、該期の歴史的環境についても述べておきたい。

**縄文時代** 包含層から、外面が灰色に風化したサヌカイト製の削器や石錘(20-1～5区)、石槍(21-2区)、剥片類が出土している。報告のなかで石器製作址の存在も推定されているが、遺構は検出されていない。

遺跡の北北西約1.5kmには神山遺跡があり、標高87～92mの段丘面および弱状地上に立地する縄文時代の集落と考えられている。大阪府教育委員会の昭和62(1987)年の調査では河道から縄文時代早期の押型文土器のほか、前期・後期の土器・石器が出土している(大阪府教委1988)。また畑田地区でも、河道から押型文土器や中期末と考えられる加曽利E式系の文様を有する土器が、包含層から中期末から後期初頭の土器が出土している(河南町教委1989年調査)。河道出土の土器はローリングをあまり受けておらず、土器のみ出土する分厚い包含層があることから周辺の台地上に縄文集落の存在が考えられる。また寛弘寺遺跡でも落とす穴などが検出されている。

そのほか遺構は確認されていないが千早赤阪村大森遺跡、河南町山城廃寺、富田林市錦織遺跡・西板持遺跡などで縄文土器が出土しており、台地上を広く活動領域にしていたようである。やや離れるが太子町ミヤケ北遺跡では、滋賀里Ⅲ式期の土器棺墓や土坑が検出されており、台地上だけでなく、不安定な砂州上にも足跡を残している。

**弥生時代** 芹生谷遺跡ではこの時代の遺物は検出していない。弥生時代前期に遡る遺跡は周辺には見当たらず、大和川と石川の合流する付近まで北上すれば船橋遺跡、国府遺跡がある。弥生時代中期になって石川中流域に集落が出現し、羽曳野市と富田林市にまたがる喜志遺跡、富田林市中野道跡・甲田南遺

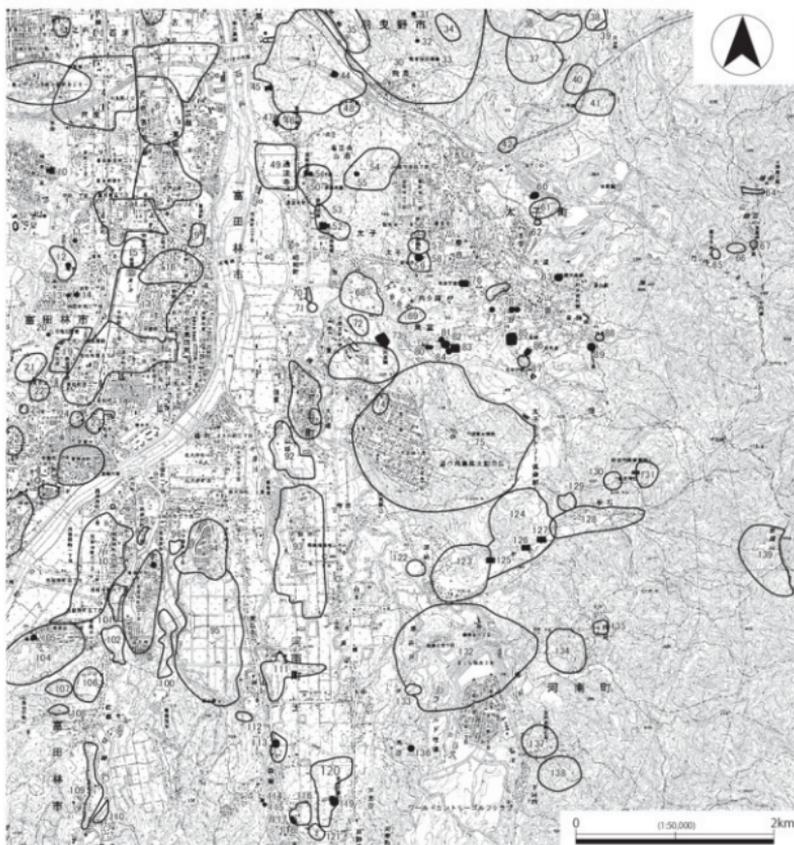


図1 河南町周辺主要遺跡分布図

1. 城山遺跡 2. 蔵之内遺跡 3. 西浦東遺跡 4. 尺度遺跡 5. 農林センター敷布地 6. 東阪田遺跡 7. 草志遺跡 8. 草志西遺跡 9. 草志南遺跡
10. 平1号墳 11. 鍋塚古墳 12. 宮神社北山古墳群 13. 宮前山古墳 14. 真名井古墳 15. 粟ヶ池遺跡 16. 松井遺跡 17. 中野北遺跡 18. 中野遺跡
19. 新堂庵寺 20. お亀石古墳 21. 新堂古墳群 22. 新堂南遺跡 23. 畑ヶ田遺跡 24. 堀ノ内遺跡 25. 明家遺跡 26. 富田林寺内町遺跡 27. 毛人谷遺跡
28. 谷川遺跡 29. 甲田遺跡 30. 飛鳥千塚古墳群 31. 鉢状山南峰古墳 32. 巖倉塚上古墳 33. 巖倉塚古墳 34. オウコ古墳群 35. 駒ヶ谷古墳群
36. 石万尾遺跡 37. 篠山遺跡 38. ドンズルボー遺跡 39. ドンズルボー石切場跡 40. 穴虫峠遺跡 41. 牡丹洞石切場遺跡 42. 柏塚遺跡
43. 駒ヶ谷遺跡 44. 籠塚古墳 45. 登井丸山古墳 46. お祭山遺跡 47. お祭山古墳 48. 河内飛鳥寺跡 49. 通法寺朱鳥遺構 50. 通法寺遺跡
51. 通法寺裏山古墳 52. 丸流谷古墳 53. 丸流谷遺跡群 54. 御嶽山遺跡 55. 御嶽山古墳 56. チンチの森遺跡 57. 歌福寺遺跡 58. 上城古墳(聖徳太子墓)
59. 歌福寺 60. 茶臼山古墳(紀古藤屋跡出土地) 61. 地蔵谷遺跡(旧妙見寺) 62. 片原山遺跡(栗女竹良坐陣城跡出土地) 63. 上山古墳(孝徳天皇陵)
64. 二上山城 65. 鹿谷寺跡 66. 岩船峠西方石切場跡 67. 岩船 68. 伽藍山遺跡・伽藍古墳 69. 上所遺跡 70. ミヤケ北遺跡 71. ミヤケ遺跡
72. 粟家西墓群跡 73. 奥城古墳(敏達天皇陵) 74. 東山遺跡 75. 一領賀古墳群 76. 向山古墳(用明天皇陵) 77. 山田古墳 78. 松井塚古墳
79. 仏陀寺古墳 80. 塚穴古墳 81. モンド塚古墳 82. 釜戸塚古墳 83. 粟家塚古墳 84. 石塚古墳 85. 高松古墳(推古天皇陵) 86. 二子塚古墳
87. 長野前遺跡 88. 万法藏院跡 89. 伝小野種子墓 90. 大ヶ塚寺内町遺跡 91. 大ヶ塚城跡 92. 山城岡寺 93. 別井遺跡 94. 西大寺山古墳群・彌山城跡
95. 真土寺遺跡・古墳群 96. 山中田北遺跡 97. 梅田遺跡 98. 板付古墳群 99. 板付丸山古墳 100. 尾平遺跡 101. 柿ヶ坪遺跡 102. 下佐崎南遺跡
103. 西板付遺跡 104. 鏡方遺跡 105. 鏡方丸山古墳 106. 佐藤神社南遺跡 107. 藤谷南遺跡 108. イタゴ古墳群 109. 佐藤川西岸遺跡 110. 岸之本遺跡
111. 神山遺跡 112. 神山丑神遺跡 113. 大森遺跡・大森塚古墳 114. 森原1号墳 115. 森原2号墳 116. 御所所遺跡 117. 御所所北古墳 118. 御所所古墳
119. 金山古墳 120. **厚生谷遺跡・石塚古墳群** 121. 川野切遺跡 122. 加納遺跡 123. 加納古墳群 124. 平石古墳群 125. シンコウ古墳
126. アサハ古墳 127. ツカマノ古墳 128. 平石遺跡 129. 平石城跡 130. 磐船神社遺跡 131. 高貴寺 132. 白木古墳群 133. 下河内敷布地
134. 持尾遺跡 135. 持尾城跡 136. 馬谷古墳 137. 弘川古 138. 陣屋山城跡 139. 持尾古墳群

跡が挙げられる。弥生時代後期には丘陵上に集落が形成されるようになる。羽曳野市駒ヶ谷遺跡・御前山遺跡、太子町チンチの森遺跡・葉室西峯遺跡、河南町寛弘寺遺跡・神山遺跡・東山遺跡などである。河南台地の西側、東條川を越えた丘陵に占地する寛弘寺遺跡では、尾根上に百数十棟を超える堅穴建物が出発されている。数度の建替えを行う住居がかなりあり、定住的な居住域を形成していたと考えられる。

**古墳時代** 芹生谷遺跡では前期から中期の遺物は出土していない。中期には、神山遺跡で集落が発見されており初期須恵器や韓式系土器、製塩土器が出土している（大阪府教委 1988）。韓式系土器は御旅所遺跡や別井遺跡といった台地に点々と分布が認められる。また、別井遺跡の溝から出土したTK47 型式期の須恵器（河南町教委 1998 調査）は、台地上の開発の始まりについて示唆する。この溝は自然流路と考えられるが、ほぼ南北方向に走っており、条里地割の基準となるラインが設定された可能性も指摘される。

6 世紀後半に河南台地上やその周辺に多くの古墳が築造されていることは古くから知られていた。昭和 21(1946) 年には、小林行雄氏が「この谷奥の地帯にも往時は相當数の古墳があつたようであるが」と述べるなかで、今回発見に至った石塚古墳の存在を予測している（大阪府教委 1953）。

河南台地上には御旅所古墳群、金山古墳、今回調査の石塚古墳群、やや北に離れて井阪古墳が点在する。台地西側の丘陵には森屋古墳群、神山丑神古墳群、寛弘寺古墳群、西大寺山古墳群が築かれており、これらは一連の古墳群と捉えられる。さらに台地南奥の丘陵には浄真寺山古墳が分布する。台地東側の丘陵には白木古墳群、加納・平石古墳群、一須賀古墳群が築かれるなど、河南台地やその周辺の丘陵地は古墳時代後期から終末期にかけて町内だけで 300 基を数える古墳の集積地とも言えるべき様相を呈し、かつその様相もバラエティに富んでいる。以下、簡単にではあるが、各古墳について記しておきたい。

台地の南奥部分、調査地から約 300m 南には金山古墳が見える。金山古墳は墳丘長約 86m を測る双円墳で、北丘の横穴式石室の玄室と羨道にそれぞれ割り抜き式の家形石棺を納め、TK43 ～ TK209 型式期の年代が与えられている。金山古墳の西約 400m には御旅所古墳、御旅所北古墳があり、後者にはやはり玄室と羨道にそれぞれ組合式石棺がおさめられていた。出土した須恵器は金山古墳と同型式であり、その関係性が注目される。

寛弘寺集落の西側、神山遺跡内では主体部不明の円墳（17 m）と横穴式石室を主体部とする墳形不明墳の計 2 基が確認され、井阪古墳と名付けられている（河南町教委 2004 調査）。出土土器から 6 世紀初頭と 6 世紀末から 7 世紀初頭に比定される。森屋古墳群は既に消失しているが、千早川のすぐ西側の丘陵にあったと伝えられている。6 基からなり、1 号墳と 2 号墳は横穴式石室を伴っていたという。M15 ～ TK10 型式期の脚付有蓋子持壺・台付壺、子持ち器台などが付近から採集されている。台地より奥に入った丘陵上に立地する浄真寺山古墳は大正時代までは石室が存在したと伝えられ、TK209 型式期の杯蓋が出土している（千早赤阪村教委 1983、2005）。なお、大森塚（大森古墳）は鎌倉時代の武將大森彦七の墓という伝承のある高まりであり、未調査のため古墳であるかどうかは今後の調査が待たれる。

台地西側の寛弘寺古墳群は古墳時代前期から 90 基以上が連続と築かれ続ける群集墳であり、墳形、主体部も横穴式石室から堅穴系小石室、土壇墓、土器棺墓などとバラエティに富む。神山丑神古墳群では、1 基が 6 世紀初頭に、ほか 7 基は 6 世紀後半から末葉とされる計 8 基の古墳が調査されており、さらに南方にも古墳の存在が想定されている。ほぼ同時期、同規模、同構造の横穴式石室をもつ古墳が 100m 四方ほどの狭小な空間のなかで造営される限定されたあり方を示し、寛弘寺古墳群に見られた多様性には見受けられない（大阪府教委 1992、1993）。

台地の東では、白木古墳群が加納・平石古墳群と平石川を挟んだ南の山塊に位置する。分かっている



だけで13基の小墳が尾根上に点在しており、消滅した古墳も多い。横穴式石室のほか、白木古墳のように切石を用いた精美的な構造をもつ横口式石槨も報告されており、加納・平石古墳群とならぶ時期に築造されたものと思われる。河南台地の北東、大和飛鳥に通じる平石谷では、加納・平石古墳群が築かれる。いずれも6世紀末から7世紀前半にかけての墳墓であり、横穴式石室を主体部とする円墳が7基と、40m級の大型の長方墳で切石の横口式石槨をもつシシヨツカ古墳・アカハゲ古墳・ツカマリ古墳が築かれている。ただしシシヨツカ古墳は美道部出土須恵器が6世紀後半（TK43型式期）に比定され、従来の横口式石槨の構造型式による年代観との違いが議論となった。

平石谷の北の丘陵には後期の横穴式石室を主体にする一須賀古墳群が築かれている。6世紀初頭から7世紀後半まで約260基の小円墳が築かれ続け、渡来系集団の造営と示唆される古墳群である。一須賀古墳群のある丘陵の北方は用明や推古など王陵に比定される墳墓が集中し、王陵の谷とも呼ばれる。

古墳時代の集落については、芦生谷遺跡内、今回調査地のすぐ西側でTK43型式期の堅穴建物4棟と掘立柱建物4棟が見つかった（大阪府教委2013）。いずれも軸を同じくし、堅穴建物は建替を伴っている。調査区内から出土した須恵器はTK43型式期に限られており、短期間の集落であったようである。

周辺の集落跡を見ると、御旅所遺跡で堅穴建物跡が検出され、5世紀末の韓式系土器が出土している（千早赤阪教委2007）。大森遺跡では自然河川から、土師器小型丸底壺と高坏や須恵器杯が出土しており、近辺の遺跡の存在が示唆される（千早赤阪村教委2007）。神山遺跡では中期の堅穴建物が数棟密集してみつかっており、すぐ西の寛弘寺古墳群との関連が考えられる。神山丑神遺跡では、古墳時代後期の堅穴建物と掘立柱建物が、古墳と隣接もしくは重複して検出されている。急斜面地であり居住空間としてのあり方ではなく、古墳築造過程に関わる祭祀が想定されている。そのほか太子町上所遺跡で古墳時代前期・中期の堅穴建物が、伽山遺跡でも中期の堅穴建物が確認されている。

古墳時代後期に活発となる古墳の造営と軌を一にするように台地上には集落と考えられる遺跡が点在する。しかしいずれも小規模で単独で寛弘寺や一須賀など100基単位の群集墳を造営した集団とは捉えがたい。さらに金山古墳や平石古墳群のような隔絶した在り方を示す墳墓や、群集墳でもなく点在する小古墳の造営主体との関係性など今後追及すべき課題である。

**奈良・平安時代** 遺跡内南側の小丘陵上（21-1・2区）では、ピットや溝、土坑が検出されるなど、平安時代後期の集落の存在が想定されている。

正方位を示す溝によって、時期は限定できないものの平安時代後半から鎌倉時代頃に条里を伴う農耕地が広がっていたと推測される。上述した別井遺跡では南北方向の溝から8世紀の須恵器が、上流にあたる千早赤阪村川野辺遺跡では、現在の道路に沿った方向の溝から墨書土器を含む9世紀の遺物が出土しており、8世紀代には台地上に条里プランが施行されていたことを示す一資料となる。

寛弘寺遺跡では奈良時代以降も引き続いて墓として利用されている。東の丘陵でも双鳳文八稜鏡の出土した馬谷古墓、東山遺跡などで墓が確認されている。神山遺跡では奈良時代から平安時代にかけての遺構が確認され、当該期の集落が段丘上に広がると予想される。

石川流域の古代寺院は、石川と大和川の合流付近である古市・志紀郡に比べ分布密度が低い。富田林市にある新堂庵寺は飛鳥時代の創建で、白鳳期の再建伽藍の一部が確認されている。その他は、瓦が採集されているだけで伽藍等が不明な寺院が多い。高貴寺や弘川寺も創建は奈良時代とも伝わり、平安時代には堂塔整っていたようである。台地の北方、山城庵寺では瓦や硯が出土し掘立柱建物が検出されるなど（大阪府教委2010）、山代忌寸真作の墓誌に象徴されるように、官人を輩出する土地であったと言える。

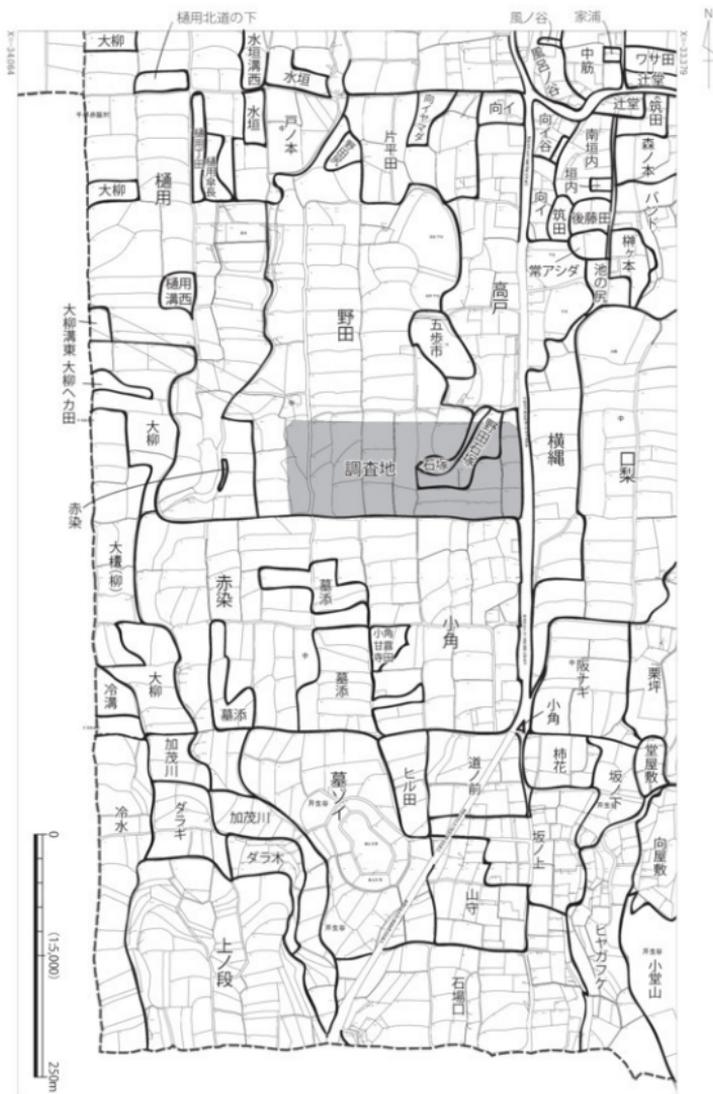


図3 調査地周辺小字図

付近の寺院で異彩を放つものとして、奈良時代に造営された石窟寺院、鹿谷寺跡と岩屋をあげることができる。両者は二上山麓の凝灰岩石切場跡を利用して造られたもので、遠くインドに起源をもち、この地域の特異性を物語っている。

中世以降 芹生谷遺跡では調査区全域にわたって、南北朝期の掘立建物や、柱穴群、土坑、溝、耕作溝が検出されており、中世期にも集落と耕作地が広がっていたものと考えられる。25区調査での青白磁片や白磁椀完形品の存在は、集落内の墓の存在を示唆する。22・A・B区調査では土器の時期が13～14世紀に限定されることから、中世後期以降に居住区と水田域が分かれた結果、遺物が含まれなくなったと推定されている。現在に残る条里区画の景観は、中世に行われた耕地開発や集落の形成とも大きく関わっていると考えられるのである。

一方で周辺は千早赤阪村とともに南北朝期の戦乱の舞台となっており、城跡も多く残されている。台地南の丘陵には千早城跡・楠木城跡（上赤坂城跡）・赤坂城跡（下赤坂城跡）をはじめとした城砦群や、楠木公誕生地遺跡といった館跡も存在する。台地東の丘陵にも、陣屋山城跡（弘川塁）、持尾城跡、平石城跡などがある。建水分神社や高貴寺、弘川寺、寛弘寺などの寺社伽藍は戦乱で焼失したと文献にある一方、正和四年銘の寛弘寺・神山墓地の五輪塔や高貴寺の層塔など、石造物も点在している。地域の人々がこうした戦いに関与したかどうかは別として大きく影響を受けていたものと思われる。大野千軒や多々良千軒として伝わる集落もこうした戦乱によって廃絶された可能性は高い。中世後期の16世紀代には大ヶ塚や富田林など寺内町が勃興し、石川の水運を背景に町場が栄える。近世には石川郡・古市郡にまたがる一万石の代官所として、白木と東山に陣屋が営まれていることが文献に残り、白木の石垣がかつての繁栄の面影をうかがわせるのである。

## 第2節 調査に至る経緯と経過

### (1) 調査に至る経緯

2011年9月30日、大型商業施設の建設に先立ち、都市計画法第29条の規定による開発許可の申請を受けて、事業者と河南町教育委員会は関係課とともに協議を行った。開発面積22,587.29㎡のうち一部は芹生谷遺跡にかかり、包蔵地外にも遺跡が広がる可能性があることから、確認調査・試掘調査を早期実施することで同意した。試掘の位置について継続的に協議を行い、2012年1月27日付で事業者から試掘依頼書が提出された。それを受けて町教育委員会は2012年3月1日から3月15日まで、建物の基礎や駐車場造成等によって地下に影響すると思われる範囲を、9か所のトレンチを設けて試掘調査を行った。その結果、試掘を行った約580㎡で遺跡範囲外でも遺構や遺物包含層が確認された。その成果に基づいて文化財保護法96条第1項に基づく遺跡発見届の法手続きがなされ、遺跡範囲が北東側に拡大することとなった。さらに発掘調査を必要とする措置がとられ、調査範囲や方法等について事業者と協議を行った。6月まで続いた協議の結果、特に石室状遺構や寝敷状遺構といった顕著な遺構が検出された試掘4トレンチ部分については、設計変更を行って保存を図り本調査は行わないこと、遺構が検出された3-3、8-3、9-2トレンチと石室状遺構との関連が目される4トレンチ西側については本調査を行うことで同意に至った。また、敷地北側に設けられた受水槽部分については新たに確認調査が必要であるため、本調査と並行して確認調査を行うこととした（試掘10トレンチ）。なお発掘調査前の6月29日には事業者による地元説明会が行われている。

### (2) 調査の経過

2012年7月10日に調査について覚書を交わし、12日には本調査にかかるトレンチ設定と周辺の伐開を行った。17日には試掘10トレンチとして受水槽部分について確認調査を行ったが、耕土直下に包含層が堆積しているものの、遺物はごくわずかで遺構は検出しなかったため、確認調査で終えることとした。

本調査の調査区は東から1～3区とし(図2)、工程としては1区から順に調査を進めていく予定であった。しかし1区の調査を開始したところ2基もの石室が検出されたため、調査時間を確保するため1区と併行して2区と3区も進めていくこととなった。工程としては、1区は7月18日から10月31日まで、2区は7月30日から8月10日まで、3区は8月20日から9月20日まで行った。

調査は、試掘結果に基づき耕土部分は重機によって、包含層は人力によって掘削を行い、地山面で遺構を検出した。調査地は高い部分を削平し、低地部に盛土を行って段々畑を造成していた。そのため耕土直下が地山面となる高い部分では、水田床土と考えられる層を基準に機械掘削を止め、人力掘削によって遺構面を検出した。1区で検出した石室のうち、2号墳と4号墳は石材が落ち込んでおり、人力での除去が不可能であった。そのため、土質や石材の状況から原位置を留めていないと判断した石材および攪乱土については機械で除去し、掘削を行った。

1区で古墳が検出されたことから、地形から考えて1区の東側にも古墳が存在する可能性が出てきた。事業者と協議を行い、調査期間内の調査終了という条件で調査を行った。

9月4日にトレンチ調査を行ったところ、2号墳の存在を確認した。そして9月5日に1区東側を拡張した。同時に、3号墳の周溝が続くであろう1区南側の通路部分も調査区として拡張した。さらに9月28日には、4号墳の石室開口部のかかる北西壁部分も拡張した。10月10日時点で掘削等は終了していたが、図面や現地公開のために1区の埋戻しを10月31日に行い、1～3区の現地作業を完了した。遺構検出面は1面、遺構検出数は石室4基を含めて107基、出土遺物はおよそ40cm×60cmのケースで土器約20箱と鉄・石・木製品等3箱である。

**本調査後の経過** さらに店舗の建築に伴って1～4号墳の石室部分を着工する際には立会調査を行った。2013年8月1日には調査区外、受水槽部分の掘削工事に立会い4号墳から北側に続く崖面を調査したが、顕著な遺構は確認されなかった。8月28日には1区部分の造成工事に立ち会い、保存のため2～4号墳石室上部を土で覆ったことを確認した。11月26日から12月2日にかけては1号墳(試掘4トレンチ)の北が削平されたため、土層断面の記録保存を行い擁壁の着工に立ち会った。また12月25日には調査地の北側で看板の基礎工事に立会い、GL-2.5mと影響範囲は盛土中におさまる結果となった。

**整理作業** 整理作業は現地作業終了後、引き続いて実施した。途中作業の中断を経ながらも2015年3月の本書の刊行をもって終了した。

**古墳名称** 古墳群の新規発見に伴い、2012年12月に大阪府教育委員会と埋蔵文化財包蔵地の取扱い変更協議を行い、地元での土地の呼称と小字名(図3)を考慮して「石塚古墳群」とした。

**古墳の保存** 調査を行った2～4号墳の石室は事業者の好意により、現地で埋戻され保存されている。もともと削平部分となっていたが、石室の残存状況の良さから保存の要望を伝えていたところ、調査中の2012年9月27日に事業者と協議を行い、設計変更を行って削平を避け、緑地部分として現地での保存が可能となったものである。埋戻しの方法については検討の結果、石室内部に掘削土を充填・転圧を数度繰り返して行うこととした。マサ土や土糞等による埋戻しは確かに分かりやすくはあるが、掘削土を用いることでできるだけ調査前の環境を保ち、土や石材の落ち込みを防ぐことを重視した。

現在は2～4号墳の石室の位置が駐車場内の緑地となり、写真と説明文を付した看板が建っている(図版23-3)。事業者の好意に感謝したい。

**普及・啓発** 地域住民や関係者への説明を現地で随時行うとともに、2012年10月11日には千早村立赤阪小学校、10月24日には河南町立中村小学校の児童が見学を行った。24日には報道関係者に現地説明を

行い、11月29日に報道発表を行った。12月1日には大阪府教育委員会調査の芦生谷遺跡現地公開を共催し、現地を公開することはできなかったが、出土した遺物を展示して説明を行った。2013年2月2日から2月11日には大阪府立近つ飛鳥博物館でスポット展示を行った。また2012年9月15日には古代学研究会9月例会で、2013年6月1日には考古学研究会関西例会で概要を報告したほか、町広報誌1月号、季刊考古学123号で概要を報告している。報告の機会をいただいたことに感謝したい。

### ㉓ 調査の方法

**地区割、高さ、方位、色調、遺構番号、遺物番号** 凡例に示した通りであるが、一部調査中と呼称が異なるものがあるので記しておく。地区は東から1～3区を設定したが、3区は農道によって東西に分かれるため調査中は3区東、3区西と呼称した。石塚古墳は調査中の誤認を避けるため調査区内での方角で呼称・記録していた。2号墳＝南石室・古墳、3号墳＝東石室・古墳、4号墳＝北石室・古墳である。遺物の取り上げや写真撮影のラベル表記も調査中のものとなっている。

遺物の取り上げは、遺構出土の遺物は検出遺構別に、包含層の遺物は掘削土層ごとの取り上げを基本とし、必要に応じて平面的な位置で分割した。遺物登録番号は取り上げ単位ごとに付した。石室床面の遺物については平面図に記録した後、それぞれの石室で、土器・鉄製品・玉類ごとに取り上げ番号を付けて付し、1点ずつ取り上げた。

**図面作成** 基準点の測量は(株)アートの委託で行った。現地での記録図面は、デジタル図化機「遺構君」による図化と従来の実測手法を併用した。各区の調査区全体図、3号墳・4号墳の石室平面・側面図、1・2区の土層断面図はデジタル測量によって図化した後、現地でも追加・修正を行う形で作成した(1/10・1/20)。各石室の床面平面図(1/10)や遺物出土状況図(1/10)、石室内やタチワリなど個別の遺構の土層断面図(1/10・1/20)、2号墳の石室平面・側面図(1/10)、3区土層断面図(1/20)は手実測で行った。また単独の遺構や遺物出土状況などは対象物に応じて適宜手実測を行い、一部はデジタルで座標値を記録している。

**写真** 記録保存のために、調査区全景、遺構全景、個別の遺構、遺物出土状況、土層断面などを状況に応じて撮影を行った。使用したカメラは35mm(モノクロ・リバーサル)と6×7(モノクロ・リバーサル)、コンパクトデジタルカメラである。遺構に関しては調査担当者が、遺物に関しては担当者の指示のもと(株)地域文化財研究所に委託して撮影した。

**遺物・遺構図面等の整理作業** 現地調査終了後に登録、洗浄、注記を行い、遺物登録番号ごとに報告書掲載遺物をピックアップし、復元、実測、写真撮影などを行った。一連の作業は(株)アートの委託し、担当者が監督・指示しながら行った。

### 注

- 1 なお、大阪府教委の報告書中ではこの谷を「芦生谷」と呼称しているが、地元では特に呼称はないようである。馬谷川沿い、芦生谷集落の東の低地を「谷」とは呼ぶとのことである。
- 2 河内町寺田付近に残る小字名から、塚田秀徳氏が詳細な復元を行っている。台地の南では大槻水路すなわら町村界が通るラインを東西の聖境として、西側が五条、金山のある東側が六条にあたる(富田林市1985)。
- 3 p.12-3「②金山古墳の北方に小字を石塚とよぶ地籍がある。いま水田になっているが、かつて牛棚中に発見したという大石があつて、現在も傍の溝中に放置されている。またこの水田の西側の石屋中にも、石室の用材とおぼしい巨石が積みこまれている。」
- 4 なお芦生谷(せりゅうたに)は、地元で「せりたに」「せるたに」とも呼ばれる。

## 第II章 試掘・確認調査成果

### 第1節 調査区の設定

調査対象地のうち切り土や建物基礎が予定されている部分に、1～10 トレンチを幅 2.0m で設定した（図2）。掘削を行う際には石積や水路などを避けてトレンチの間隔を空け、1-1、1-2等の枝番号を付した。耕作面の段差を伴うトレンチも同様である。

### 第2節 各トレンチの調査成果

**概要** 検出した遺構面は一面で、削平を受けた基盤層上面である。主な遺構は、3 トレンチで耕作溝とピット、4 トレンチで石敷状遺構と石室状遺構、9 トレンチで耕作溝を検出し、既知の包蔵地の範囲外にも遺構が広がることを確認した。また4～6 トレンチの成果から、旧地形は小谷が入りこみ、現在よりも起伏に富んだ土地であったことが判明した。遺物は、包含層から土器の小片を確認した。特に土師質や瓦質の土器片が多く、古墳時代から中世のものである。

なお、4 トレンチの石室状遺構については「石塚1号墳」として第III章で後述する。

#### (1) 1 トレンチ

北側が低い耕作地 2 枚に南北に長い 36.0m × 2.0m のトレンチを設けた。トレンチ西側は低く、東側はほぼ同じ高さであることから、旧地形は北にのびる微高地であったと考えられる。

1-1 トレンチ、1-2 トレンチでは北へ低くなる基盤層上面を検出した。最も低いトレンチ北端で GL-85cm（約 T.P.+122.2m）ほどである。層厚 30cm 前後の耕土・床土を掘削すると、各トレンチ南端ではすぐに基盤層となり、北に包含層が厚くなりながら堆積する。包含層は、薄い灰褐色土と 7～20cm 前後の黄褐色土が交互かつ平行に堆積しており、一部段差を伴っている。この灰褐色土は旧耕土や表土と考えられ、複数回の造成の結果見られる土層であると考えられる。

遺構としては、1-2 トレンチの南側、段差近くの耕土直下で幅約 30cm、拳大の礎を並べ東西に走る細い溝を検出した。現在の水路がトレンチの周囲で同方向に伸びており、現在の畑に伴う暗渠として機能していたと考えられる。

遺物は 4 点とわずかで、須恵器器跡、土師器もしくは瓦質土器の破片、鉄釘が出土している。

#### (2) 2 トレンチ

ほぼ平坦な地形に設けた南北に長い 26.0m × 2.0m の調査区である。1 トレンチと同一の微高地にある。GL-20cm 前後、耕土直下で基盤層となる。トレンチ北端から約 2m 南側で緩やかな段をもって 15cm ほど低くなり、黄褐色土が堆積する。かつての耕作面と思われる。遺構・遺物は検出していない。

#### (3) 3 トレンチ（図版 23-1）

西側に低くなる 3 枚の耕作面に、東西に長い 84.8m × 2.0m の調査区を設けた。各小トレンチ東端では耕作土直下が基盤層だが、西側層数を増やし、灰黄褐色土・黄褐色土（遺物包含層）が交互に堆積する。基盤層の高さは最も西の 3-3 トレンチで約 T.P.+121.3m を最低値とする。

遺構は、3-2・3-3 トレンチで溝とピットを検出した。3-2 トレンチでは、溝 2 本を GL-25cm（推定 T.P.+122.3m）の基盤層上面で検出した。幅 40cm 深さ 5cm 前後で、主軸を北東-南西方向にもつ。その西側では直径約 20cm のピットを検出している。

3-3 トレンチ西部では直径 15～30cm 前後のピット 4 基を、GL-65cm（推定 T.P.+121.3m）前後でやや

密に検出した。包含層も 50 cm と分厚く堆積する。

また、包含層である灰黄褐色土と黄褐色土の繰り返しは、1 トレンチと同じく造成面であると考えられ、3-3 トレンチでは少なくとも 5 回の造成が繰り返されている。

遺物は、土師器 11 片、瓦質土器 6 片、サヌカイト剥片 1 点が包含層から出土した。小片であるが、圏線をもつ土師器小皿や瓦質土器碗を含んでいる。瓦質土器碗の高台は退化傾向にある断面三角形のものである。

#### (4) 4 トレンチ (図 4)

西側に低くなる 3 枚の耕作地に、東西に長い 53.6m × 2.0m の調査区を設けた。耕作土・包含層を除去し、基盤層上面で遺構を確認した。包含層の層厚は 4-1 トレンチや 4-3 トレンチで 0~40cm、4-2 トレンチの河谷状遺構の上部で 135cm 以上を測る。

遺構は 4-1 トレンチで石敷状遺構とピット、4-2~3 トレンチで溝と河谷状地形、4-3 トレンチで土坑と石室状遺構がある。石室状遺構は第 III 章第 2 節で「石塚 1 号墳」として詳述する。

##### i) 礫敷状遺構 (図版 23-2)

4-1 トレンチのほぼ中央で、GL-60 cm (T.P.+123.2~123.3m) 前後の地山面に、拳大の礫が分布していた。遺構面は西へゆるやかに傾斜する地形で、東西約 6.5m の範囲に拳大の礫が敷きつめられたかのように見える。礫は東側ほど密に分布しており、西側はやや大型の礫が混じりまばらになる。また分布範囲の中央付近には、20cm 前後の大きめの礫が入った径 70~80 cm ほどのややいびつな円形土坑が南北に並んでいた。埋土の掘削は行っていないが、検出面での埋土は黒色を呈する。さらに、その東では直径 15cm 前後の小ピットを検出している。

遺構検出面の粘質土 (図 4-②層) からは、瓦質土器碗 1 片が出土している。内縁で断面三角形の高台をもち、見込みには平行線状の暗文が入る。また、礫敷状遺構を覆う橙混じり灰褐色土層 (③層) からは、ごく小片の黒色土器 2 片と土師器 4 片が出土している。あえて時期を特定するならば少ない遺物であるが 12~13 世紀頃の年代が考えられる。遺構を覆う包含層は粗砂を多く含んだ灰褐色系の土であり、攪乱がなければ西の河谷状地形の上層へと続くと思定される。つまり河谷状地形がある程度埋まった段階のもので考えておきたい。

##### ii) 河谷状地形

トレンチ中央では幅約 15m にわたって河谷状の地形が確認された。遺構のラインによれば、谷部は北

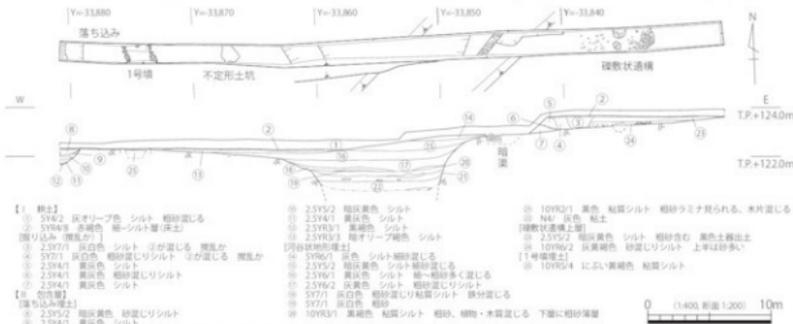


図4 試掘4トレンチ遺構検出状況平面・土層断面略図

に向かって広がるようである。

GL-2.3m(T.P.+120.6m)まで掘削したが、谷底までは至らなかった。上面は削平されていて、黄灰色の砂混じりシルトが約40mと厚く堆積して谷部を覆っている(図4-⑩・⑪層)。下層のほうが粗砂を多く含んでおり、T.P.+121.4m以下では谷は粘質の強い黒褐色土が粗砂をはさまつて堆積する(⑫～⑭層)。

⑩～⑪層は粗砂を多く含むが、流水堆積は顕著ではない。下層の黒色土(⑫層以下)の段階で、湿地のような状況にあり、あまり流れのない環境であったと考えられる。

谷を覆う包含層からは、瓦質土器1片(⑫層)が出土している。その他、東側肩部付近で土師器体部小片が8片と瓦1点(⑬～⑭層)、西側肩部付近では黄灰褐色シルト(⑯層)で土師器皿が出土している。⑫層以下では木質の植物遺体や炭化物が見られるのみで遺物は出土しなかった。少ない遺物から考えることにはなるが、中世には河谷状地形はかなり埋まっていたのではないかと考えられる。

なお、この河谷状地形を挟んだ西側(4-3トレンチ)では、削平のため包含層はほとんど残っておらず、T.P.+122.1～+122.3mで基盤層となるが、北西隅で急に落ち込む様子が見られる。肩部のみの検出であり詳細は不明である。第三章で後述するが、この埋土から須恵器杯片が1点出土している。

### iii) 土坑

4-3トレンチでは基盤層上面で、東西1.5mほどに広がる不定形の土坑を検出した。前述した1号墳に伴う可能性があり、第三章で後述する。

### ⑤ 5トレンチ

6～9トレンチの北に設定した東西に長い127.5mのうち、5枚の耕作面、東からA～Gの7か所を調査した。

Aトレンチでは、耕作土下に茶褐色の真砂土を検出した。現代の造成土であろう。建物基礎の影響範囲であるGL-60cmまでこの真砂土が続くのを確認した。

Bトレンチでは基盤層は東へ低くなりGL-60cmで最も低い。耕作土直下で、砂混じり暗黄褐色シルトが堆積し、最大で層厚40cm。土師器の小皿、羽釜、把手等6片が出土した。

CトレンチではGL-55cmまで調査した。基盤層はゆるやかに東へ下がり、最大20cmの暗黄褐色シルトが堆積する。基盤層上面は平坦ではなく、直上に数センチの層厚で堆積する黒茶褐色シルトが波打って観察された。上層からの踏込に伴うものか、包含層から土師器5片、瓦質土器1片、須恵質播鉢が出土している。

Dトレンチでは耕作土下に層厚5cm弱の暗黄灰色シルトが薄く堆積する。基盤層は西側がやや低い。トレンチ北西隅では肩部の不明瞭な落ち込みを検出した。落ち込み埋土は茶褐色粗砂混じりシルトで、基盤層直上では黒茶褐色で基盤層と同質の粘質シルトとなる。遺構としては不明瞭であり、流水等によって形成されたものかと考えられる。遺物は床土直下からサヌカイト剥片が出土したのみである。

Eトレンチでは耕土直下で基盤層となり、西端でやや落ちる。基盤層直上で軸を北北東にもつ幅約30cmの溝を検出した。深さは5cm程度とごく浅く、耕作に伴ってほとんど削平されたものと思われる。床土で土師器細片が1片出土している。

Fトレンチ西側でも基盤層はごくわずかに下がる。耕作土下に約20cmの暗黄褐色シルトをベースとする土が堆積する。トレンチ東側では黒色土が広がるが、漸次的に土色に変化しており、Dトレンチと同じく不明瞭である。遺物は出土しなかった。

Gトレンチの現地表面はFトレンチより1mほど下がる。東端で5cm弱の灰褐色シルトが堆積するのみで、ほぼ耕土直下、GL-20cm強で基盤層となる。上面は削平されているのであろう。遺物は出土していない。

## ⑥ 6 トレンチ

北へ低くなる5段の耕作地に南北に長い58.4m×2.0mの調査区を設定し、耕作面ごとに4つのトレンチを調査した。5段目は5-A トレンチをもって調査に代えた。

6-1 トレンチの南端では耕土直下、GL-25cmほどで基盤層となるが、すぐに北東方向へ落ち込み、層厚15cm前後の暗黄褐色シルト、その下に最大厚30cmの暗灰黄褐色シルトが堆積する。北東隅での基盤層のレベルはGL-70cmである。基盤層は北側で拳大の白色礫を多く含む。遺構は検出していないが、包含層中から中世期の土師器、瓦質土器、陶器が出土している。

6-2 トレンチでは、厚さ約20cmの耕土下に青灰色混じり暗褐色土が堆積する。基盤層は南端で約GL-20cm、北東隅で下がってGL-95cmで現れる。ここでのみ暗褐色砂礫混じりシルトが堆積する。

トレンチ南側、基盤層上面でY字状の溝を検出した。東と南から現れ、1本になって浅くなり、取束する。幅45～50cm、深さ20cm程度で、上層の土が堆積する。遺物は出土していないため時期は確定できないが、埋土は上層と同一であり、近へ現代の耕作に伴うものの可能性が高い。

6-3 トレンチでは、表土下に厚さ25cmほどの茶褐色の真砂土が現れる。その下に明黄褐色の砂礫混じりシルト、下層では青灰色となり、上層にブロックが混じる。GL-75cmで黒色細砂混じりシルトが堆積し、上位で黒色が強く、下位はやや粘性が強い。GL-115cmで基盤層となるが、上層から色を移して暗青灰色を呈する。2層目の明黄褐色土はしまりがなくブロックが混じること、上位に耕土がないことから造成土と判断できる。その下層は水分の多い湿地のような状況であったと考えられる。

6-4 トレンチでは、厚さ25cmほどの茶褐色を呈する真砂土の下で、礫混じりの黄褐色土を確認した。その下層には青灰色ブロックを含む土が続くことから、6-3 トレンチと同じ状況であると判断し、GL-85cmで掘削を終えた。

6 トレンチ南側はほぼ削平されており、北側6-3・4 トレンチは現在の造成土が見られる。5-A トレンチも造成土であり、6-1 トレンチの北東部から以北は、調査地北側の五分沓池や白木下池に続く低地が続いていたと考えられる。

## ⑦ 7 トレンチ

北へ低くなる2段の耕作地に南北58.4m×2.0mのトレンチを設定し、南側はほぼ全面、南側は南よりの一部を7-1、7-2 トレンチとして調査した。

7-1 トレンチでは、河谷状の地形を確認した。耕作土直下GL-25cmで基盤層となるが、調査地南の農道から北へ約9.3m付近で下がりをはじめ、暗黄褐色シルトが堆積する。さらに0.8m北で急激に落ちて、暗灰黄色、黒灰黄色の砂～シルトが順に堆積する。崩落の危険があったためおよそGL-1.5mで掘削を中止した。基盤層は確認していない。

遺物はこの河谷状地形の肩部、地山直上の黒灰黄色土から須恵器杯片が出土している。

7-2 トレンチでは約25cmの耕作土下に、10cm弱の黄褐色シルトが北へ徐々に厚くなりながら堆積する。基盤層は北へわずかに傾斜してGL-25～45cm(推定T.P.+119.7～119.9m)まで確認している。5-B トレンチでGL-60cm(推定T.P.+119.5m)を底値として基盤層を確認しているため、北方向へはほぼ変化なく基盤層が続くものと見て掘削を終えた。遺物は出土していない。

なお、7-1 トレンチの河谷状地形の底は推定T.P.+119.8mより低くなる。7-2 トレンチでは基盤層をT.P.+119.7～119.9m前後で確認している。両者の堆積土が異なるため、7-1・7-2 トレンチ間は同じ高さで続くのではなく、いったん地形が上がり、再度落ちるものと考えられる。

## ⑧ 8 トレンチ

北に低くなる2枚の耕作地に、南北に長い58.4m×2.0mのトレンチを設定し、北側は2カ所を部分的に調査した。

南側8-1トレンチでは南端から北へ約19.5mまでは耕土直下で平坦な基盤層、以北はゆるやかに傾斜して最大でも約20cmの薄い包含層が堆積する。平面では検出できなかったが、土層断面には掘り込みが観察でき、遺構の存在が予想される。包含層は薄いのが、土師器子皿、瓦質土器碗、須恵器捏ね鉢等、出土遺物は比較的多い。

8-2・3トレンチでは耕土直下で基盤層となる。耕作に伴って削平されたものと考えられる。

## ⑨ 9 トレンチ

北に低くなる3枚の耕作地に、南北54.0m×2.0mのトレンチを設定した。最も低くなる北端は5トレンチの成果から掘削を行っていない。

地形や土層の堆積状況は8トレンチと類似する。南側9-1トレンチでは南端から約10mまでは耕土直下で平坦な基盤層、以北は徐々に傾斜して、黄褐色土/暗褐色土の包含層が交互に堆積する。北側9-2トレンチでも同様だが、包含層は9-1トレンチで約40cm、9-2トレンチで約30cmの最大厚を測る。基盤層のレベルは南側でT.P.+121.1～120.6m、北側でT.P.+120.5～120.2m。

基盤層の直上で、多数の溝、土坑、ピット等を検出した。溝は幅30cm前後、北東-南西方向に走り、わずかに南東方向に弧を描くものもある。一部、溝と溝の境界が明らかでないものもあるが17～18条がほぼ平行し、9-2トレンチではやや幅の広い傾向にある。一部を掘削したところ10cm弱ほどの深さがあり、土師器片とサヌカイト剥片が出土した。

遺物は細片が多いが、包含層から土師器、瓦質土器(碗・羽釜)、須恵質土器、磁器、瓦など中世の資料が出土している。

## ⑩ 10 トレンチ

6トレンチの北側で、南北に長い31.7m×2.0mのトレンチを設定した。トレンチ南側では、15～20cmの耕作土直下で基盤層を検出した。トレンチ北部で緩やかに低くなり、耕作土下に土器片の混じる黄灰色土、灰黄褐色土が2～5cmの層厚で堆積する。基盤層は北端でGL-30cmで検出している。

トレンチ中央部で断面方形の東西方向の溝、南西部の西壁沿いに直径50～60cmのピットを検出したが、埋土から現在の耕作に伴うものであると考えられる。

## 第3節 小結

### (1) 遺物 (図版42-6)

包含層から須恵器、土師器、黒色土器、瓦質土器、陶磁器、瓦が出土している。いずれも小片で図化に耐え得るものではなかった。

須恵器は古墳時代の杯で、4トレンチと7トレンチで出土している。黒色土器は内黒で平安時代末から中世初頭頃のものと考えられ、3トレンチと4トレンチで出土する。特に4トレンチでは礎敷状遺構の直上の包含層から出土しており、年代の下限を示すものである。

土師器、瓦質土器はほぼ全トレンチで見られ、中世前半期のものが主体である。土師器は小皿が多いが、碗や羽釜も含むようである。瓦質土器の器種は碗、皿、羽釜である。7トレンチと9トレンチで出土した陶磁器もほぼ同時期の資料であろう。瓦は中世瓦2片のみで、4トレンチと9トレンチで出土している。

なお上述したように8トレンチでは包含層からの出土が比較的多い。

## ② 遺構

調査では主に、3トレンチで溝・ピット、4トレンチで礎状遺構と石室状遺構、9トレンチで溝が検出された。

礎状遺構は本調査に至らず検出のみで終わったため、時期・構造等の詳細は不明である。時期を窺い知れるのは検出時に出土した黒色土器片のみであり、平安時代末から中世初頭頃をひとまずその下限と考えている。管見では類例を得ることができず、その性格は不明と言わざるをえない。しかし、主に白色の礫が密集する状況はひときわ目立っていたものと思われ、内部に形成されている土坑と合せて、今後調査の機会が与えられた時には注意が必要である。

包含層が厚く堆積する部分では、水平に堆積する黄褐色土と暗褐色土の互層が特徴的である。含まれる遺物も細片がほとんどであり、造成のための盛土と耕作面であることが推測される。おそらく現在の地形となるまでに数度にわたる造成が繰り返されていた結果であろう。4・6・7トレンチで確認された深い河谷状地形と考え合わせると、かつては小谷が入り込む起伏の富んだ地形であり、現在の平坦な地形となるまでにかなり大規模な造成があったことが示唆される。なお、旧地形については本調査の成果と合せて第四章にまとめた(図52)。

主に9トレンチで確認された溝などは、こうした造成の後に行われた耕作痕と想定されるが、現地地形に残るほぼ南北正方向の条里とは方向を異にしていることが指摘できる。本調査では3区として調査しており、第三章で後述する。

## ③ 本調査の範囲

経過については前項で既述したが、協議によって本調査の対象となったのは遺構が顕著であり、かつ削平を伴う部分である。3トレンチ周辺を1区、6-1トレンチ周辺を2区、8-1トレンチと9-1トレンチ周辺を3区として調査し、結果的には4-3トレンチも一部調査となった(図5・9)。

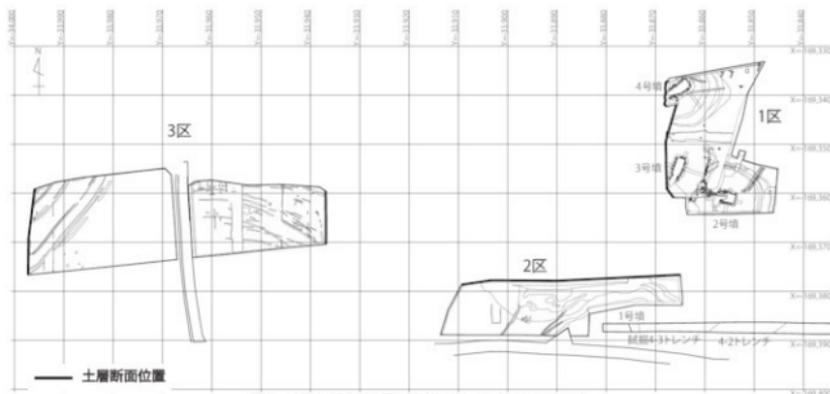


図5 調査区配置図・遺構分布図(S=1/1,000)

## 第三章 調査成果

### 第1節 基本層序

**調査地の地形** 調査地は耕作地の段差を経ながら北西へと低くなるが、1区のすぐ西側で比高差1～2mの小谷が南北に入る。調査前の標高は、調査地内南東で最も高くT.P.+124.3m、3区付近でT.P.+121.2～121.5mで広めの耕作面が広がり、調査地南西部でT.P.+118.2mと耕作地の段差を伴いながら低くなる。北側では、北東隅でT.P.+122.3m、1区西の小谷でT.P.+119.0mを最低値とし、3区北側でT.P.+120.6mと高くなった後は、北西端でT.P.+118.0mと調査地内で最も低くなる。

**層序** (図6) 調査地は造成による削平を受けて単純な層序となっており、第I層～第V層に区分した。基本層序は谷内の地層まで確認できた2区を基準に設定し、細分は○囲みの番号で表示した。地層の対比は層相と出土遺物により判断した。

**第I層**：現代の畑作・稲作に伴う作土とその下位の床土および攪乱埋土である。作土は暗オリーブ～オリーブ黒の粗砂混じりシルト層で、層厚20cm前後。床土は赤褐色土で、作土下に数mm～5cm弱の層厚で堆積する。数mm程度と薄く図化が難しい場合は土層断面図には示していない。

**第II層**：中世の遺物を含む地層で、整地土。褐～黄褐色の細～粗砂混じりのシルトが、層境に赤みを帯びた褐色の薄層を挟んで繰り返し水平に堆積する。その単位は層厚15cm前後であり、積層して層厚70cm前後となる部分もある。特に1区西側では、少なくとも5層の細分が可能で、耕作のための水平面を確保するため、盛土が幾度となく繰り返されていたと考えられる。層中にはごく少量であるが、土師器や瓦質土器の小片と、稀に須恵器片が出土している。

**第III層**：2区の谷部にもみ堆積する層であり、SR1とSR2を覆う。上層は灰色シルト層をベースにするが、鉄分の沈着が強く褐色を呈する(④層)。層厚約20cm、その下は青みの強い暗オリーブ灰色の粘質シルト層が堆積し、10cm程度の礫を含む(⑤層)。深いところでは層厚60cmと分厚く堆積し、最も深い部分には植物片が堆積する。遺物は④層下位でまばらな暗文の見られる瓦質土器の破片が出土している。

**第IV層**：2区の谷部下層の水成層である。最上部の⑥⑬層は、オリーブ黒色の粗砂層。⑦⑱層はオリーブ黒～黒の湿地性の泥質シルトで、植物片を含む。層厚は最大で約60cm。層相からSR1とSR2は同時期に埋没していると考えられる。遺物は⑦層で須恵器杯1片が出土したのみである。

**第V層**：台地構成層であり、基盤層や地山と称している。明褐色～褐色シルトをベースとし、礫や風化した花崗岩が多く混じる。1区では拳大～30cm大の礫が表出している部分があるなど礫がちであったが、2区や3区では大きな礫はほとんど混じらない。

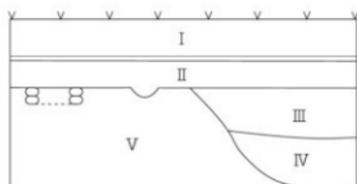


図6 基本層序模式図

### 第2節 石塚古墳群(試掘4-3トレンチ、1区)

**概要** (図7、図版3) 調査前の1区はかつて水田耕作を行っていた棚田で、T.P.+122.1m前後の平坦面であった。調査面積は504.3㎡、遺構面は基盤層上面の1面のみ。調査前は痕跡もなかった古墳3基が、1

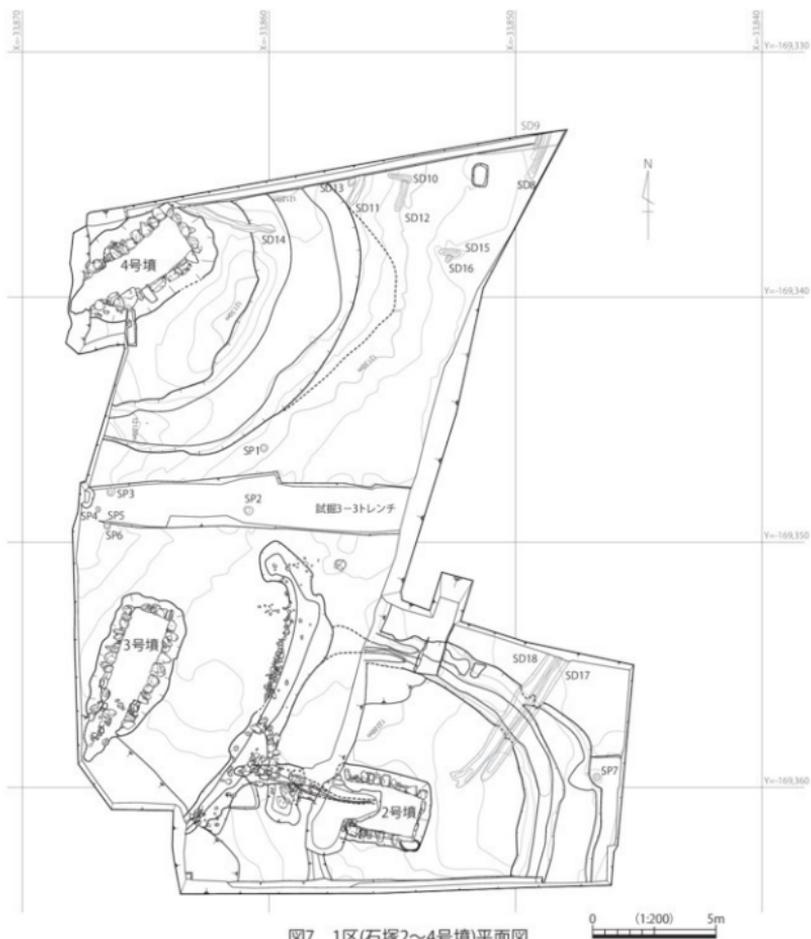


図7 1区(石塚2～4号墳)平面図

区の西から南側に入り込む谷に面して検出された。試掘4トレンチの「石室状遺構」1基と合わせた4基の「石塚古墳群」の発見となった。

石塚2～4号墳の3基は近接して築かれており、周溝からいずれも12m前後の円墳と推定される。主体部である横穴式石室は上部を欠くものの良好な残存状況を呈し、床面から須恵器、土師器、鉄製品、玉類等が出土した。遺物は古墳時代後期（TK43～TK209型式期）に位置付けられる。

3号墳の石室上層からは12世紀後葉頃の瓦質土器等がまとめて出土しており、古墳が削平された時期と考えられる。土層の堆積から窺われる幾度にもわたる耕作面の造成や、耕作溝11本、ピット7基の年代はこの時期以降に求められよう。

## (1) 層序と自然地形

層序(図8) 第I層:作土(①~⑦)、第II層:包含層(⑧~⑬)、第V層:基盤層(⑭)から成り、遺構面はV層上面である(図8)。遺構には石室内の埋土(⑰~⑳)、周溝埋土(㉑・㉒)、壁体の掘り方埋土(㉓)が堆積する(図38)。

I-①層は作土で、1区全体にほぼ均一に及ぶ。I-②~⑦層は、調査区の南西隅にのみ分布する。粗砂を多く含みしまりがなく、⑧~⑬層を削平して堆積する。⑭層とした暗渠の構築に伴う現代の土層であろう。この層を除去して3号墳の羨道・墓道を検出している。II-⑧~⑬層は、基盤層のレベルが低い西側に水平に堆積する。層界に褐色土をはさんで互層状を呈しており、約80cmと最も層厚のある北西隅では少なくとも5回の繰り返しを観察される。粗砂・細砂を多く含み、乾燥が進むとしまりが強くなる。図8右側の4号墳の壁体付近ではやや細かい単位が見られる。上層ではほとんど遺物は出土せず、V層との層界付近で土器片が出土する。このII層を除去すると、基盤層V-⑭層となり、この上面で遺構を検出した。遺構埋土については個別の遺構の報告において記述する。

古墳築造時の自然地形(図2・52) 古墳群は南からのびる台地上にあり、金山古墳も同じ台地上に位置する。試掘調査や後述する2区の調査成果によると、1区の南から西にかけて小谷が複雑に入り込んで台地を侵食しており、1号墳はその小谷を北に、2~4号墳は西に臨む微高地にあると言える。この小谷によって画された微高地は、1区の東、現況で言えば南北にはる道路(府道柏原駒ヶ谷線)の付近で最高所に至ると想定され、微高地の西縁辺に古墳が築かれていたと言える。

なお、1区の西側は比高1~2mのほぼ垂直な崖面となっており、特に4号墳の石室入口はその崖面に破壊されている。耕作地を造成した際か、もしくは北側にある溜池(五分一池)を造る際に削られたと考えられ、古墳築造時はゆるやかに傾斜していたものと考えられる。

## (2) 石塚1号墳(試掘4-3トレンチ)

### i) 検出の経緯

試掘時は「石室状遺構」と呼称していた遺構である。石塚2~4号墳とは谷を挟んで南側にある。試掘4-3トレンチの西部、作土直下のT.P.+12.3m前後で、長軸を北北西にとり、幅1.7mのほぼ平行に並ぶ2列の石列を検出した(図4・図版2)。石材は風化して砂状になっており、本調査のために遺構の性格をよ

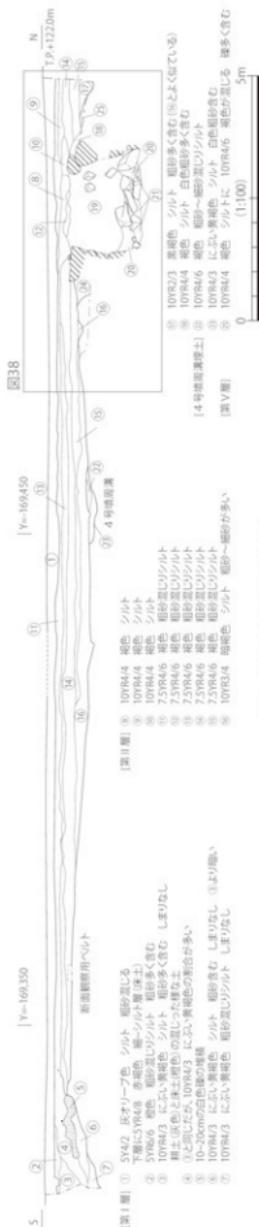


図8 1区西壁土層断面図

【㉔】 2区 南壁(東側)地山ライン略図



【㉕】 試掘4トレンチ北側 土層断面図(部分・北から)



図9 1号墳丘断面略図

り詳細に知る必要があった。そこで、石列間に北壁に沿って約50cm幅のサブトレンチを設定して掘り下げたところ、T.P.+122.065mで断面方形の鉄釘を検出したのである。本調査は行っていないものの、鉄釘の出土や石材の大きさ、特に2～4号墳の存在から横穴式石室と捉え、石塚1号墳として報告するものである。

調査終了後、現状保存の区域としていたトレンチ北側が本工事の際に掘削されてしまい、調査を経ずに破壊されてしまった。かろうじて試掘4トレンチの北壁を北から見た土層断面を記録している(図9㉕・図版2-2・3)。

## ii) 墳丘と周溝

検出面は作土直下であり、墳丘・石室ともに削平が著しい。周溝の可能性のあるものとして、石室の中軸から約6.5m東で不定形土坑を、約4.5m西で基盤層の落ち込みを検出している(図4・9)。

不定形土坑は最大幅1.4m、深さは土層断面で10cmほどである。壁面は垂直もしくはやや上に広がり、底面は一定していない(図9㉕)。深さ・断面形ともに周溝とは言い難いが、いずれにせよ不定形土坑の東側と北側は河谷状地形となるため墳丘端はこの近辺に求められる。

西側の落ち込みは、検出面から深さ60cmほど(T.P.+121.6m)まで確認し、埋土中から須恵器杯片、土師器片が出土している(図4)。遺構はさらに西側にのびると考えられる。

以上から、推定される墳丘規模は9～13mとなる。墳形は不明。ところで1号墳のちょうど北に2区南壁断面があり、T.P.+121.7mのほぼ水平な面からT.P.+122.0mまで蒲葺状に盛り上がる基盤層上面のラインが観察された(図9㉔、写真1)。これが墳丘のラインかどうかは断定できないが、その一部を示しているものと思われる。



写真1 2区南壁東側(北西から)

## iii) 埋葬施設の構造

横穴式石室を想定している。検出した石材は風化して砂状となっており、不明瞭な部分もあるが、少なくとも西側で3石、東側で4石が並ぶ状況が確認できる(図4)。石材の大きさは長軸で20～60cm、短軸40cm程度で、平坦な面を内側に揃えて

おり、その中軸を南から約14°東に降る。トレンチ北壁断面(図4・図9⑧)では、石列間にもみ石材が現れており、奥壁はトレンチのすぐ北側に想定される。したがって開口方向は南南東となろう。

石室規模は、中軸上で検出長1.7m、幅も1.7mを測る。鉄釘の検出レベルが床面に近いとすればT.P.+122.0m付近に床面があり、検出した石材が基底石にあたると思われる。石室墓壇の底面はT.P.+121.5～121.6m前後にある(図9⑧)。

#### iv) 出土遺物

石室内に設定したサブトレンチから鉄釘が出土している。頭部から3.5cm程度残存しており、断面は0.5×0.6mmの方形を呈する(図版42-6、No.615)。

その他試掘トレンチで出土した古墳時代の遺物としては須恵器があり、1号墳に関連するものと考えられる。いずれも図化していないが、SR2の最下層から杯片が、その西側の包含層からは杯や高杯の脚部片等8点が出土している。なお、4トレンチ北側が削平された際にも付近から杯片1点を採集した。ヘラ記号「八」が施されたと思しき杯片も確認できる。高杯は裾の屈曲部に1条の沈線を施し、脚部が面をなすものである。杯身は立ち上がり短く内傾するものでTK43型式期に位置付けて大きな飾縁はないものであろう。2～4号墳出土品と同時期と考えられる。

### ㉓ 石塚2号墳

#### i) 検出の経緯

概要(図10) 2号墳は石塚古墳群のうち最も東に位置し、調査時は「東石室」と称していた。1区の南東部を拡張して横穴式石室と周溝を検出したものである。検出面は基盤層上面であるが、ほかの石室より一段高い耕作地(T.P.+122.0～122.3m)にあるため削平が著しく、玄室側壁と奥壁一段目の石材がかろうじて残っている状態であった。特に西側、石室玄門部から開口部にかけては削平が著しく、ちょうど耕作面の段差にあたって地山面でも30cmほど高低差がある。

検出状況(写真2・3) 耕作土を除去し基盤層上面で石室2基(3・4号墳)と周溝を検出した。3号墳では、石室東側で周溝埋土である暗褐色土が帯状に伸びていたが、北東側ではその幅が広がって遺構のラインが曖昧になるうえ、途中で分岐して墳丘とは逆方向へ弧を描いていた(写真2)。さらに、その周溝にはほぼ直交する形で細い溝が東へ伸びていたのである。

3号墳と逆方向へ円弧を描くような溝の形状もさることながら、これらの溝の埋土中から須恵器の甕や高杯類が出土しており、調査区外の東側にも古墳がある可能性が高まった。

そこで調査区の東側、一段高い耕作面に幅1mの



写真2 2・3号墳周溝検出状況(南東から)



写真3 2号墳西側大石検出状況(西から)

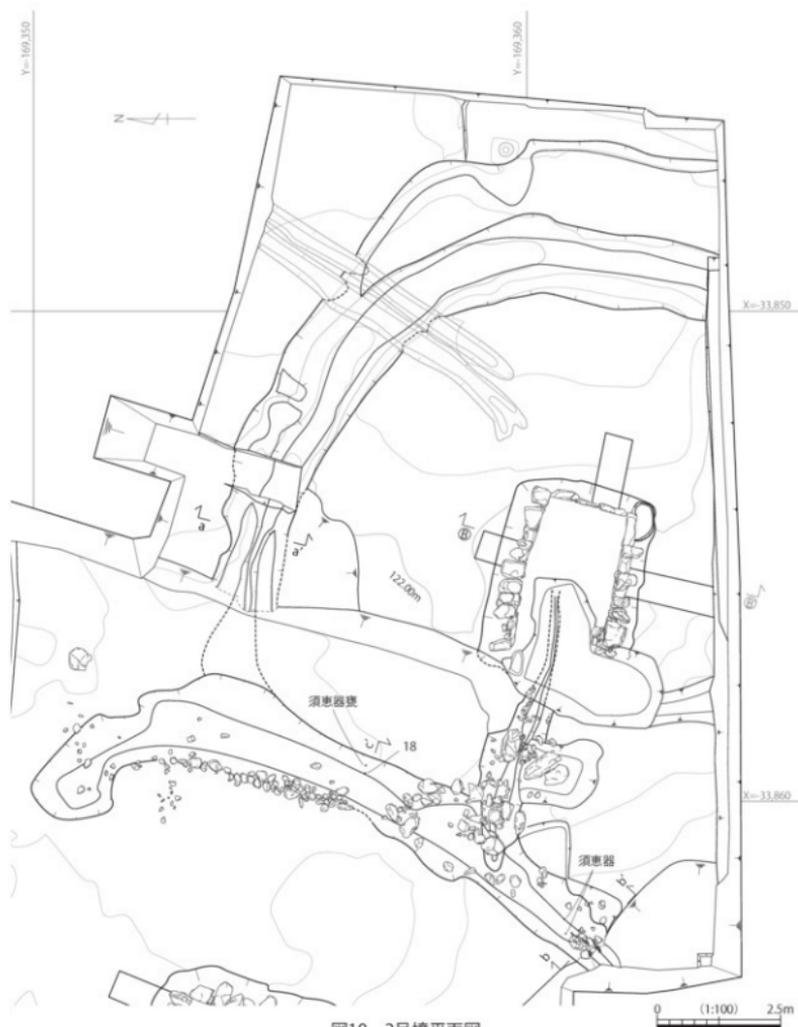


図10 2号墳平面図

トレンチを南北方向に入れて調査を行った。すると耕作土を除去した時点で30～50cmほどの石が二列に並ぶ状況を検出し、2号墳の発見となったのである。事業者と協議のうえ、造成による影響が及んでいないと思われる1区の南へ3.5m、東へ10～13mの範囲で調査区を拡張した。その結果、石室は半壊していたものの、特に墳丘東側で明確な周溝を伴って2号墳が検出された。

耕作面の段差では、天井石と思われる長軸1.2m前後の大石が3石並び、その奥にも50cm前後の石材5

石程度が段差のラインに沿って検出された（写真3）。石室の形状から、これらの石材は原位置をとどめていないものと判断し、粗砂が混じるしまりの悪い暗褐色の攪乱土とともに除去した。なお、この掘削中に須恵器（1・14）や耳環（35）が出土している。大石を除去すると石室前面には大きな攪乱坑が穿たれていた。造成の邪魔になる石材を処理するため、穴を穿ち石材を埋めて柵田の法面形成に利用したものであろう。

**石室埋土の状況（図14）** 玄室内では、攪乱土下に層厚5cm程度の褐色の粘質土が床面全面に堆積しており、一部では須恵器や磯床が表出していた（図14㉔-㉕①層）。こうした状況から①層を石室閉塞後の流入土と判断して除去し、磯床とその直上の遺物を検出した。

## ii) 墳丘と周溝

**周溝の形状と墳丘形態（図10）** 削平によって墳丘盛土の有無は不明であるが、周溝は北東側や南西側で良く残っていた。検出面で見ると墳丘の東から北へと円弧を描き、耕作地の段差部分で一部途切れるが、西側では3号墳と共有しつつやや直線的に南西へと伸びてトレンチ外へ続いている。この直線状の形状は3号墳との位置関係に起因すると考えられ、北東部ではほぼ正円を描いていることから、墳形は円形としておく。

墳丘東側では、周溝の外側へ深さ10cm弱ほどの浅い落ち込みが広がる。この部分も周溝の一部と捉えたと西側の直線状の部分と対応して、周溝の外形を隅丸方形とみることもできる。しかし周溝内側のラインは変化せず、検出面では暗褐色土が明瞭に円弧を描く一方、この浅い落ち込み部分には黄褐色土（第II層）が堆積して遺構検出時には不明瞭であったという違いがある。古墳に伴う遺構というよりは後世の造成に伴う落ち込みとしておきたい。

**規模（図10）** 周溝を基準に、玄室中央を墳丘の中心として復元すると、検出面で墳丘径11.4mの円墳となる。周溝を含めると、中軸上の計測値では13.8m、北東部の周溝半径から復元すると14.2mとなり、平均して約14mとしておく。

周溝幅は検出面で1.5m前後を測る。周溝の深さは東側で10cm、北側で20cm、西側では40cmと南西方向に深くなる。周溝底のレベルも同様に東が最も高くT.P.+122.0m、北側でT.P.+121.8m、最も低い南西隅でT.P.+121.1mを測り、地形に応じて低くなっている。

**周溝の断面形と堆積土（図11・12・23、図版4）** 周溝断面は上部のひらくU字状を呈し、墳丘外側では急角度に、墳丘側では傾斜変換を伴い、やや緩やかに立ち上がる。墳丘北側ではその傾斜変換が明瞭であった。埋土は北側（図11a-a'）では周溝底に10cm弱ほど細砂（②層）が溜まり、上層はシルト（①層）となる。西側でも同様である（図23c-c' ②③層）。南西隅（図12b-b'）では、最下層の約20cmに粗砂混じりのシルト（③層）が墳丘側の傾斜変換部分まで堆積する。その上を粘質土（②層）が薄く覆い、さらにシルト（①層）が堆積する。

**周溝出土土器（図10・12・17）** 2号墳の周溝の西側では須恵器が出土している。c-c' 断面付近では、須恵器低脚高杯（図17-18）と須恵器甕の破片が出土している。18は破損しているが正位で、ほぼ遺構底面に接していた。甕片は埋土中の出土である。

さらに石室開口部より南に下った部分では、須恵器短頸壺（19）と甕（20）が集中して出土した（図12）。これらは周溝底面か



図11 2号墳周溝土層断面図

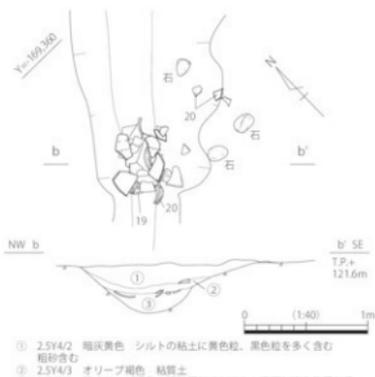


図12 2・3号墳周溝遺物出土状況・土層断面図

らやや浮いた位置で出土しており、原位置でそのまま破砕されたような出土状況ではない。また同一個体かどうかは不明であるが、集中部から離れた位置(c-c' 付近から南)でも瓦片が出土していることから、③層堆積時に付近から転落もしくは流れてきたものと思われる。

しかしこうした周溝出土遺物が2号墳と3号墳のいずれに伴うものかについては出土状況からは確認できなかった。出土位置は両墳と共有する位置であるが、完形に近い程度まで接合が可能であり(図版28)2号墳の石室内から流出したものとより、どちらかの墳丘上・周溝で用いられたものと考えておきたい。また周溝は、新たに古墳を築く際に再掘削したことが想

定できるため、周溝の堆積土は両墳が築造された後のものと考えられる。第IV章で後述するように3号墳が後に築かれたと推定しているため、3号墳の葬送もしくは2号墳の継続的な祭祀に伴うことが考えられる。

### iii) 埋葬施設の構造

**石室構造の復元と規模(図10・13、図版5・6)** 石室は開口部から玄室前面が大きく削平され、壁体も一～二段目が残る程度であったが、壁体の痕跡や排水溝の位置からその構造を復元していきたい。なお墓道部分の名称は、壁体のある部分を「羨道」、素掘り部分を「墓道」と呼称する。

石室を検出した時点で、奥壁一段目に直交するラインで石室中軸を設定した。北側の側壁一段目は5石が残存しており、削平部分に浅い窪みが2カ所検出された。石材を抜き取った痕跡と考えられる。うち、側壁に沿って長楕円形を呈するものは側壁と重複した位置にあり、そのまま石材の位置や形態を示しているとは考え難い。続く西側の窪みは検出面で特に明らかなように(図10)、石室中軸に寄った位置にあり袖部を形成すると考えることができよう。

南側の袖部については、攪乱が著しく石材の痕跡を見てとることはできなかったが、排水溝の位置から推定することはできる。排水溝は地山を掘り込み、玄室から石室中軸に沿って開口方向にのびている。片袖式であれば排水溝が偏った位置にあると想定されることから、両袖式と捉えておきたい。

以上のことから、2号墳の主体部は墳丘の中央に玄室を置く、両袖式の横穴式石室に復元できる。主軸は、奥壁中央と墓道端を結ぶラインで北から74.9°(74°55'8")西に降り、西北西に開口する。石室全長は墓道端までで8.3mに復元できる。

石室壁体に用いられている石材は、その幅によっておよそ大型50～60cm、中型30～40cm、小型10～20cmの3種に分けることができる。このうち大型は一段目に、中型は二段目を主に、小型は高さの調整や隙間の充填、床面に用いられている。

**玄室** 玄室平面形は石室主軸方向に長い長方形であり、やや胴が張る。玄室長は、上述した抜取穴を袖部とすると3.8mを測る。幅は、最も狭い奥壁部分で1.67m、C-C'部分で最も広がって1.84m、入口側で測定が可能な部分では1.81mである。残存する壁体の高さは、最も残りの良い北側壁で三段、0.5mを測る。

北側の側壁は抜取穴から6枚の石材で構成されると考えられる。

**北側壁** 現状で二段、一部で三段が遺存する。基底部には大型石材を用い、5石が残存しているが、上述したように抜取穴の存在から6石目の配置を想定できる。一段目において奥壁から3～5石目の大型石材の上面はT.P.+22.0m前後にある。その上に積まれる中型石材も間に小型石材を充填して上面をT.P.+22.2mにはほぼそろえる意図が窺われる。構築時の単位の一つと捉えることができよう。

奥壁から2石目と3石目の間には、三角形の石材がはめ込まれている。この石材を設置するためには隣接する下位の石材の設置が必須であり、現存する北側壁のうちで最後に積まれた石材と考えることができる。

**南側壁** 基底部5石、二段目が一部残る。基底部は奥壁寄り3石目までは大型石材を用いるが、4石目からは中型石材で構築している。残存する壁体上面は、その高さをT.P.+22.1mにはほぼそろえている。積極的に評価すれば北側壁と同様、構築の一単位と捉えることもできよう。なお、基底部5石目から西の石材は面がそろわず、内側に傾いた状態で検出されているため原位置を保っていないと考えられる。石材としては小～中型のものを用いている。

**奥壁** 基底部のみが残る。大型石材を3石配置し、上面の高さはT.P.+22.0～22.1mにあり、側壁に接する南北の石材では、その高さを側壁にそろえている。

**奥壁と側壁の関係** 基底石は、北側壁の端面が奥壁の壁面に、奥壁の端面が南側壁に接するように配置されている。ただし、北側壁二段目は逆に、奥壁基底石の端面が北側壁二段目に接している。これは基底石と二段目の設置順が異なることを示している。

**床面 (図13-14、図版5-8)** 直径10～15cm、大きければ直径25cmほどの礫が敷き詰められた礫床である。削平によって玄室中央から開口部にかけて床面は破壊されているが、側壁沿いに一部が遺存している。

床面に敷かれた礫の形状は特にそろったものではなく、配置に規則性も認められない。礫の風化によるものかもしれないが一部では隙間があり、礫間には黄褐色粘質土が充填されていた(図14⑩-⑪、図版8-3)。石材は精選されたものではなく、壁体にも小型の石材を用いているため石材不足によるものとは考え難い。構造的に不可欠ではない床面は精美には整えようとはしていなかった可能性がある。

床面の高さは開口方向へ徐々に下がり、奥壁沿いでT.P.+21.8m弱、玄室半ばあたりでT.P.+21.75m、攪乱を免れた側壁沿いでT.P.+21.7mほどである。

玄室南東部では、奥壁コーナーに向かって高くなるように礫が配されており、隅に配置された土器を円形に囲んでいるかのようである(図版5)。最も高い礫の上面ではT.P.+21.9mを測る。

羨道・墓道の床面は削平されており、礫の有無は不明である。ただし3・4号墳を参考にすれば礫を敷かず素掘りであった可能性が高い。

**排水溝・羨道・墓道 (図10・14、図版4-3・8-3)** 玄室内の攪乱部分では細い素掘り溝が検出され、西側の周溝まで続いている。礫床の下からも検出されており、この溝は石室の排水溝であり、破壊された石室羨道・墓道の痕跡を示すと考えられる。溝の先端までを羨道・墓道と捉えれば、その長さは約4.5mとなる。

溝は玄室内では幅10～20cm、深さ10cm弱を測り、U字形の断面形を成している(図14⑩-⑪')。その位置は、玄室の半ば付近で石室中軸からわずかに北に偏り、やや南にカーブを描いて石室中軸と重なるように西に伸びている。

玄門付近にあたる大きな攪乱坑を超えると80cm前後と幅を広げる。溝の断面形は、二段落ちの上部



図13 2号墳石室平面・立面図

の開いたU字形となり、深さも20cm前後と深くなっている(図14⑩-⑪')。溝底面のレベルは玄室内ではT.P.+121.5m前後、西側周溝付近ではT.P.+121.3m前後と、周溝に向けて20cm程度低くなっている。

さて、この羨道・墓道の検出面で多数の礫が表出していた。上述したように攪乱坑以西では礫床を確認しておらず、溝の埋土中にあった大型の礫は石室石材が後世の攪乱によって転落したものと考えられる。羨道・墓道の遺構面での礫の分布には粗密があり、辺を並べるようなものも見受けられなかった(図13)。石室石材の転落石のほか、地山に含まれていた礫と考えられる。

溝埋土は玄室内では礫床の充填土に類似する粘質土で、細砂が混じる。溝は床面完成時には礫床下であり、溝埋土の土質は水を通すようには思われない。礫床を構築する以前、墓壇を掘削する段階において機能したものであると考えられる。

玄室外での溝埋土は、黒褐色のシルトに地山由来のブロック土や粗砂が混じり、玄室内のそれとは異なる。特に墓道部分と推測される溝内には大型の石材や土器等が落ち込んでおり、石室前面部分が削

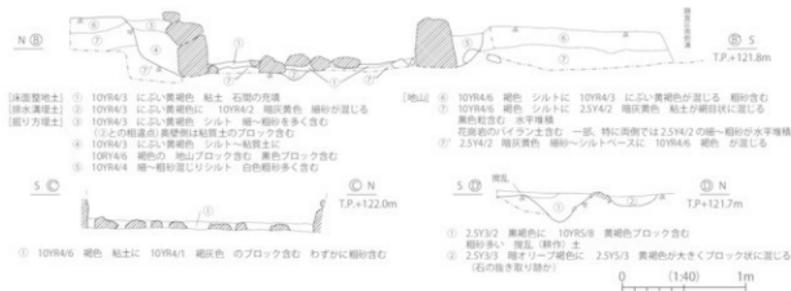


図14 2号墳石室・墳丘土層断面図

平を受けた際に大きく攪乱の影響を受けたものであろう。

**石室の構築課程 (図13・14、図版6・7)** 石室の構築過程について断ち割り土層断面や床面の状況から考えていきたい。断ち割りは石室中軸に沿って奥壁外側、それに直交する形で玄室を横断する形で設定した(図10)。

石室の構築は1)墓壇の掘削、2)床面排水溝の掘削、3)壁体の構築、4)床石設置の順で行われているものと考えられる。墓壇は検出面で短軸3m、長軸4mほどの長方形を呈し、壁面は底面から斜めに立ち上がって検出面ではほぼ垂直となる。その底面は平坦でT.P.+121.7mを測る。基底石を据えるための掘り方はない。石室中軸方向に浅い排水溝を設け、そのまま羨道・墓道に続けたものであろう。

各壁の構築順については石材端面の接し方から、南側壁、奥壁、北側壁の順に基底石を構築していったものと考えられる。

石材の形状からのみの推測となるが、南側壁は西側(開口方向)から設置されたようである。奥壁基底石も南側から順に3石を据えているものであろう。北側壁では、奥壁から1・2石目と3～5石目の間で単位が分かれている。これは2石目と3石目の間が離れていること、平面でみると石材がわずかながら「ハ」の字状に開いていることから指摘できる。どちらの単位が先置されたかは判断できなかった。ただし、3～5石目の単位については開口方向から順に置かれているように見える。玄室の大きさを調整するために「ハ」の字状になったと考えるならば、奥壁側からと羨道側からと両方向から石材を据えていったのかもしれない。

二段目はごく一部分しか残っていない。玄室北東隅では奥壁と側壁の基底石を先置する。それらを支えに二段目を据えていることと石材端面のあり方から、基底石、北側壁の二段目、奥壁二段目の順に積み上げたものと思われる。比較的残りの良い北側壁では、一段目と同じ箇所て区分することが可能である。奥壁から2・3石目から西側で高さを揃え、三角形の石材をはめこむ様相が見られる。なお壁体二段目は、石材の小口を横に据えて積んでいる。

石室の掘り方埋土は、にぶい黄褐色から褐色のシルトに地山由来と考えられるブロック土や細～粗砂が混ざったものである(図14③～⑤層)。かろうじて2石目のレベルまで確認できる北側壁では、基底石と二段目の間に明瞭な土質の差はなく、ほとんど間を置かず構築されたのではないかと考えさせられる。奥壁の掘り方では、③層とともに拳大以下の礫を用いる込め石も確認できる。

注目されるのは、断ち割りで検出された石室外の礫である(図版6・7)。奥壁・南側壁では、一見すると玄室の礫に続くかのように掘り方の外で礫が検出された。しかし、土層断面では風化した岩脈や水

平堆積が明瞭に観察でき、この礫を含む掘り方・墓域外の土層が自然堆積層、基盤層であることは確実である。おそらく床面の高さで岩脈状に地山に礫が含まれており、こうした地山の礫を床面にうまく利用したものと考えられる。上述した墓道・羨道部分に見られる礫も同様であろう。

以上のように、石室の壁体は南側から順に構築されているようであるが、各壁の石材を据える順序は整然としたものではなく、石材も不揃いである。どちらかと言えば、地山に含まれる礫を利用した礎床や、壁体に中型のものをを用い隙間に小型の石を充填するなど、ある材料を上手く利用して石室を構築しており、規格性を認めるものではないと言える。

#### iv) 遺物出土状況

横穴式石室は上半部と玄門から羨道にかけて失われ、石室内には攪乱土や転落石も多数検出されている。転落石の落下や攪乱の影響によって、石室内の遺物は埋葬時の状況から動いているとは思われるが、5cm程度の薄い粘質土に床面が覆われていたことや、遺物が礎床に接した状態で検出されていることから、かなり原位置に近い状況で残存していたものと考えられる。

玄室内では攪乱土を掘り下げた時点で遺物の姿が現れていたために、床面を確定した後、1点ずつ位置を記録しながらおおよそ南東隅から順に取り上げていった。

石室内の遺物出土状況は図15、図版5・8に示した。石室内出土遺物は図16・18・19に、周溝出土遺物は図17に示している。須恵器14点(1～14)、土師器2点(15・16)、鉄製品9点以上(破片数15片、21～34)、耳環1点(35)が出土している。なお、1・14が玄室前方の大形石材近辺から、33や34が石室検出中の黄褐色土層から出土した以外は礎床直上で出土した。

出土状況の傾向としては、玄室南東隅(奥壁側)に鎌や刀子といった鉄製農工具が集中し、土器は奥壁から北側壁沿いで出土している。須恵器のみならず、数は少ないが土師器も出土している点が特徴的である。また蓋杯は組み合わせさって出土するものはなく、杯身と土師器が重なるなど片付けたような状況を呈している。点数も蓋3点、身5点と一致していないが、これは攪乱の影響もあるかと思われる。以下、出土位置ごとに詳述する。

**玄室南東隅** 須恵器壺(11)、土師器甕(15)、鉄鎌(21～25)、鉄製鎌(26～29)、鉄製刀子(30)が出土している。前述したように礎床は南東隅へ高く作られており、石の隙間に11・15が据え置かれる。口縁部は玄室中央に向く。その15の口縁内部にひっかかるように鎌の基部(28)が検出され、その奥には刃部(29)が落ち込んでいた。接合はしなかったが、同一個体と考えてよさそう。

鎌(26・27)は、壁体から離れたやや内寄りの位置で出土している。また11のすぐ西、南側壁沿いで鉄鎌(21～25)や不明鉄片⑩が、奥壁沿いで刀子30と不明鉄片②が礫の間に落ち込んでいた。これらの鉄製品は破損し、礫の間に落ち込んでいるなど、礫の上に置かれたものが腐朽や土の堆積によって移動したものと考えられる。ただ、同一個体であろう鎌の出土位置を考えると、石室南東隅というおおよその位置は特定できるものであろう。

その他、器種不明の鉄片2点出土している。奥壁沿い中央に1点(④)、やや離れて南側壁3石目の前で1点(⑪)が出土している。④は長さ2cm、幅0.9cm、厚さ0.5cmの木質に鉄分が沈着したような破片で、断面形状は円形から方形。鉄釘(32)と近く、その破片の可能性はある。⑪は長さ2.5cm、幅0.6cm、厚さ0.2cmの細長い破片資料である。あえて推定するならば21や22など鎌の逆刺部や頸部の破片である可能性がある。

**石室北東部** 須恵器杯3点(2・5・6)が中軸やや北で、北側壁沿いで杯身(4)が出土している。2・4・6

は正位で、5は逆位。2のすぐ北で鉄釘(31)が検出された。

**北側壁沿い中央部** 3点の土器が重なって検出された。上から土師器鉢(16)、須恵器杯身(8)、同じく杯身(7)の順でほぼ完形の土器が正位で入れ子状となっていた。

**右袖部周辺** 須恵器杯蓋(3)、広口壺(10)、短頸壺(12・13)を破片で検出した。いずれも上層の石室攪乱層や転落石の周辺から出土した破片と接合し攪乱の影響を受けているが、図15に図示した遺物から原位置の推定は可能である。

杯蓋(3)は逆位を向く。やや高い位置で出土しており、側壁沿いにあったものであろう。隣接した短頸壺(12・13)は破損するものの体部の形状を残したままであり、石室長軸に沿って2点が並んでいたものと思われる。広口壺(10)は礎床からずれ落ちた位置で出土しているが、抜取穴付近、短頸壺の隣に並んでいたと予想される。

**墓道部** 墓道の痕跡として残る排水溝で、須恵器高杯(9)が出土している。1区拡張前、2号墳検出以前の段階で出土したものである。70cm程の大型

の礎や20cm前後の礎が留まった部分で、口縁部を上に向けて斜めに倒れていた。礎は崩落した石室石材と思われる。杯部を3分の2ほど破損している他はほぼ完形であり、出土位置に近い羨道や墓道で用いられたのであろう。

**埋葬位置の推定** 鉄釘(31・32)は奥壁沿い、ほぼ中央とそこから北に50cmほど離れた位置で、先端を西に向けて出土した。33も鉄釘と考えられ、上層の攪乱土中から出土している。31・32を木棺の短辺に該当すると考えると、玄室やや北寄りの位置に、石室の長辺に沿った向きでの埋葬位置が想定できる。

頭位については攪乱土で出土した耳環(35)が参考になろう。攪乱土とは言え石室前方に落ち込む天井石直上の層で、同じ層から出土した須恵器は右袖部の遺物(3・10)と接合している。すなわち耳環も削平された玄門付近にあったものと考えられる。従って、頭位方向は西、石室開口方向と考えることができよう。

なお、攪乱土からは須恵器杯蓋(1)、提瓶(14)も出土している。これらも玄門付近にあったものであろう。

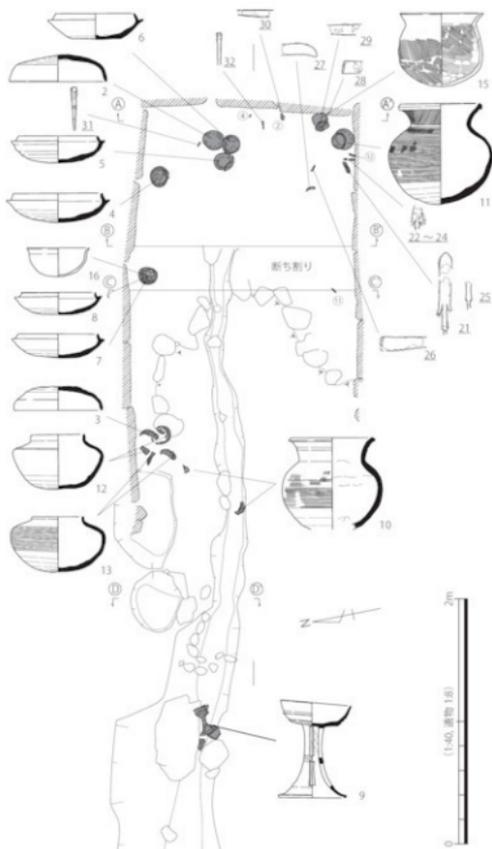


図15 2号墳遺物出土状況図

**水晶切子玉** 廃土置き場から水晶製切子玉(36)が見つかった<sup>1)</sup>。発見した廃土の部分と掘削のタイミング的に最も可能性が高いと考えられたのが2号墳の出土だったため図19に示しているが、断定できるものではない。

#### v) 出土遺物

石室床面から出土した遺物はほぼ全て、周溝出土の遺物もほぼ図化した(図16～19、図版24-1・26～29)。また2号墳の上層で崩落した天井石周辺を掘削中に出土した1-14も石室由来と考えられる。なお、図化した以外には2号墳検出中の包含層から杯や甕、かなり簡易化された波状文が施文された須恵器片が出土している。

**須恵器(図16)** 1～3は**杯蓋**。天井は低く丸い。1は天井部との境がわずかに凹線状にくぼむが、不明瞭である。天井部外面にヘラ記号「×」、内面には当て具痕が残る。2の天井部内面には当て具痕をナデ消した痕跡。3は天井部との境が凹線状にくぼむ。4～8は**杯身**。立ち上がりは短く内傾し、受部は上外方にのび端部は丸い。6以外の立ち上がりは口縁端部で上方にのびるが、6はやや内湾気味で底部はヘラケズリによって平らになる。5の底部外面は成形時の凹凸が残り、ヘラ記号「|」が施される。5～7は焼成があまく灰白色を呈し、器面が摩耗している。口径は14.3cm(4)から12.0cm(8)と幅がある。蓋と身のセット関係は不明であるが、口径と出土位置から2と4は組み合わせるものと思われる。

9は無蓋の長脚二段**高杯**。杯部外面に凸線を3条めぐらし、細くのびる脚部には2方向の透かし孔を穿つ。10・11は**広口壺**。いずれも胴下部は回転ヘラケズリ、上部にはタタキを消すカキメが見られる。10は口縁端部が肥厚して稜を成す。頸部に沈線がめぐる。11の口縁端部は肥厚して方形を成す。頸部には斜め方向のハケメ。12・13は**短頸壺**。12は肩部に沈線が施される。13は胴部にカキメ調整。いずれも肩が張り、最大径が肩部にある。14は**提瓶**。肥厚した端部に凹線がめぐる。把手は短く終わる。体部両面にカキメ調整。**土師器(図16)** 15は**甕**。内外面ともに丁寧にハケ調整が施される。外面には黒斑が認められる。16は**鉢**。器壁は薄く、歪みもない。器面摩耗して調整不明。

**周溝出土須恵器(図17)** 17は**杯蓋**。天井部との境がわずかに凹む。外面の色調は灰褐色で赤味を帯びる。18は**低脚高杯**。透かし2孔は3cmほど離れるのみで対面ではなく同じ方向に向く。19は**短頸壺**。肩部の屈曲は明瞭。体部外面の一部には粘土が弧状に付着しており、重ね焼きの痕跡と思われる。

20は**大甕**。復元口径23.6cm、胴部最大径41.7cm、残存高39.0cmを測り、底部を欠く。口縁は丸く折り返されて下部に隙間が空く。体部はタタキ成形の後、外面に胴中部～肩部にかけてカキメ調整が施される。頸部はタタキがナデ消され、外面にヘラ記号「#」が記される。「#」は口縁端部をかすめて上から下へ縦の線を入れた後、右から左下がりの横線を入れている。

**鉄製品(図18)** 21～25は**鉄鏃**。腐食が著しいがいずれも同じ形状のものと思われる。最も残りの良い21は全長12.3cmが残存する。有茎の柳葉形で根部には逆刺が認められる。断面は錆のため不明瞭だが、両丸造りと考えられる。頸部は棘状で腐食のためか内部は空洞。鏃身は長さ9.7cm以上、幅2.3cm、厚さ0.15～2cm、頸部は長さ2cm以上、幅0.7～0.8cm、厚さ0.25cm。22～24は出土位置を同じくし、同一個体の可能性もあるが接合しない。22は鏃身根部の逆刺部分であろう。ただし図左の側面では刃部が不明瞭となり、刀子や鎌といった別の器種である可能性もある。25は鏃の頸部で角閃と考えられる。

26～29は**鉄鎌**。26・27と28・29は刃部の途中で欠失するが、出土状況からそれぞれ同一個体となるものであろう。29は残存状況が悪かったため刃先を左に図示しているが、いずれも刃先を右側にするもの。26・27は刃部の先端が内反りとなって尖る曲刃鎌。折り返し部は刃部に対してほぼ直角になる。残存長

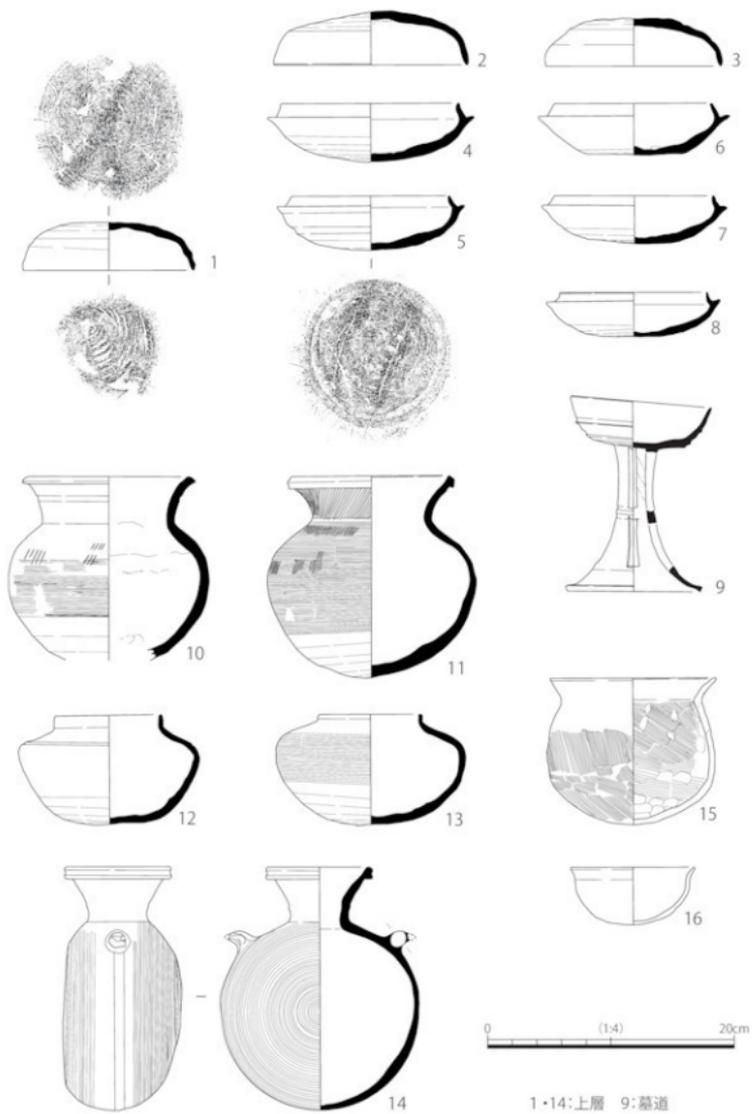


图16 2号填出土遗物实测图(1)

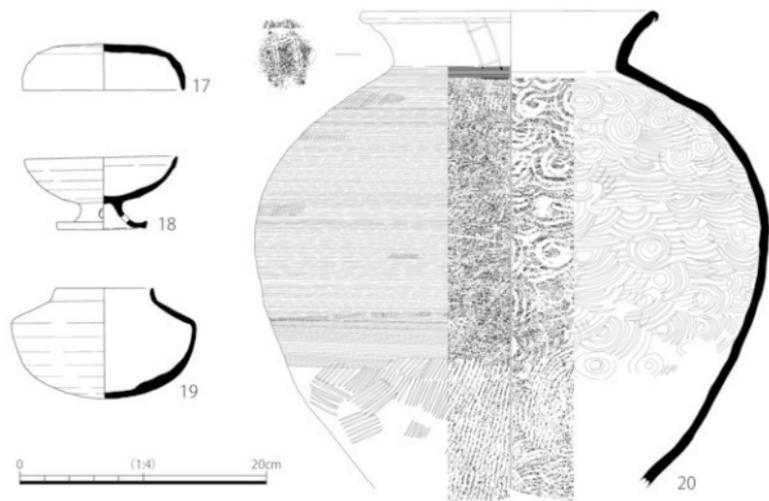


图17 2·3号填周溝出土遺物実測図

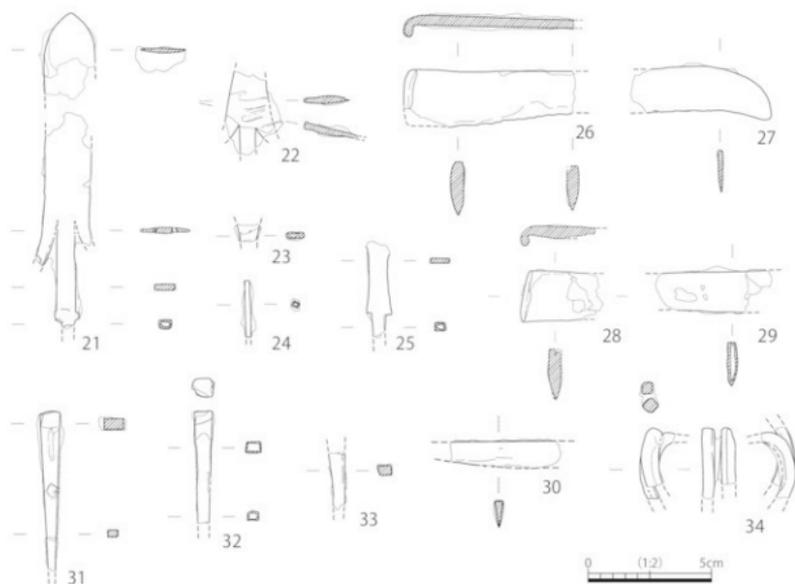


图18 2号填出土遺物実測図(2)

12.6 cm、刃部の幅は2.2 cm。刃先へと薄くなる。28・29も同様の形態をとると思われるが先端が欠失しているため不明である。折り返し部はやや鈍角になる。残存長8.6 cm、幅1.75 cm。鈍角のため厚みが増している。30は刀子。基部と刃先が欠失する。残存長3.45 cm、幅0.8 cm。

31～33は鉄釘。31・32は頭部がわずかに折れる。31は残存長6.5 cm、頭部近くで0.8×0.45 cmの長方形の断面形。欠失する先端部側面にわずかに木質が付着しており、横方向の木目が観察される。32は残存長4.6 cm、頭部付近で0.65×0.45 cmの長方形断面。内部腐食のためか空洞となる。33は頭部・先端部を欠失しており、鉄線頭部の可能性もある。残存長2.3 cm、断面は0.55×0.4 cmの長方形を呈する。

34は不明鉄製品。一辺約0.5 cmの方形断面をもつ弧状の棒が、2点重なって錆で融着している。残存長2.9 cm。

**耳環 (図19)** 35の1点が石室前方に落ち込んだ大石上層の攪乱土から出土している。中実で表面は銀色を呈し、破損部は緑青に覆われている。銅芯銀板巻のものか。ごく一部に金が付着しており鍍金もしくは金張が施されていた可能性がある。平面形態はほぼ正円形、環部断面もほぼ正円を呈するもの。表面は剥離しているが環部は平滑。平面外径2.5～2.65 cm、環部断面径0.6 cmを測る。

**切子玉** 廃土中から36が出土した。平面形態は六角形。無色半透明で水晶製と思われる。穿孔は片面からのみ行われ、穿孔開始面で0.3 cm、終了面で0.15 mmを測る。最大長1.7 cm、最大径1.45 cm。

**遺物の時期** 主に須恵器から考えていくとTK43型式に位置付けられるものである。特に古い要素は見られず、7・8のように立ち上がりが高くやや小型なものを重視すると、新しい要素が入ってくる段階であるように考えられる。高杯や提瓶についても矛盾はなく、TK43型式段階としておく。

#### (4) 石塚3号墳

##### i) 検出の経緯

**概要 (図7・20)** 3号墳は1区の南西隅にあり、調査時は「南古墳」「南石室」などと称していた。平坦な地山面で両袖式の石室と周溝の一部を検出したものである。石室上部は削平を受けて残存していない。検出面のレベルはT.P.+121.3～121.7 mを測り、石室の東側から北西方向にごく緩やかに低くなる。調査区の南西側は1～2 m程度の比高差をもつ谷が入り込んでおり、石室開口部はその谷に面している。

**検出状況** 耕作土を約20 cm除去するとすぐに地山面が現れ、一部で50 cm大の礫が集中していた。精査を行ったところ一部の礫は内側に面を揃えて並び、南西方向に口を開ける「コ」の字状を呈していた。よってこの礫群を石室壁体とその内部の転落石と想定して調査を進めた。墳丘盛土や天井石は認められず、造成時に上方は削平されたものと判断できる。

さて調査区南西隅、石室開口部では、壁体の主軸と異なる北西～南東方向へ10～20 cmの礫が80 cm程度の幅で帯状に分布していた(図8・⑤層、写真4)。その上下にはしまりのない粗砂混じりシルトが堆積しており、現代の耕作地に伴う暗渠もしくは耕作地の区画の石積みみであると考えられた。この②～⑦層を除去すると斜めに削平された地山面が現れ、玄室壁体に続く黒色土を検出したのである(写真5)。

**石室埋土の状況 (図23、図版12)** 石室埋土は、検出面での石室中軸(⑩・⑩')とそれに直交するライン(セクション②・c-c')で十字にベルトを設定して掘削を行った。さらに玄門部に短軸方向のベルト(セクション①・④-④')を残している。羨道・墓道部では上述した黒色土のラインを半裁し、東側を先行して掘削した。

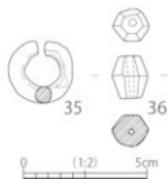


図19 2号墳  
出土遺物実測図(3)



図20 3号墳平面図

埋土はいくつかのまとまりに分けることができる。まず耕作土直下では、黄灰色粗砂混じりのシルト層(①層)が堆積している。この層では、10～20cm程度の礫や30cm前後の壁体らしき石材が多量に落ち込み、その間に瓦質土器椀、羽釜、土師器等が出土した(写真7)。

下層には灰～暗灰黄色の粘土が堆積していた(②⑤⑬)。上層ほど顕著に大型の礫や中世の土器を包含しない。平面的に分層し難く調査時は同一層として掘削しており、玄室床面を「灰色粘土」が覆ってい

たとえていた。灰色粘土間にある暗褐色系のシルト層や粗砂混じりの土層(③④⑥⑦～⑩)もこの灰色粘土層と同様、羨道側と奥壁側から流れ込むように堆積しており、土質は異なるものの同様に堆積したものと考えられる<sup>5</sup>。⑤層ではほぼ完形に復元できる土師器碗(図34-99)が1点のみ出土したため、中世に落ち込んだ土と考えられる。ところで、①層以下にも礫は含まれているとはいえ、比較するとかなり少ない。⑤層が堆積する時点で石室上部が一部壊れ、徐々にシルト～粘土層が堆積してから①層時点でさらに大きく崩落、もしくは削平が及んだと思われる。また中世の土器は、玄室北側でまとまって出土しており、完形品も含まれている。中世には石室上部を破壊し、土器を用いた何らかの行為が行われたのであろう。

これらの粘質～シルト層を除去すると、奥壁沿いでは器高の高い高杯などの土器上面が表出した。この時点で作業効率と平面的な木棺痕跡等の検出を考慮して長軸ベルトを除去し、床面の確定を目的としてセクション②沿いを先行して掘削した。その結果、先行トレンチ内で礫が一面に広がっていたため、これを床面として礫床の検出を進めていった。

礫床の直上は灰黄褐色で粗砂の混じる粘質土～シルトで覆われており、礫の間にも堆積していた(⑩～⑬、⑱～⑳)。粘質土を凹凸のある礫間に充填し床面を平坦に整えた可能性も考えられたが、粘質土を除去して検出する遺物や礫間に落ち込んでいる遺物もあり、少なくとも埋葬時にはある程度床面に凹凸があった状況であったと考えられる。よって床面は⑱層を除去した礫上面とする。なお礫間の粘土は、壁体の構築作業中にも必然的に堆積すると考えられ、雨水等によっても粒径の細かい土がゆっくりと床面の礫の間に堆積していったものではないかと思われる。

羨道・墓道部分では、⑰⑱層が墓道をふさぐように山状に堆積する。20～30cmの礫が多く含まれ、⑰層下部では、須恵器壺類や土師器(70～72)、石製紡錘車(96)が出土している。検出面では⑱層と⑰層の境が壁体のなくなる部分に当たることや、明瞭な黒色土を用いている点も合わせて、石室閉塞であった可能性が指摘できる。⑰層は入口付近に比較的粗砂が多い傾向にあるが、礫を多く含むこともあり細分はできなかった。閉塞はひと息に行われたのであろう。

⑱層下では、粘質土(⑱⑳)が地山面直上でほぼ水平に堆積する。玄門付近の窪みで遺物を包含しており、これらが置かれた後に閉塞が行われたことになる。

以上、石室埋土の状況をまとめると次の通りとなる。埋葬後、少なくとも玄門部の窪みに粘質土が堆積した後、黒色土と土器を用いて石室の閉塞が行われた。その後、中世に至るまでは床面の礫間に徐々に粘質土が堆積する程度であったが、⑤層時点で石室上部が一部口を開けて土が流入した。そして①層



写真4 3号墳羨道・墓道上層の礫(北西から)



写真5 3号墳墓道検出状況(南西から)

時点が大きく天井石を含めて壁体が壊され、完全に土中に埋まったのであろう。また土層断面からは上層からの掘り込みや攪乱の痕跡は認められず、床面に攪乱は及んでいないと考えられる。

## ii) 墳丘と周溝

**周溝の形状と墳丘形態 (図 20)** 墳丘は削平のため確認できておらず、平坦な基盤層上面に石室と周溝が残存する。周溝は東側の2号墳と共有している。周溝幅は検出面で1.5m前後を測り、わずかに内彎しながら北東方向に直線的にのびた後、東西に分岐する。北西方向にゆるやかにカーブを描く部分は、深さ数cm程度とごく浅く不明瞭になってすぐに痕跡を追うことができなくなる。周溝がこのまま続くとする、ちょうど試掘3トレンチ付近にあたるが、試掘調査では、平面・土層断面ともに周溝らしき遺構は検出していない。

墳丘形態は、周溝が直線的なため方墳である可能性もあるが、現場での印象は円墳であり、共有部分であること、コーナー部が丸みを帯びることから円(楕円)墳と考える。

**周溝の断面形と堆積土 (図 12・23)** 玄室の短軸ベルト(セクション②)と同一ライン上で、周溝にベルトを設定している(図 23c-e')。周溝底のレベルは南が最も低く T.P.+21.1m、北へ徐々に高くなって T.P.+21.6m を測る。断面形は、墳丘側に片寄るU字形で上部が開く。埋土は暗オリーブ褐色で上層はシルト、下層は細砂や粗砂混じりのシルト。なお、最も深いところは2号墳で既述したb-b'断面付近で40cm程度の深さがある(図 12)。

**墳丘の規模 (図 20)** 墳丘規模は、石室奥壁の中心を通る中軸と、それに直交して玄室の中央を通るラインを基準に復元すると、中軸直交ラインで墳丘径約11mを測る。中軸上では周溝のカーブから復元して直径12m前後と考えられる。周溝を含めた規模は、中軸直交方向で約13.5m、中軸方向で約14mに復元される。もし北側で4号墳と周溝を共有するのであれば、中軸上の復元径は墳丘径約17m、周溝を含めた場合20m前後と推定されるが、やや歪な形態となり2・4号墳と比較して大型となる必然性がないため墳丘の規模は約12mとしておきたい。

**墳丘沿いの石列 (図 20、図版 9)** 特徴的なのは、墳丘に沿った4mほどの範囲で石列が検出されたことである。石列を構成する礫はおおよそ20cm前後だが大小があり、地山直上で周溝肩部に並んでいる。ただし向きや大きさが揃っているわけではなく、非常に乱雑な印象を受ける。礫間にも盛土は見られず、周溝埋土と同じ土が入り込んでいた。石種は地山に含まれるものと同一とみられ、地山に入り込んでいる礫もあることから、地山の礫を利用して構成されたもので3号墳に伴うものと考えられよう。

さて、この石列はどういった性格をもつものであろうか。石列は、ごく限定的な範囲でしか分布していない。削平された可能性はあるとはいえ、周溝内に顕著な礫の堆積はないため葺石の残存とは考え難い。ほぼ同一の高さで検出した南側へと連続しないのは、もともと存在していなかったと考えたほうが自然であり、墳丘端の区画のためとも言い難い。

そこで石列の存在する位置であるが、ちょうど2基の周溝分岐部にあたり、2号墳の周溝を西へ延長すると石列につき当たる。ここで注目されるのは、2号墳と3号墳の周溝底のレベルと埋土である。2号墳の周溝は3号墳へと向かって低くなっていて、埋土下層には粗砂が堆積する。周溝の機能時には、2号墳から3号墳の周溝へ、特に石列へ向かう流水の存在が想定できるのである。つまり石列は、3号墳の墳丘を保護する堤のような役割を担っていたのではないかと考えられる。さらに以上のように想定すると3号墳の石列を構築する前に、2号墳があったと想定できることになろう。

**周溝出土土器 (図 17)** 2号墳で既述した。

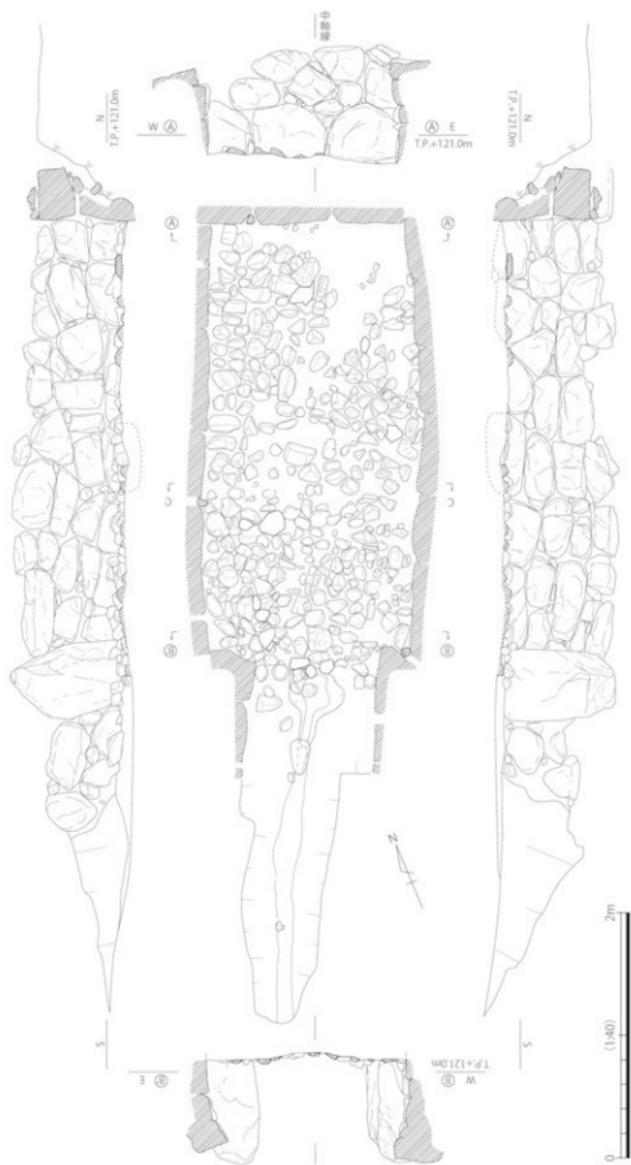


图 21 3号填石室平面·立面图

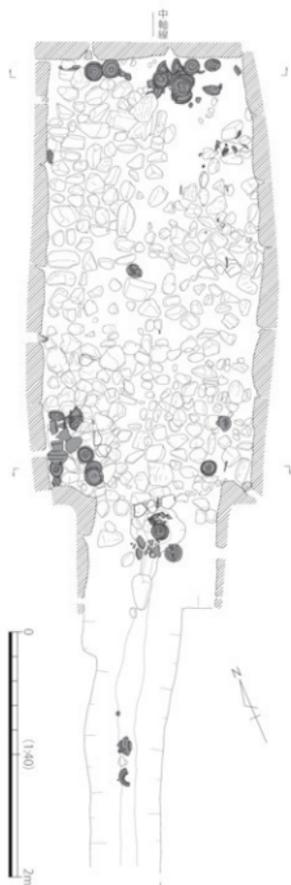


図 22 3号墳石室遺物・礎床検出状況図

むしろ二段目の上面 T.P.+21.27m 付近で目地が比較的揃う。これは奥壁一段目の高さと同様であり、石積み高さの基準となっていたと考えられる。

ただし基礎石で数えると奥壁から5石目から境目として、二段目の高さにずれが生じている。この4石目と5石目の境では縦に目地が通っており、そこで作業単位を違えていたと捉えることができよう。

また、もう一つの高さの基準として、残存部からの判断になるが、T.P.+21.77m 付近すなわち奥壁3段目と袖石上面の高さもほぼ揃っていることが指摘できる。

なお、中～大型の横長の石材を横位に積んで揃えた印象のある東側壁であるが、奥壁から3石目前後までは方～台形の石材、比較的小型の石材を多く用いている。高さを揃えるという点ともう一つ、玄室

### iii) 埋葬施設の構造

**石室構造と規模** 石室は上部と墓道端が削平されている他は良好な状態で検出された。両袖式の横穴式石室で、主軸は南から25.1° (25° 6' 25.2") 西に振り、南西側の谷方向へ開口する。全長は6.9mである。

石室構造のうち、3石で構成された奥壁、立柱のような袖石、礎床、短い羨道といった点に特色が見出せる。なお羨道部分の名称は、壁体のある部分を「羨道」、素掘り部分を「墓道」と呼称する。

**玄室** (図 21、図版 10・11) 玄室平面形は石室の中軸方向に長方形をなし、東側でやや胴部が張る。玄室の長さは、袖石の面を結んだラインから奥壁までで3.5mを測る。なお、西側の袖石角部までの計測であれば3.6mとなる。幅は奥壁が最も狭く1.56m、ほぼ中央で1.76m、袖部側では1.63mを測り、中央が幅広くなっている。上述したように石室上部は残存していないが、壁体は3～4段の石積みが残り、高さはおよそ0.9mを測る。石材は2号墳よりやや小さく大きさを揃えている印象を受けるが、これは上部が残存するか否の差とも考えられる。石材の大きさは、幅20～30cmと小さいものもあるが、主に幅50cm前後の石材のほか、隙間を充填するために10～20cmの小型の石材を用いている。

もう一点特徴的なのは、壁体がわずかではあるが徐々に内側にせり出しながら積まれる点である。部分によって差はあるが、最も顕著な玄門付近では、五段目もしくは三段目の石材が5～10cm程度内側に入る(図 21 ⑧-⑧')。

**東側壁** 現状で三～五段の石積みが残存し、基礎部には6石が配置されている。幅50～90cmとやや大きめの石材を用いるが、形状や上面の高さは揃っておらず、

長の調整もあると考えられる。また玄室の平面形を見ると、基底石は徐々に外側に張り出し、奥壁から4石目で最大15cm外側に配置された後、袖石へ向かってまた狭まっていく形態である。一方で西側壁のラインは直線を成し、東側にだけ張り出している。これは胴張の形態を意図したというより、基底石を設置する際に玄室の長さに規制されてずらしていった結果ではないかと考えられるのである。

**西側壁** 現状で三〜五段の石積みが残し、基底部には7石が配置される。東側壁と異なり、西側壁では石材の形や向きがばらばらで高さも揃うことはなく、30cm前後の小型の石材が比較的多い。また袖石直近の基底石は幅20cmと小型石材を用いている。二段目の奥から4石目では縦位に石材が用いられるなど、見た目よりも長さの調整を重視しているようである。その結果であろうか、東側壁のように胴部が外側に張り出すことはなく、直線を成している。

構築順については、基準となる高さを抽出することができなかった。東側壁で構築の基準と考えた高さのうち、ほぼ袖石上面を通るT.P.+121.77m付近で、辛うじて可能性が指摘できる程度である。ただし石材の重なりを観察すると、一段ずつ順に構築していったように見受けられる。奥壁から4〜5石目付近で石材の上面ラインがやや下がる部分、袖石近くで小型石材が多く充填される部分は、調整が行われた部分と考えることもできる。

**奥壁** 二〜三段の石積みが残る。基底部には幅60cm前後、高さ50cm程度とやや大きめの3石が並び、その上面はT.P.+121.27m程度と高さを揃える。東側壁に基底石の端面が接することから、東から西への設置が考えられる。二段目、三段目は側壁と同程度の40cm前後の石材を用いているが、一段目の隙間を埋めるよう20cm以下の小型石材を多く用いている。なお、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。

**奥壁と側壁の関係** 基底石は奥壁の端面が東側壁に接するように、そして西側壁の端面が奥壁に接するように配置されている。しかし奥壁二段目では逆に、東側壁三段目の端面が奥壁に接している。二段目以降の西側壁との関係は、奥壁の欠落のため不明であるが西側壁の石材端面が揃っている状況を考慮すると、基底石と同じく奥壁に接していたのではないかと考えられる。

**袖部** 壁体のうち、最も目立つのが袖部を一石で構成する袖石である。玄門両側で、あたかも立柱のように縦長の石材がそびえたっている。石材は高さ0.9m、幅は最大で0.6m、奥行き0.4mほどで、3号墳の石室石材のうちで最も大きく、構築に際して一つの基準となったことは想像に難くない。検出面でもある袖石上面のT.P.+121.77m付近で、側壁や奥壁石材の高さがほぼ揃っていることからも肯けよう。

なお、東側の袖石は、ほぼ直角な角を有していることから加工を疑われる向きもあったが、明確な痕跡は観察されなかった。

**袖石と側壁の関係** 側壁はいずれもその端面を袖石に接している。上述したように、側壁に先んじて配置され、構築時の基準となったのだろう(写真6)。

**羨道・墓道** 羨道は一〜二段の石積みが残存し、壁体の高さは約60cmを測る。袖石を含めても基底石は東壁で2石のみ、西壁では3石で終わる短いものである。二段目は入口側へずれて積み重ね壁体下のラインは斜めに上がる。掘り方のラインも壁体に沿って斜めに上がっており、石材を掘り方に



写真6 3号墳東側壁と袖石(北西から)

はめこむようにして積んだのであろう。石材は40cm前後と玄室とほぼ同大だが、5～15cm程度の小型の礫が石材間に充填され、特に東側ではより小型の礫が目立つ。

袖石の面を結んだラインから羨道端の石（西壁の南端）までで長さ1.5mを測る。そこから素掘りの墓道端までは1.9mが残存し、あわせて3.4mを測る。なお、墳丘端まで墓道が続くと仮定すると、羨道・墓道長は4m程度に復元できよう。羨道幅は基底石がある部分では1.0m、狭い部分では0.8m。墓道幅は0.6m前後と次第に細くなる。

**玄室床面** 玄室床面の高さは、礫の上面でT.P.+120.94m前後を測る。礫の大きさ等によって上下するが、床面のレベルはほぼ水平である。なお地山面が露出している部分はT.P.+120.85m前後と5～10cm程度低い。

玄門部では壁沿いはT.P.+120.94mと玄室内とほぼ同じ高さだが、中軸ラインを中心として幅45cm程度の断面皿型に窪みT.P.+120.87mを測る（図21㉑-㉒）。

**礎床** 床面に敷かれる礫は10cm程度の小型のものや25cmを超えるものまで使われており、形も多様である。礫の面は揃えず、分布にも疎密があり玄室中央付近は疎らである。特に遺物の集中する北東隅から奥壁沿いでは地山が露出しており、T.P.+120.77mと礎床より約15cmも低く、奥壁基底石の下部が見えるほどである（図版15-3）。後述するがここは被葬者の頭部が想定できる位置である。須恵器は破損していたが埋土に攪乱は認められず、盗掘の痕跡とは考え難い。礎床に凹凸があることを考えると、土器等を並べるために礫を除いた可能性をあげておきたい。

一方で玄室南西隅では、およそ南北70cm×東西40cmの密に敷かれた礎床の上に遺物が載り、その周囲を礫で囲んでいるかのようにであった。礫には風化して砂状になっているものもあり、空白の部分にも敷かれていた可能性はある。比較的整って見えるのが石室北西部であり、長軸25cm程度の横長で比較的大きい礫が敷かれている。

なお石室埋土の状況で言及したように、埋葬時には礎間はある程度凹凸のある状態であったと考えられる。玄室床面を斯ち割った結果（図25㉑、図版11-3）、玄室床面には羨道から続く排水溝が及んでおらず水が溜まりやすい状況にあると言える。礫は床面の水気から棺や副葬品を保護するために敷かれたものだったのかもしれない。また、2号墳でみたように地山に含まれる礫を除去するのではなく、利用していた可能性も指摘できる。

**羨道・墓道床面**（図版10-3・14-2） 玄門付近で床面に礫がなくなり、横断面はU字状を呈する。中軸ライン上T.P.+120.80mを最低値として壁体下端ではT.P.+120.88mを測る。ほぼ中央には2～3cm程度



写真7 3号墳石室上層の礫（東から）

の浅い窪みが掘り込まれ土器（64～69）と鉄製刀子（78）が出土している。この窪みが玄門部礎床下で溝状に続くと思われるが、玄室中央の斯ち割り部では地山面は平坦であり、玄室中央までは続かない。

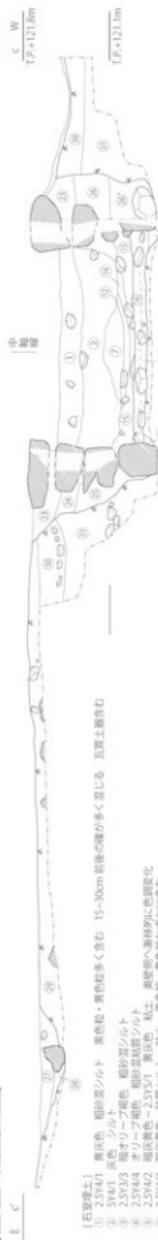
図21では図化した断面ラインが中軸からずれているため床面が高くなっているように見えるが、実際は羨道部から墓道へ徐々に低くなって墓道南端でT.P.+120.72mを測る（図23）。

**壁体掘り方**（図20・23・25㉑、図版12-1） 石室埋土と同一ライン上で墳丘を、また床面もセク

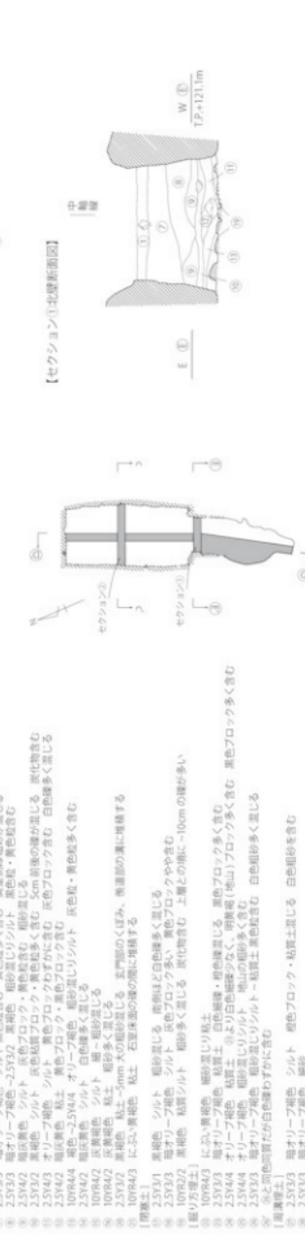
【石室埋土・墳丘土層断面図】



【石室埋土・墳丘土層断面図】



【セクショングラブ北層断面図】



- ① 25741 褐色 粘砂多き含む 15~30cm前後の層が多く混じる 瓦質土層含む
- ② 5741 灰色 シルト 粘砂多き含む
- ③ 25733 暗オリーブ褐色 粘砂多き含む
- ④ 25742 暗赤褐色 粘砂多き含む
- ⑤ 25743 暗赤褐色 粘砂多き含む
- ⑥ 25744 暗赤褐色 粘砂多き含む
- ⑦ 25733 暗オリーブ褐色 シルト 黄色味多く含む 粘砂多き含む
- ⑧ 25742 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ⑨ 25743 オリーブ褐色 シルト 粘砂多き含む
- ⑩ 25744 オリーブ褐色 シルト 粘砂多き含む
- ⑪ 107844 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ⑫ 107842 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ⑬ 25732 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ⑭ 107843 暗赤褐色 粘土 5cm前後の層に混雑する
- ⑮ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ⑯ 107842 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ⑰ 107842 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ⑱ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ⑲ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ⑳ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㉑ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㉒ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㉓ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㉔ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㉕ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㉖ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㉗ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㉘ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㉙ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㉚ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㉛ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㉜ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㉝ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㉞ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㉟ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㊱ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㊲ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㊳ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㊴ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㊵ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㊶ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㊷ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㊸ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㊹ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㊺ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㊻ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㊼ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㊽ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㊾ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む
- ㊿ 107843 暗赤褐色 シルト 粘砂多き含む

図 23 3号墳石室・墳丘土層断面図

シヨ②沿い約40cm幅で断ち割った。地山を掘り込んで形成された墓壇は検出面で壁体の20～30cm外側にあり、中軸直交ラインで墓壇の大きさは約3.0mを測る(図20)。東側壁や奥壁では斜めに掘り込まれ、2段ほど傾斜変換を伴う(図23)。西側壁では垂直に掘り込まれた後、基底石の高さで内側に狭まり、再度垂直に掘り込まれている。基底石はほぼ墓壇に接して置かれており、壁体に沿って最小限の大きさに掘り込まれていると言えよう。墓壇底面はいずれもT.P.+120.7m前後の高さにある。玄室中央、床面の断ち割りによると、床面の高さから20cm程度掘り込んで掘り方を設け、地山直上に基底石を据えている。掘り方には礎床間と良く似た黄褐色粘土(②層)が堆積する。礎床と同様に整えられたのであろう。

掘り方埋土は、いずれも暗オリーブ褐色の粘質土で、地山由来の粗砂やブロック土を含んでいる(②～⑤層)。分層線は、東側壁では3石目と4石目、西側壁でも3石目の壁体上面もしくはそこからやや下がった高さであり、壁体構築上の作業単位を示しているものと思われる。ただし、この分層は粗砂の多寡やブロック土の有無によっており、大きく土質が変わるものではない。地山の掘削土を用いて時を置かず掘り方を埋めたのであろう。奥壁沿いでは、ほぼ壁体に沿う掘り方が設けられ、10cm前後の礫が裏込めとして多く用いられている。断ち割りの下部では、地山に含まれる多くの礫によって掘削や観察が困難となった。2号墳と同様、床面のレベルで岩脈状の地層となっている可能性が指摘できる。

**石室の構築過程** 以上から構築過程を復元していきたい。まず、地山を整形し周溝と墓壇を掘り込む。墓壇の大きさはほぼ石室の大きさを決定付けており、当初から規格があったと考えられる。基底部の石材を据えるには、掘り方を設けている。一段目は石材の広い面を石室内に向ける長手積みで、二段目以降は石材小口を利用する小口積みである。石材端面の関係性から考えると、まず置かれたのは両袖石である。その後、東側壁の二段目まで、奥壁の基底石、西側壁の基底石の順で据えられていったものと考えられる。次は、奥壁2段目を築いてから、東側壁の三段目以降を設置する。西側壁も奥壁2段目設置以降に壁体を積み上げていったのであろう。羨道部については判断できる要素を欠いているが、石材はほぼ墓壇に接しており袖石設置後に積んだとみられる。

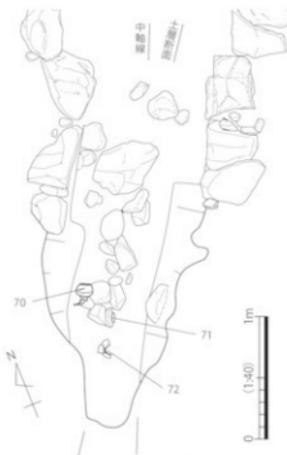


図24 3号墳羨道～墓道黒色土中礫・須恵器検出状況図

#### iv) 遺物出土状況

3号墳の石室上部は失われているが、埋土や遺物が床面に接している状況から、転落石や埋土の流入による影響のほかに、埋葬時から大きく攪乱を受けていないものと思われる。

石室床面の遺物は灰色粘土(図23-②～⑩層)を除去した状況で、高杯などの背の高い遺物の上面が検出されていた。取り上げは全て図面に記録して行い、およそ石室北東部から順に取り上げた(図24～26、図版13～15)。

遺物は須恵器33点、土師器4点、鉄製品8点以上、鉄釘2点、玉類11点、耳環2点が出土し、奥壁沿い(図26a)、北東部(図26b)、南西部、玄門部、羨道部のおよそ5か所にまとまって分布し、ほか数点がそれ以外の位置にある。

**玄室奥壁付近(図25・26 a、図版15)** まず奥壁沿いには須恵器(杯蓋7点、つまみ付蓋1点、須恵器杯身4点、高杯2点、提瓶1点)と鉄製品(鎌(鉞)2点、斧1点、刀子1点、不明鉄片1点)が出土している。これらの遺物は礎床ではなく、地

山が露出した部分で出土している。

最も上で出土し、目立つのは提瓶(51)である。高杯(50)の杯部に接するように杯身(46・48)の上に倒れ込んでいた。杯身(47)は、提瓶とほぼ同レベル、正位で出土しており、その下で破損していた杯蓋(40)は逆位を向く。

高杯2点(49・50)は奥壁に脚部を向けて同じ方向に倒れている。特に49は破損して20～50cm東から出土した破片と接合している。埋土の流入によって倒れたものであろう。南東隅の奥壁沿いでは杯蓋2点(41・43)が、正位で並んでいた。そのやや南で杯蓋(39)が破片で出土しており、bの範囲にも破片が点在する。

これらの須恵器を除去すると、43・49の下で鉄製品が出土した。鎌(75)と不明品(79)は出土時は錆によって融着しており、79は75の一部である可能性もあろう。鉄斧(81)はその下で横位かつ刃部を南に向けて出土している。石室ほぼ中軸上、40の下では刀子(77)が切先を奥壁に、刃部を東に向けていた。

石室中軸より西側では、口縁を上に向けた杯蓋(37)に隣接して杯身(45)が正位で出土した。この45の下にはツマミ付きの蓋(44)が正位で現れる。口縁を欠いた杯蓋(38)は奥壁と床面の礫の間にはまり、口縁を奥壁に向けた横位で出土している。鎌(74)は杯蓋(37)の直下で出土する。

出土状況から復元すると、奥壁沿いに高杯を中心に据え杯類をその左右に配置していたものと推定される。杯は蓋が8点、身4点と数が合致しないうえ、蓋は逆位を向くものが多い。特に杯身(45)の下で出土したツマミ付きの蓋など組み合わせが不明なものもあり、その場で使用したというよりも、使用後に片付けた状況を示すものと考えられる。

**玄室北東部(図26b、図版15・34)** 床面の礫がまばらな部分である。装飾品類(耳環2点、玉類10点(84～94・⑩))はこの範囲でのみ出土する。

耳環(84・85)は20cmほどしか離れておらず、対と考えて良からう。この耳環より奥壁側で、勾玉2点・切子玉・藁玉・管玉2点・小玉2点の計8点が集中する。その逆位では、管玉(89)が耳環(84)に隣接し、さらに南側に20cmほど離れて藁玉(92)、コハク製の玉(⑩)が出土している。

須恵器も2点出土している。杯蓋(39)は奥壁沿いのものと接合した。礫に挟まれるように口縁を横にしており、移動してきたものかと思われる。刻み目状圧痕をもつ42は玉類の下で破片となって出土し、ほぼ完全に接合可能であった。攪乱は認められず、他の須恵器がほとんど破損していない状況を見ると、須恵器を破砕する行為があった可能性もあろうが何ら確証を得ていない。

さて、耳環の位置から埋葬位置を推定すると、頭位方向は奥壁(北)側、8点の集中部付近は頭部もしくは頭部より上の位置に該当する。木棺が腐朽する際に移動した首飾りはもちろん頭飾りの可能性もあるが、破片で出土した杯蓋(42)から想像をたくましくすれば、棺上に須恵器杯を器にして供献されていた可能性も挙げられよう。

なお、この範囲の南側で白色を呈し海面状組織をもつ物質が検出された(図版34-3)。骨かとも思われたが、風化が著しく土とほぼ同化しておりサンプル採取に留めざるを得なかった。同定はできていない。  
**玄室右袖部(図25、図版14)** 須恵器杯蓋1点と杯身4点、台付長頸壺2点、土師器高杯・長頸壺、鉄斧が礫床直上で集中して出土している。密な礫床上で南北70cm×東西40cmの範囲を礫が方形に区画するかのようであった。須恵器長頸壺(61)は脚部が打ち欠かれており、口縁を奥壁に向けて横転している。その下では杯身(56)が正位で出土した。台付長頸壺(60)はこの範囲内北東隅に大半の破片が集中し、完全に復元できる。脚部の出土位置からこの北東隅にあったものであろう。

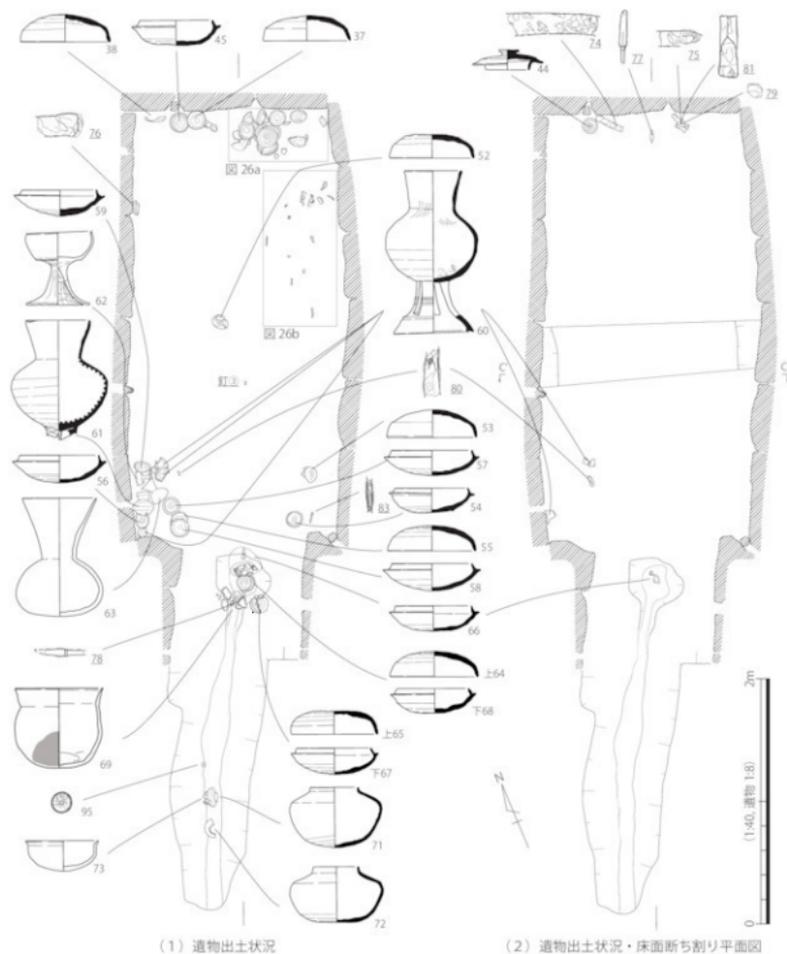


図 25 3号墳遺物出土状況・床面断ち割り平面図

須恵器杯は59が土師器高杯(62)の下に重なって正位で出土しているほかは、55～58が南側にある。唯一の杯蓋(55)は、杯身(54)の下でややずれるようにして出土する。55は逆位、56は横位、57は正位、58は逆位で出土している。土師器高杯(62)は杯部を西側壁に向けて横位で出土した。土師器長頸壺(63)も北に口縁部を向けて横転している。

鉄斧(80)は刃部を北に向けている。礎の間に落ち込んだような状況であった。  
 その他玄室内(図25) そのほか西側壁沿いでは鉄鎌もしくは鉞の基部(76)が単独で出土し、玄室(3)に

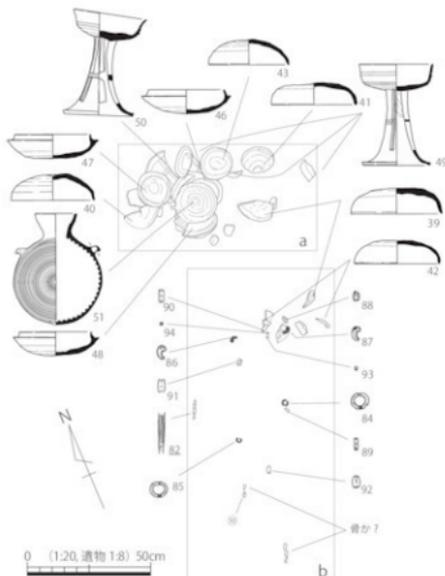


図 26 3号墳遺物出土状況拡大図

中央では、須恵器杯蓋(52)が正位にある。左袖部には杯蓋(53)と杯身(54)が正位で出土する。

玄門付近(図25、図版14-1・2)羨道部の窪みでは、床面直上で須恵器杯蓋2点(64・65)、杯身3点(66～68)、土師器甕1点(69)、鉄製刀子(78)が出土した。杯のうち64と68、65と67は正位で組み合っており、つぶれた状態で出土した66や69も完形に接合した。ほぼ原位置を保っていると考えると良からう。鉄製刀子(78)は玄室の礎床から続く礎上にあり、切先を奥壁に向けている。これらの遺物は玄室内とは異なって組み合っており、位置から考えても閉塞の直前にこの場で使用され置かれたものと思定される。

墓道埋土(図24・25、図版13)墓道を埋める⑬層の直上、⑯層中で須恵器長頸壺(70)と短頸壺(71・72)、土師器鉢(73)

が出土した。70は20cm前後の礎に混じって出土し、口縁を開口方向に向けていた。その下位で短頸壺2点が石室中軸上に並んでおり、床面からわずかに離れる。うち横位で出土した71は、底部に土師器(73)が重なるように破片で張り付いていた。そのやや玄室寄り、床面からわずかに浮いた状態で石製紡錘車(95)が出土している。閉塞土中、完形で出土したこれらの遺物は、石室の閉塞行為に伴うものと考えられる。

**木棺と被葬者の位置** 鉄製の釘が出土しており、埋葬施設としては木棺が想定できる。出土した3点はいずれも長軸を石室中軸と同じくし、中軸やや東側壁寄り(82、③)と東側壁沿い(83)の位置にあった。上述した耳環の出土位置も考慮すると、木棺は玄室東側壁沿いにあり、頭位は奥壁の北東方向にあったと想定できる。

#### v) 出土遺物

石室床面で出土した遺物はほぼすべてを図化した。土器は出土位置によって図を分け、図27：玄室奥壁付近、図28：その他玄室内、図29：右袖部、図30：玄門付近、図31：墓道埋土の遺物である。図32の鉄製品は腐食や錆跡が著しい。図33には装身具類や石製紡錘車を示した。

**土器(図27～31、図版25・30～34)** 37～43は須恵器杯蓋。いずれも天井と口縁の境目ならかに続く。37～40の口縁は緩やかに外方にのび、端部は丸い。37・38は焼成あまく灰色～浅黄色を呈する。一方で41は焼き締まり、断面は赤色がかっている。口縁部外面の一部は被熱したかのように黒変、一部赤変している。42の口縁端部外面には、幅2～3mmの間に右上がりの刻み目状王痕が残る。43は口径13.0cmと小型。天井は丸く、口縁端まで同じ弧を描く。44は中央に扁平なつまみのつく蓋で、天井部外面には焼成時に付着したと思われる粘土の細粒が多数見られる。45～48は杯身。いずれも立ち上がり短く内傾

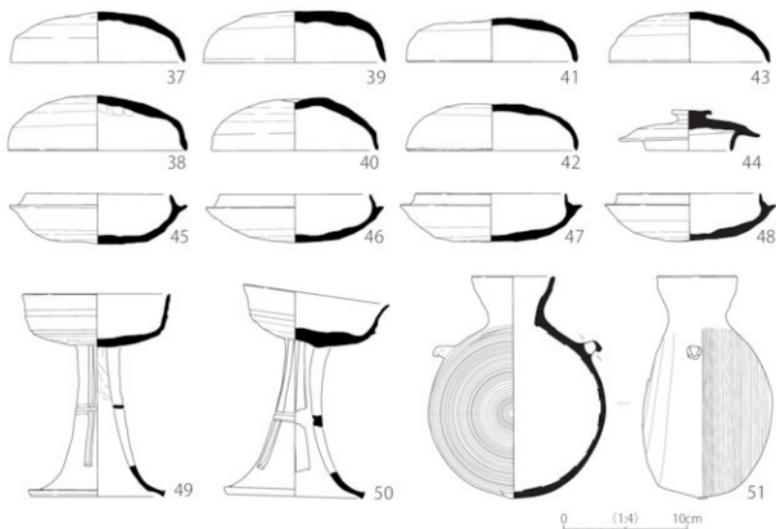


図27 3号墳出土遺物実測図(1)

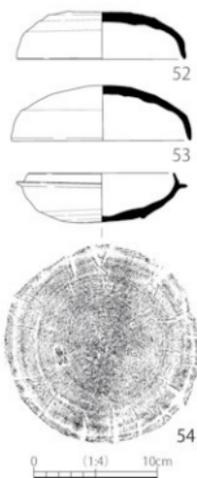


図28 3号墳  
出土遺物実測図(2)

するもので、45・46はやや内彎気味に、47・48は上方にのびる。47の外  
面の一部には自然釉附着。

49・50は無蓋高杯。49の口縁は外上方にのび、端部は丸い。杯部外面  
には中位に1条、底部との境にも1条の沈線が施される。細くのびる脚部は  
沈線2条に区画され、2段透かしが3方向に入る。50の口縁は底部から外  
反気味にひらく。体部には凸線がめぐる。脚部は49と同様だがやや歪む。  
いずれも外面に自然釉附着。51は提瓶。体部は片面にカキメ調整を行う。  
反対側の面は回転ヘラケズリ調整で、一部に別個体の粘土が付着する。底  
部にも粘土の痕跡が認められる。側面の把手は鍵手状でごく短い。自然釉  
が口縁内面と肩部に附着する。

52・53は杯蓋。52は焼成良好で断面の色調は赤身を帯びる。ケズリは天  
井部ほぼ全面と広い範囲に及ぶ。53は焼成不良で灰白～淡黄色を呈する。  
器面摩耗してケズリの単位不明。54は杯身。立ち上がりは内彎気味に短く  
のびる。底部外面にはヘラ記号「|」。

55は杯蓋。焼成不良で灰白色を呈する。56～59は杯身。いずれも立ち  
上がりは短く内傾するものであるが、58・59は特に短く、なかでも59は  
口径12.0cmで底部の張りも小さい。56～58は焼成不良で灰白色もしくは

灰黄色を呈する。60・61は台付長頸壺。60の頸部は長く斜め上方にのび、口縁端部はやや肥厚して丸い。  
頸接合部には回転ナデに消されているが、斜め上りの工具ナデが観察できる。脚部中位にはごく浅い  
2条の稜と脚裾部を区切る明瞭な1条の稜がめぐり、3方向の方形透かし孔が穿たれる。61は口縁端部の



図29 3号墳出土遺物実測図(3)

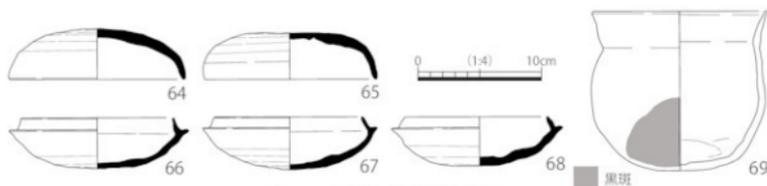


図30 3号墳出土遺物実測図(4)

一部と、脚部を欠く。破断面が摩耗しており、周囲から接合片が出土しなかったことから打ち欠きもしくは転用と判断した。60と比較して口縁が内湾し、肩部が張る。脚部の透かしは3方向。外面半面に自然軸附着。

62は土師器高杯。杯部は深く、口縁は内湾し端部はやや外反気味に丸くおさめる。杯底部と脚部との接合部には1条の稜がめぐる。内外面ともに横ナデ調整だが、この稜から脚基部にかけては未調整で爪痕がめぐる。脚部を右手で持ち接合部を左手で押さえて整形したものと思われる。また脚部内面に残る顕著なユビオサエの痕や、波打つような裾端部から、脚部は手づくね成形であろう。63は土師器長頸壺。胴部は体部下半に最大径をもち、細くすばまった基部から大きくラッパ状に広がる口縁はわずかに内湾する。内外面ともに摩耗のため調整不明。

64・65は須恵器杯蓋。64は天井部と口縁部との境が凹線状にくぼむが、これは回転ケズリによって凹みが強調されたものと思われる。65は外面のほま4分の3とケズリの範囲が広い。66～68は杯身。66の立ち上がりは外反気味に斜め上方にのびる。外面一部はやや赤みを帯びる。67は受け部と立ち上がりの境上面に細い筋がめぐる。68は胎土に2～3mmまでの長石が目立つ。

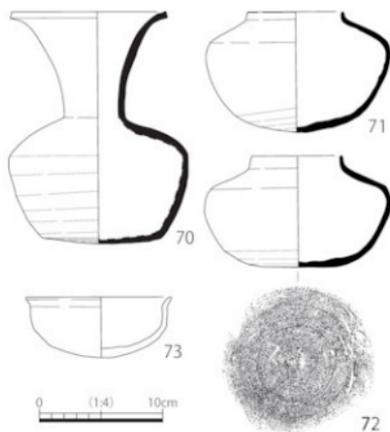


図31 3号墳出土遺物実測図(5)

69は土師器甕。底部は丸みを帯びるが平坦で安定する。口縁端部は丸く、内面がわずかにこぼむ。体部には黒斑が観察できる。内外面摩耗して調整不明。

70は須恵器長頸壺。底部はやや丸みを帯びるが平坦である。屈曲は明瞭で、肩部に最大頸がある。細い基部から伸びる口縁は外反して口縁端部で外傾する面を成す。底部に高台が付く前段階のものであろうか。

71・72は短頸壺。71は胎土精選。72より丸みを帯びる。72は底部にヘラ記号「|」。いずれも外面に自然釉付着。

73は土師器鉢。深く丸い体部がわずかにすぼまって頸部を成し、短い口縁が開く。内外面とも器面剥離して不明瞭だがナデ調整であろう。

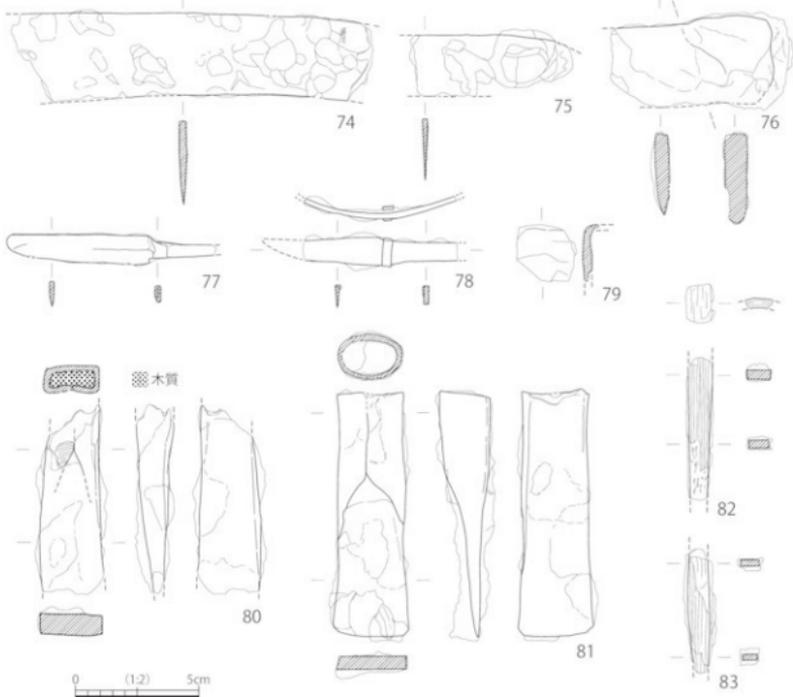


図32 3号墳出土遺物実測図(6)

**鉄製品** (図 32、図版 25 - 2・35) 74 は基部と先端部を欠くため器種不明だが大型の**曲刃鎌**か。刃部はわずかに内反りとなる。残存長 14.7 cm、刃部幅 3.5 cm、厚さは背部で 0.3 cm、刃部では 0.1 cm とごく薄い。75 も**曲刃鎌**か。刃部先端付近に当たると思われる。残存長 6.6 cm、刃部幅 2.5 cm、背部厚 0.2 cm。76 は**鎌**もしくは**鉈**の基部か。図中右の基部に想定される部分には刃がなく、刃背部の厚さ 0.5 cm に対して 0.9 cm と分厚いことから折り返し部分と考えられる。表面の厚みの残存を折り返し部と考え、刃部に対して鈍角となる(図中破線)。残存長 7.3 cm、刃部幅 3.4 cm。74・75 と比較してかなり厚い。

77・78 は**刀子**。77 は両開で、背部の間は鈍角である。刃部の基部付近にのみ鑑らしき稜が見られる。茎の基部はわずかに盛り上がり、合口の残存の可能性もある。刃部先端は丸みを帯びるが欠損は見られない。砥ぎ減りか。残存長 8.4 cm、刃部長 5.8 cm、刃部幅 0.6 ~ 1.3 cm。78 は先端と茎を欠失する。開部には厚さ 0.35 cm 程度の合口が残る。背部にわずかに開が見られる片開で、土圧のためか全体が大きく曲がる。残存長 6.25 cm、刃部幅 0.8 ~ 1.1 cm。

79 は**不明鉄製品**。0.4 cm 前後の板状の鉄がほぼ直角に曲がっている。75 や 81 と固まって出土しており、これらから剥落した破片の可能性もある。

80・81 は**鉄斧**。いずれも肩部をもたない小型の有袋鉄斧である。80 の袋部の断面は長方形を呈し、内面に木質が付着している。木柄を装着していたものであろう。合わせ目は不明瞭。刃部を欠失し、残存長 7.7 cm、刃部は図化部で幅 2.5 cm、厚さは 0.85 cm。81 は完形。袋部の断面形は楕円形を呈し、内部には錆や木質が残る。合わせ目は X 線写真によって確認した。刃部はわずかながらも非対称に減っており、使用の痕跡かとも考えられる。全長 10.3 cm、断面を図化した部分で刃部幅 2.75 cm、厚さ 0.5 cm を測る。

82・83 は**鉄釘**。頭部と先端部を欠失する。いずれも断面長方形で全体に縦方向の木目をもつ木質が付着しており、82 の上部にその剝離片を図示した。82 は残存長 5.8 cm、最大幅 0.9 cm、厚み 0.4 cm。83 は残存長 5.0 cm、最大幅 0.6 cm、厚み 0.25 cm を測る。

**耳環** (図 33、図版 25・35) 2 点とも中空でやや横長ながらもほぼ正円の平面形態を呈する。表面は暗褐色を呈し、剥落部分には点々と緑青が見られる。ごくわずかに金が観察でき、鍍金あるいは金箔が施されていたのであろう。環端部は平滑に成形されている。84 は外径 2.6 ~ 2.99 cm、断面径 0.5 cm、85 は外径 2.55 ~ 2.8 cm、断面径 0.4 cm。法量の一致と出土状況から一対をなすものと考えられる。

**勾玉** 86・87 の 2 点が出土している。淡橙色～橙色の縞状の石材でメノウ製であろう。86 は頭部が丸く仕上げられる。長さ 2.3 cm、幅 1.5 cm、厚み 0.7 cm、断面形は扁平な円形。主な穿孔は片側からでむかえ孔を穿つ。孔径 0.2 cm。表面が点々と白くなっており研磨があまい。87 は頭部や尾部がやや角ばり、断面形も扁平な長方形に近い。長さ 2.35 cm、幅 1.45 cm、厚さ 0.8 cm、片側穿孔で孔径 0.2 cm。

**切子玉** 88 は上部を欠失する。無色半透明で水晶製であろう。断面六角形を呈し、長さ 1.6 cm、最大径 1.1 cm を測る。主な穿孔は片側からだが、下面側からも約 0.1 cm 程度の浅いむかえ孔が穿たれる。孔径は上面 0.3 cm 下面 0.2 cm。

**管玉** 2 点出土する。89 は青みがかった黒色を呈する。表面に光沢はなくまるで被熱したかのように細かい発泡が見られ、端部もシャープさに欠けて丸みを帯びる。長さ 2.0 cm、径 0.5 cm。穿孔は両面から行われており X 線写真では内部に段差が確認できる。孔径 0.15 ~ 0.25 cm 程度。90 は暗オリーブ色を呈し、表面は平滑に磨かれ光沢がある。中央が黒味がかっており、碧玉類似岩製としておく。長さ 2.0 cm、径 0.8 cm。穿孔は片側からで孔径は 0.3 ~ 0.1 cm。

**薬玉** 3 点あるが、うちコハク製と思われる 1 点(⊙)は破損して図化できなかった。91 と同様の形態の

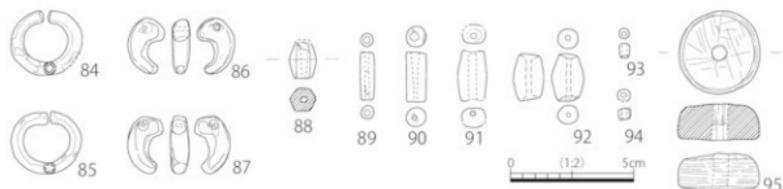


図33 3号墳出土遺物実測図(7)

ものであろう。91は中懸れの内筒形を呈し、断面は扁平である。長さ2.1cm、最大径0.7cm×1.2cm。コハク製と見られ、表面は風化して光沢のない褐色を呈するが、破損した断面からは光沢のある赤褐色の色調がのぞいている。穿孔は両面から孔径0.3cm。92は表面風化して光沢なく、くすんだ緑灰色であるが、内部はより濃い色調を呈するようである。緑色凝灰岩に見えるが不明。長さ2.0cm、最大径1.45cm×1.2cmで断面形状は楕円形となる。穿孔は両面からで上下面ともにすり鉢状に凹んでいる。

**小玉** 2点出土している。上下が平坦面をなす形態。93はスカイブルー系、94はネイビーブルー系の色調を呈しておりガラス製であろう。93の直径0.4cm、孔径0.2cm、長さ0.6cmを測る。94は直径・長さとも0.5cm、孔径0.2cm。側面の一部を欠失する。

**石製紡錘車** 95は完形品で、断面が半球形状をなし、中央に径0.7cmの円孔が上下から穿たれている。側面には横方向の細い筋が顕著に刻まれており、あまり研磨されていないようである。上下面にも不定方向の擦痕が見られるがわずかである。上面径3.0cm、下面径3.4cm、高さ1.5cm。石材は均質ではなく淡い灰緑色～灰色が混じるもので、白い紋理が入り込んでいる。滑石製であろう。

**遺物の時期** 主に須恵器蓋杯の様相から述べる。杯蓋には37や38のように天井部と口縁部との境がやや凹んで古い要素をもつものもあるが、玄門部や墓道で出土したものには新しい要素が認められる。右袖部で出土した杯身(50)は小型で浅く、玄門部で出土する杯身は68のように比較的立ち上がり低い。特に長頸壺(70)のようにTK217型式に続くような器種も出土している。全体としてはTK43型式からTK309型式の古い段階と考えられる。

ここで出土状況を確認してみたい。石室の閉塞を考えると、どの程度の時間差があったかほとんどかく玄室内の遺物より玄門部の64～69、墓道の70～73は確実に新しい時期に使用されたものである。

杯蓋・杯身の点数は石室内では同数となるが、出土位置で見ると一致しない。奥壁部では須恵器の下に鉄製工具有り、台付長頸壺と組み合わせるようツマミ付の蓋(44)が杯身の下方から出土している。さらに蓋杯がセットで出土せず、蓋が逆位を向いて出土する点など、使用時の状況というより片付けの痕跡と捉えることができよう。しかし、これが追葬を示すかどうかについては、耳環や玉類の集中や鉄釘の分布によって一体のみの埋葬を示す点が留意される。鉄釘は腐朽した可能性もあるが、他の位置からまったく出土しておらず、木棺以外の埋葬施設も想定しづらいため一体のみの埋葬としておきたい。

なお、玄門部において蓋と身が重なって正位で出土した64・68と65・67はセットで出土している。玄室内とは異なり、閉塞時に使用した状況を示していると考える。

#### vi) 上層の中世土器

3号墳石室内の埋土上層①～⑧層で出土した遺物群である。須恵器3片、土師器254片、瓦質土器182片、その他1点の計440点が出土しており、包含層より格段に出土量が多い。そのうち器形に分かる個体をできるだけ抽出して図化を行った(図34、図版36)。なお瓦質土器碗は、図化した3点に加えて4個体以

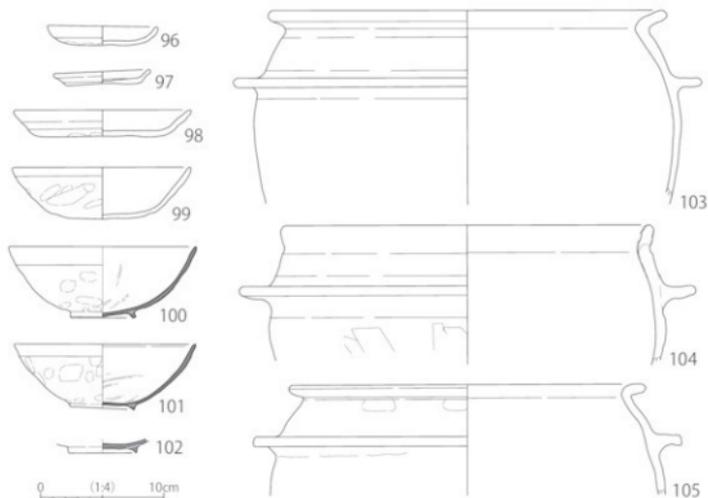


図34 3号墳出土遺物実測図(8)

上を底部片から数えることができる。

96は完形品で土師器皿。上層の礫に混じて出土した。口径8.8cm、器高1.6cm。口縁部は横ナデ調整し、わずかに段が生じている。灰白色を呈し胎土精選。97は墓道の上層で出土している。平底の皿で、口径7.7cm、器高1.2cmを測る。強い横ナデによって底部内面に圏線が生じ、口縁は外反して立ち上がる。底部内外面は非調整。褐色。98は玄室南半、上層の礫が落ち込んだ部分で出土した。口径14.2cm、器高2.2cm。口縁部は二段ナデによって屈曲しつつ外反し、端部は丸い。橙褐色。99は玄室北半の灰色粘土層(⑤層)から出土した椀。口径14.25cm、器高4.2cm。器面摩耗して判別しづらいが、口縁端部の横ナデ以外は指頭圧痕が目立つ。ほぼ完形で橙褐色。

100～102は玄室南半で出土した瓦質土器椀。器面摩耗して調整不明瞭だが、内面にはわずかに暗文が観察される。器高は高く、100は復元口径15.1cm、器高5.8cm、101では復元口径14.6cm、器高5.3cm。

103～105は土師器羽釜。いずれも体部は内彎し、口縁が「く」の字状に屈曲する形態のもの。103は復元口径31.6cm。全体が被熱して赤変する。104は復元口径29.4cm。頭部の屈曲は弱い。105は復元口径28.4cm。

**遺物の時期** 瓦質土器椀は器高が高く、外面にはヘラミガキを施していないものである。図化していない瓦質土器椀の高台は断面方形を呈するものであり、和泉型Ⅲ-1段階に位置付けられよう。土師器についても矛盾するものではなく、12世紀後葉の一群としておきたい。

## ⑤ 石塚4号墳

### i) 検出の経緯

**概要(図35)** 4号墳は1区の北西隅に位置する円墳で、谷に向けて南西に開口する横穴式石室と周溝の一部を検出したものである。調査時は「北古墳」「北石室」などと仮称していた。削平を受けて石室上部と開口部は消失している。西に向かって徐々に低くなる地形に位置し、検出面のレベルはT.P.+121.0～

121.5mで石室南東部が最も高い。

**検出状況** 包含層を掘削している途中、調査区北西隅で50cm程度の大形の角礫が2石並んで頭を出し、その周囲で一回り小さい礫が集積していた。3号墳と併行して精査を進めた結果、礫が「L」字状に並んで検出された。これを横穴式石室の側壁壁体と判断して掘削を進めた結果、角礫は石室内部に落ち込んだ石材で、「L」字状に並ぶ礫が石室の奥壁と北西側壁と考えられた。南東部の側壁は上部の石材が落ち込んでいたために同一レベルで検出できなかったのである。

古墳の開口部は調査区外、西方の崖にのびていた。壁体が崩壊する危険性や調査期間等から当初の範囲を調査した後に、急崖部分へ拡張することとなった。拡張の結果、削平はされているが玄室の続きと羨道・墓道を検出することができたのである。

**石室埋土の状況(図37・38)** 石室内には黒褐色埋土(㊟層)が石材とともに埋積していた。層厚は1mもあり、しまりのない無遺物層である。造成のために一気に埋められたものと思われる。これらを除去したT.P.+10.3m以下は壁体であったらう石材が集中し、さらに石材間には灰黄褐色粘土(㊟㊟層)が一面に堆積していた。石室壁体が崩れ、周辺から流れ込む粘土によって石材の間と床面が覆われていったと考えられる。なおこの粘土を掘削している途中から、須恵器の頭が見え始めており、粘土層の下で礎床とその直上の遺物を検出した。

#### ii) 墳丘と周溝

**周溝の形状と墳丘形態(図35・37、図版16)** 削平を受けているが、周溝約3分の1周と墳丘の高まりが

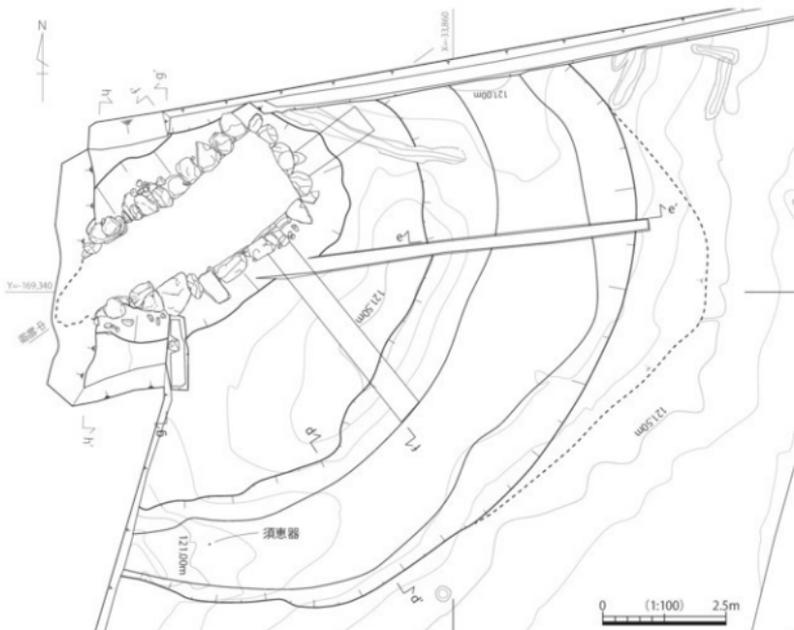


図35 4号墳平面図

残存していた。周溝は西へと緩やかに低くなる地形を区切り、調査区北壁からほぼ正円に近い弧を描いて西壁へと至る。周溝幅は広いところでは4m程度を測るが、削平の影響で西壁では約1.5mと狭い。東側の周溝外周は埋土掘削時に誤って掘り過ぎてしまったが(図35破線)、①層検出時のラインで示した通り、墳丘形態は円墳である。

周溝に囲まれた墳丘部分は、石室南東部で最高値T.P.+121.5mを測り、T.P.+121.0m付近で石室石材を検出している。すべて基盤層上面での検出で盛土は確認できなかった。

**周溝の断面形と堆積土(図8・35・37)** 埋土が明確な部分(d-d')と墳丘検出時に設定した断り割りに連続する部分(e-e')にベルトを設定して観察した。断面形はごく浅い弧状で、最大でも10cm程度しか埋土は残っていないが、埋土やその直上では比較的須恵器片の出土が多かった。周溝底のレベルは南東部がT.P.+121.2m前後と高く、北・西の両方向に向かってT.P.+121.0mまで低くなる。

**3号墳との境界(図7)** 墳丘南側では、4号墳が狭く浅い周溝で区切られた後は、ほぼ平坦に3号墳の石室に至る。上部がかなり削平され、試掘でも地山直上に中世の包含層が堆積するのみであったため、周溝の共有関係は確認できない。もし4号墳の周溝が共有されているとすれば、3号墳は石室中軸方向に長い形態となる。ただし、両者の石室床面レベルに90cm程度の高さがあることを考慮すると墳丘にも高低差があったと考えられ、3・4号墳間には明確な周溝を伴わなかった可能性もあろう。

**墳丘の規模(図35)** 石室中軸とそれに直交して玄室中央を通る点を墳丘の中心と仮定して復元すると、直径8～12mと復元値に幅がある。そこで2・3号墳の石室の規模を参考にすると、玄室と羨道・墓道部の比率はおよそ1:1かやや後者が長く復元され、4号墳では最小でも直径約10mの円形に復元できよう。なお、検出した墳丘端をみると墳丘の中心は羨道方向にずれる可能性もある。周溝を含めると直径約16.5mとなる。

**周溝出土土器** ①層中、地山直上からは須恵器杯・甕等49片、土師器9片、瓦質土器1片、不明鉄片1点が出土している。いずれも破片で集中部も見られなかったが、須恵器甕(132)は周溝のe-e'ベルト部分から出土しており、図化していないが同一個体であろう底部も検出している。周溝は2号墳、3号墳よりも高い位置にあり、石室開口部も離れていることから、4号墳の墳丘もしくは周溝で使用されたものと考えられよう。

### iii) 埋葬施設の構造

**石室構造と規模(図35・36、図版17・18)** 平面では片袖式に見えるが、右袖から続く羨道部がわずかではあるが中軸寄りに配置されていることと、左袖部と同様の大形の袖石を用いていることを考慮して、両袖式の横穴式石室とする。主軸は南から54.6°(54°38'49.2")西に振り、南西の谷部へ開口する。削平によって天井石と壁体上部、墓道の一部が失われているが、残存高1.5mと1区のうちで最も壁体の残存状況は良く、天井石近くまで残っているものと推測される。床面での石室残存長は5.55mを測る。

石室構造は奥壁3石、立柱的な袖石、礎石、短い羨道に続く墓道と他2墳と共通した特徴をもつ。

**玄室(図36、図版17・18)** 玄室平面形は石室中軸方向に長方形を呈し、北西寄りに羨道が取り付く。基底石は奥壁3石、北西側壁で4石、南東側壁5石で構成される。玄室長は中軸上、袖石を結んだラインまでで3.4mを測る。玄室幅は奥壁沿いで1.79m、奥壁から1.5m部分で1.86m、袖石沿いで1.83mと測定値ではわずかに胴部が広くなるが、ほぼ直線となる。石室上部は削平されているが、奥壁や北西側壁では四～五段、高さ1.5m程度まで壁体が残る。石材は、特に基底石や奥壁には他2墳より大型、長軸90cm前後の石材が目立つ。ただし主には50cm前後の中型の石材を用いており、20～30cmの小型のもの、隙間



图36 4号填石室平面·立面图

を充填する 10cm 程度の石材も見られる。

側壁は玄門側でやや内側にせり出して積まれる傾向にあり、南東側壁では 20cm 近く内側に入っている。**北西側壁** 四～五段の石積みが残る、基底部には 4 石が配置される。基底部と奥壁沿いには比較的大きい石材を、その間に中・小型の石材を配置している。使用石材の大きさや形状は様々で、小型石材を用いて高さを調整している様子が観察される。

石材の重なりや目地の通りから見ると、一段目は袖石側から奥壁へ向かって配石している。その後、奥壁を二段目まで積み、側壁へ戻って奥壁沿い二段目の石材を配置している。これら袖石、基底石、奥壁沿いの大型石材によって形成された「V」字状の隙間は、中～小型石材によって埋められる。凸凹はあるが T.P.+120.8m 付近で水平面が認められ、作業単位と推測される。その上段、四段目でも 50cm 程度の中型石材の高さに合わせて T.P.+121.3m 前後で目地が通る傾向にある。

以上のように、大型の石材によって玄室長を決定した後、中・小型石材で高さを調整しながら水平面を形成しつつ壁体を構築している。

**南東側壁** 袖石沿いで四段、他は壁体が崩れて一～二段しか残存していない。基底部は 5 石で構成され、うち 2 石は 90cm 程度の大型石材を据えている。中型で方形の石材を主に用い、水平面をそらせる傾向があり、北西側壁より整然とした印象を受ける。また袖石と接する部分には、幅 20cm 程度の小型石材をやや斜めに配置し、基底石の隙間を充填しているようである。

構築順としては一段目を袖石側から配置していき、奥壁を三段目 T.P.+121.1m 付近まで築いた後、側壁に戻っている。北西側壁ほど顕著ではないが、大型石材に囲まれた空間を中・小型石材で埋めていく手法は同様である。高さの基準は明確ではないが、壁体の残る T.P.+120.7m 付近に作業単位があるように思われる。

**奥壁** 三～四段の石積みが残る、基底部には 3 石が配置される。基底石は大型で、中央が最も大きく、幅 50～60cm、高さ 60～80cm を測る。

構築については、明確な基準高はなくあくまで石材に合わせているようである。基底石の端面はいずれも側壁に接していることから、側壁よりも後置されたことが指摘できる。さらに南東の基底石はわずかに斜めに配置されているため、西から東に据えられた可能性が指摘できる。二段目以降は側壁よりも先置される。北側ではその基底石の高さに、南側では中央基底石の高さに合わせるように次段を据え、段数に差が生じている。その二～三段目の上面 T.P.+121.1m 付近ではおよそ目地が揃う。なお、石材間には 10cm 程度のごく小型の石材が充填されている。壁面はほぼ垂直である。

**奥壁と側壁の関係** 基底部では奥壁の端面が側壁に接するが、二段目以降は逆となっている。

**袖部 (図版 17)** 二～三段の石積みが残る。玄門両側に配置される立柱状の袖石は石室全体を特徴付けている。袖石は幅約 0.6m、高さ約 1.0m を測る大型の石材で、北西側の袖石は羨道側に向く面を割って成形している。二段目以降は、側壁と同様中・小型石材が用いられるようである。

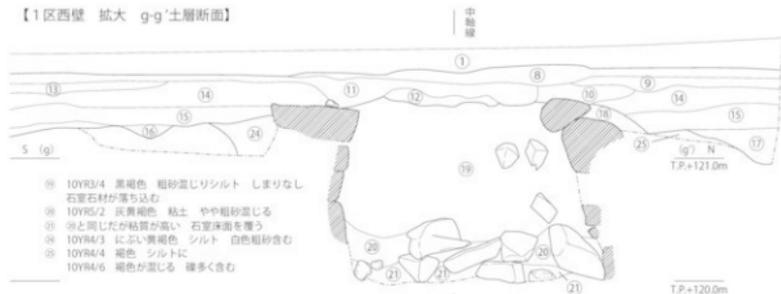
南東の袖石は玄室側壁のラインから約 50cm 中軸寄りに配置される一方、北西側では 10cm 程度と配置に片寄りがある。上述したように両袖式と考えており、特に玄室内からの外観はその印象が強い (図版 17-2)。

**袖石と側壁の関係** 側壁石材の端面はいずれも袖石に接しており、袖石が先置される。

**羨道・墓道** 短い羨道に素掘りの墓道が続くものである。基底部に縦長の石材を配置し、二段目以降は 20～30cm 程度の不定形な石材を積む。壁体下の掘り方は斜め上方に向かうラインを描く。



【1区西壁 拡大 g-g'土層断面】



- ⑩ 10YR3/4 黒褐色 粗砂混じりシルト しまりなし  
石室石材が落ち込む
- ⑪ 10YR5/2 淡黄褐色 粘土 やや粗砂混じる
- ⑫ ⑩と同じだが粘質が高い 石室床面を覆う
- ⑬ 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 白色粗砂含む
- ⑭ 10YR4/4 褐色 シルトに
- ⑮ 10YR4/6 褐色が混じる 礫多く含む

【1区北西 4号墳開口部 h-h'土層断面】



- 〔掘り方塚土〕
- ① 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 白色粗砂～小礫多く含む
  - ② ①に準じたブロック含む
  - ③ ②より白色礫を多く含む
  - ④ ③より白色礫を多く含む

〔地山〕

- ⑤ 10YR3/3 暗褐色 シルト 粗砂礫がに含まれる
- ⑥ 10YR5/4 にぶい黄褐色 シルト 白色粗砂含む
- ⑦ 10YR3/3 暗褐色 シルト 粗砂礫がに含まれる
- ⑧ 10YR4/4 褐色に10YR4/6 褐色 シルト混じる 5cm前後の円礫を多く含む
- ⑨ ⑧より10YR4/4 の割合が多く混じる
- ⑩ 10YR6/8 明黄褐色 1～20cmの礫を多く含む
- ⑪ 10YR6/6 明黄褐色 シルト～粗砂に10～20cmの礫を多く含む 粘性なし

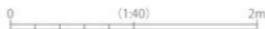


図38 4号墳石室・墳丘土層断面図(2)

平である。

床面の礫は、主に15cm前後の自然石を用いている。面は揃わず、かなり疎らに敷かれて所々で地山が露出しており、3基のうちで最も粗雑に見える。奥壁沿いの遺物集中部では20cm程度とやや大きめの礫が多く、周辺より5～10cm程度高い部分もある。使われる石材は墳丘検出時に見られる地山に包含されるものと材質や大きさが類似しているため、周囲の礫を利用したものと考えられる。

露出した地山面は礫床部よりも5～10cm程度低く、礫間には黄灰褐色粘土(図37-③層)が堆積していた。遺物が礫床に接して、もしくは礫間の地山直上で出土することから、③層は張り床等ではなく流入土と考えられ、礫の上面を床面と考えることができる。

また玄室前面から墓道にかけて礫が敷かれていない部分は、攪乱の有無が問題となる。少なくとも土層から見ると、床面直上は礫床部分と同じく石材とともに③層が堆積しており、上層からの掘り込み等はない。後述するように埋葬位置が礫床上に想定できるため、棺の位置にのみ礫を敷いたことが考えられる。3号墳でも想定した排水の機能が礫床に付されているとすれば、棺の位置のみが礫床となることは合理的とも言える。

**墓墳と掘り方(図35～38、図版18)** 石室中軸とそれに直交するライン(f-f'), また周溝に設定したベルト部分(e-e')で墳丘を断ち割った(図35・37)。墓墳は地山を掘り込んで形成されている。検出面では壁体から60cm程度外側に掘り方のラインがめぐり、中軸直交ラインでは墓墳幅約3.5mを測る。墓墳は

上が広く、北西側壁ではT.P.+121.0m、南東側壁ではT.P.+120.8mで屈曲してほぼ垂直に近い角度で掘り込まれ、底面T.P.+119.4mへ緩やかに狭くなる。壁体との距離は底面近くでも約30cmと広く、f-f'断面で墓壇底は3m弱の幅となる。ただし奥壁や石室内、羨道部では壁体に沿うように掘り込まれている。

墓壇埋土はオリーブ褐色や黄褐色系の粘質の強いシルトを用いており、地山由来のブロック土や粗砂が混じる。奥壁、側壁側ともブロック土や粗砂の混じり具合によって3層に分層しているが、土質は大きく異なるものではない。墓壇の掘削土を用いて壁体を構築していったものであろう。埋土上面は図37-⑥層以外は水平に積まれ、ほぼ壁体の境目に当たっている。壁体の構築とほぼ平行して作業が行われたと考えられる。

なお、石室床面は斯ち割りを行っていないが、壁体直下に露出した地山面には石を据える掘り方は観察できず、墓壇底面は平坦に掘削されたのみであったのだろう。

**石室の構築過程** 石室の構築は、1) 墓壇の掘削、2) 床面排水溝の掘削、3) 壁体の構築、4) 礎床の形成、の順で行われていると考えられる。墓壇は玄室部分で長軸4m短軸3.5mの程度の間丸長方形で、2m以上の羨道・墓道部分を取り付く。深さは1.3m以上で、T.P.+120m前後の平坦な床面から壁面は急角度に立ち上がり徐々に開くものである。床面には壁体を据える掘り方はない。中軸方向にのびる排水溝は墓道と一体化しており、ほぼ同時に形成されたものであろう。

石室壁体の構築は、石材の面と端面の接し方から見て、両側壁の基底石の配置が先である。側壁の袖石を最初に据え、一段目の石材を奥壁方向へと積んでいった様子が見受けられる。側壁一段目を据えた後に、奥壁の一・二段目を構築し、側壁二段目を積んでいる。大きく見ると、大型の石材で石室の規模を決め、中へ小型の石材を充填するように壁体を構築していると言えよう。

礎床の形成は、その他の構築要素との前後関係を示す根拠はないものの、最終的に床面を整える手順が最も合理的であると考えられる。

羨道の壁体は掘り方に沿って石を積んでおり、袖石との前後関係は確定できないものの、墓壇掘削時点での形状や規模は確定している。掘り方の隙間には10cm程度の小礫が充填されていることを考慮して、後置されたと考えておきたい。

#### iv) 埋葬主体の構造と位置

棺台と推定される石材と木材を検出しており、前者を棺台1、後者を棺台2とした。両者はその位置が重複しており、追葬の可能性を示唆するものである。後述するように鉄釘は棺台2に伴うと考えられるため、棺台1に伴う埋葬の後、棺台2が設置され追葬が行われたのであろう。

**棺台1(図36、図版17-1)** 玄室のほぼ中央には、図36で網フセで示した特徴的な礫が三列並ぶ。やや大きめの30cm大の礫を短軸方向に2〜3並べ、礫上面は周囲の礎床より5cm程度高いT.P.+120.1m付近に揃う。その位置と高さから棺台としての機能が推定でき、「棺台1」としておく。礫の範囲は長軸方向で1.8m、幅0.7m程度を測る。

**棺台2(図36・39、図版19)** 棺台1から南にずれた側壁沿いで、木材2点(145・146)が出土している。木材は細い自然木を割った程度とほぼ加工されていない丸太材で、端部を南東側壁に揃え、間をあけて並列する。145の端部は中軸付近で南西にややずれるが、木材間の間隔は1.5〜1.7m、木材幅は約0.9mを測る。床面直上に置かれ、木材上面で約T.P.+120.0mを測る。その配置から同じく棺台として機能したものと考えられ、「棺台2」としておきたい。

なお、145の端部に接して、幅35cm高さ20cm厚さ4cmの板石が側壁に沿って立っていた。床面、側壁

に接しており偶然とは考え難い。棺が側壁沿いにくるとすれば、棺の位置等を調整や支えのために置かれた石とも考えられる。

**鉄釘による構造の推定 (図 39・44)** 棺台 2 の範囲に鉄釘が 5 点出土しており、その上に据えられた釘付式箱形木棺の存在が想定できる。図 44-135 ~ 139 は床面直上で、140 は須恵器 (109) の上で出土した。出土位置は 138 が北西側壁方向にずれるが、おおよそ棺台 2 の幅にあって、その内側に先端を向けると言える。具体的には、奥壁中央で出土した 135 は羨道方向に、140 は南東の側壁方向に向ける。側壁沿いに出土する 139・136 は先端を玄室内側に向け、140 と相対する。138 は奥壁方向に先端を向ける。

木質は 135 ~ 137 は横方向 (A 類)、138 ~ 140 は頭部側で横方向、その下で縦方向に残存する (B 類)。棺材の長辺方向と木目の方向が一致するとすれば、A 類は底 (蓋) 板と側板、B 類は側板と小口板を結合するものと推測でき、小口板を側板では挟みこむ形状を呈すると考えられる。さらに 139 と 140 がほぼ同じライン上で出土したことを原位置性が高いと評価すると、その位置を小口に充てることのできる。138 以外に逆側の小口板を推定する釘の出土はないが、棺台 2 を基準にほぼ対照の位置を考えておきたい。

また B 類の横方向の木目は、138 で 5.5 cm、139 で 3.5 cm、140 で横 2.5 cm 残存することから、側板もしくは小口板の厚さは 4 cm 前後と考えられる。鉄釘の長さは A 類では 13.5 cm 以上、B 類では 13 cm 以上を測り、A 類に比べて B 類の頭部は丸みを持つ傾向がある。

釘間の長さは 139 と 140 で約 0.7 m、軸がややずれるが 135 と 138 で 2.3 m を測り、おおよその木棺の大きさを示すものであろう。

**埋葬位置と大きさの推定** 棺材や木棺痕跡は検出できなかったため、鉄釘や棺台から棺台 2 に伴う木棺の位置や大きさを推定してみたい。釘付式箱形木棺は、南東側壁に沿って小口を奥壁から 50 cm 程度離し、遺物集中部を避けて据えられていたと考えられる。丸太材を割った辺材 2 点を棺台として短軸方向にわたし、その上に底板を据えていたようである。長軸は石室と平行し、その規模は長軸 2.3 m 前後、短軸 0.7 ~ 0.9 m と推定される。

頭位方向は不明である。ただし玉類が棺台 2 に伴うものであれば、奥壁側 (北東) に頭位を考えるとできよう。

#### v) 遺物出土状況

3 号墳と同じく、石室上部の削平による転落石や埋土の流入が確認されているものの、床面直上が粘土で覆われ、遺物が礎石に接して出土した状況から、原位置に近い状況で検出されたものとする。

遺物の取り上げは、床面を覆う粘土を除去し床面を確定した後に記録作業を行い、石室北西隅から順に行った。取り上げ番号は表 2 に○囲みで示している。

図 39・図版 19 に遺物出土状況を示した。石室内で出土したのは、須恵器 26 点 (杯蓋 8 点、つまみ付蓋 2 点、杯身 9 点、高杯 3 点、台付壺 3 点、直口壺 1 点)、鉄製品 8 点 (鎌 1 点、斧 1 点、釘 5 点)、玉類 4 点 (勾玉 1 点、管玉 2 点、小玉 1 点) の他、棺台 2 として報告した木材 2 点である。

出土の傾向としては、遺物は奥壁沿い北東寄り (図 39a) の 1.5 m × 0.5 m の範囲に集中し、玄室中央付近に須恵器 5 点や鉄釘が点在する。玉類は、北寄りの位置 (図 39b) でのみ出土した。玄室入り口側、床石のない約 3 分の 1 からは鉄釘 (138) 以外は遺物の出土を見なかった。

なお木材と釘については、埋葬位置と大きく関わるため iv) で詳述した。

**玄室奥壁付近** 奥壁集中部には須恵器杯蓋 7 点 (106 ~ 112)、つまみ付の蓋 1 点 (113)、杯身 7 点 (117 ~ 120)、高杯 3 点 (121 ~ 123)、台付壺 3 点 (124 ~ 126)、鉄鎌 (133)、鉄斧 (134) が出土している。

脚付の器種(122～125)は南東隅に偏って出土する。側壁に接して出土した台付長頸壺(125)は脚部と頸部を破損するが、体部はほぼ正位で出土する。すぐ北西に接する高杯(121・123)も、破損はするが口縁を上に向け、その場でつぶれたような状態である。脚部が床の礎間にあるため、流入土による移動を免れたものかと思われる。台付長頸壺(124)は口縁を玄室中央に向けて横位に倒れ、脚台端部の破片が口縁部付近に流れていた。高杯(122)は奥壁の隙間にはまるように正位で出土しており、124と並立していたのであろう。それらの前方には杯蓋(110)が、口縁を上に向けて出土している。

やや間隔を空けて、刻み目のある杯蓋(109)が口縁を上にして出土した。その上には鉄製の鎌(133)と釘(135)が重なっている。133は刃先を玄門側に、刃部を北に向ける。

それ以外の蓋杯13点(106～108, 111～120)は、5カ所に分かれて2～3点ずつ重なって出土する。a群：ツマミ付きの蓋(113)と杯身(117)は、きっちりと組み合っておりほぼ正位で出土した。奥壁に底部を付けやや斜めに傾く。

蓋と身がセットにならず口縁を上に向けて重なるのは、b群：杯身(118・114)と杯蓋(108)3点、c群：杯身(116・115)2点、d群：杯身(119・120)と杯蓋(106)3点、e群：杯蓋(111・112・107)3点、である。記述順に上から重なる。d群はやや左右にずれ、e群は上2点が口縁を奥壁側に向けた横位になるが、ほぼ完全に接合できることからその組み合わせや出土位置に大きなずれはないものと考えられる。

さらに、これらの杯類の北端には台付短頸壺(126)が北方向に倒れていた。完形品で、脚端部はd群にほぼ接し、口縁部は礎の間に落ち込み斜め下を向いていた。

またその北、奥壁沿いに鉄製斧(134)が刃部を北西側壁に向けて出土している。

**玄室中央部** 須恵器杯蓋2点(127・130)と杯身2点(128・129)、壺1点(131)が点在し、玉類4点(141～144)は129のすぐ北で集中して出土した。

杯身(129)は完形、正位で出土する。そのすぐ北側では、管玉(142・143)、小玉(144)、勾玉(141)がほぼ一列に並んでいる(図39b)が、異なる礎上にあるため高低差がある。管玉(142)は最も高い位置にあり、ほぼ平坦な礎上で孔を横にして出土した。その礎と低い位置で接する礎との境で、管玉(143)が落ち込むように端面を下に向けていた。小玉(144)は同じ礎の直上であって、孔を石室長軸方向に向けて出土しており、142～144は連なるような位置関係にある。勾玉(141)は、その北西の礎との境で背面をやや下方に向けて落ちこんでいた。

杯身(128)はほぼ半分破損し、ずれて出土した。半分が口縁を下に向けた状態で、もう半分が口縁を上に向けており、破断面は90度ずれる。前者は床石にはまり込むように出土しており、後者から流れたのではと思わせる。杯蓋(127)も北西側壁沿いで破損し離れて出土している。約3分の2の破片が口縁を側壁方向に傾けて出土し、その南側で残りの破片が出土している。中央寄りであったものが側壁方向にずれて壁体と接触し、その衝撃で破損したのではないかと推測される。

木材(棺台2)間では、ツマミ付の杯蓋(130)が正位で、床石の隙間から出土している。わずかではあるが、床石の下に端部が潜り込んでおり、流入土による移動が考えられる。その南では、直口壺(131)がやや東に傾きつつも口縁を上に向けて出土している。

北西側壁で出土した127は省くとしても、これらは推測される埋葬位置と重複しており、木棺内もしくは木棺上に配置されたと捉えることができよう。

**周溝** 周溝埋土や周辺の包含層では須恵器、土師器等が破片で出土しているが、原位置を保っているものはない。須恵器はほとんどが蓋杯の破片であるが、132の壺の他、小型の壺もしくは盥と思われる体部片、

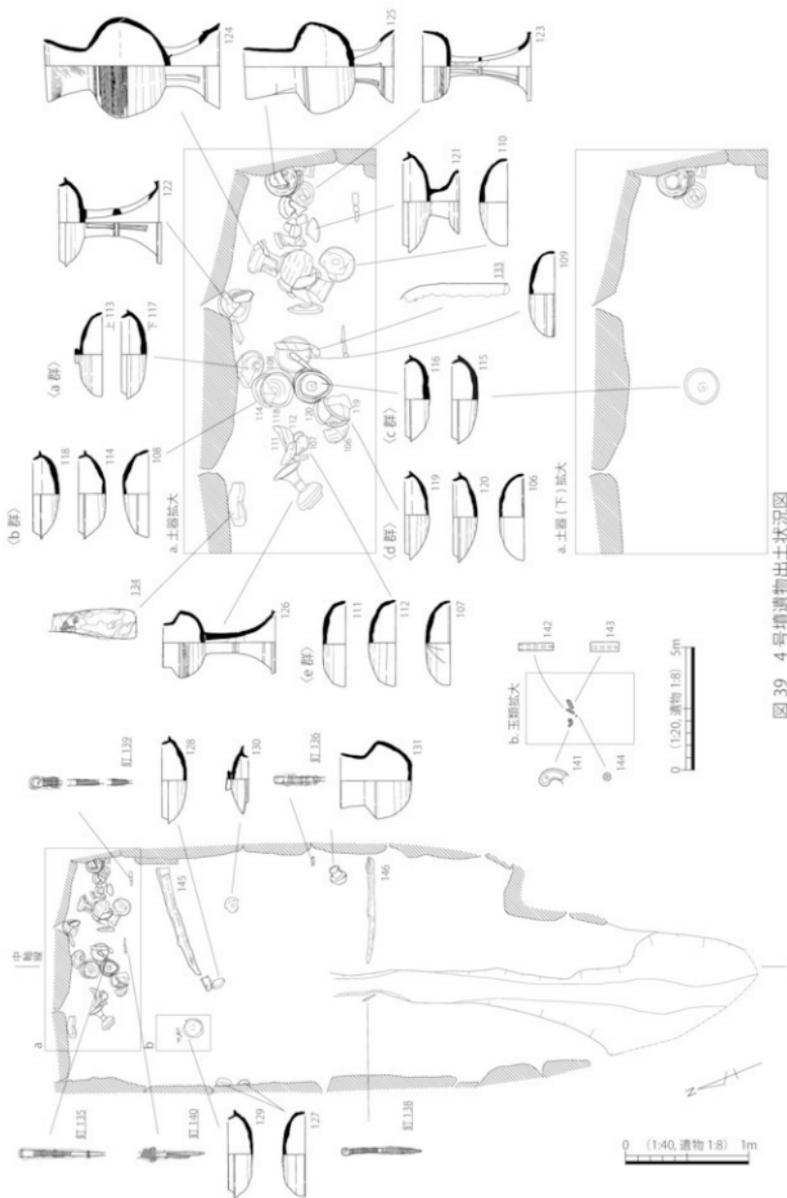


图 39 4号墳遺物出土状況図

3方向に透かしの施された脚の基部、脚裾端部などがある。2～4号墳の石室開口部はいずれも離れており、墳丘・周溝とも4号墳が最も高い位置にある。よって、周溝やその付近の包含層で出土しているものは石室内から流出したのではなく、4号墳の墳丘で用いられたものとして良いだろう。

#### vi) 出土遺物

石室内から出土したものはすべて図化し、周溝出土遺物は132のみ図化した。図40・41には奥壁集中部出土品、図42には石室内出土土器のほか132を掲載した。図43は鉄製品、図44は鉄釘、図45は玉頸、図46は棺台2の木材を示した。

須恵器（図40～42、図版24-2・37～40） 106～112は須恵器杯蓋。106は口縁端部が内傾する浅い凹面をなす。天井部外面にはヘラ記号「|」が施され、焼成後に再度線をなぞっている。107の口縁端部は、内側に丸くなることによって沈線状に線が入る。外面に施されるヘラ記号「八」は、上部が交差する。

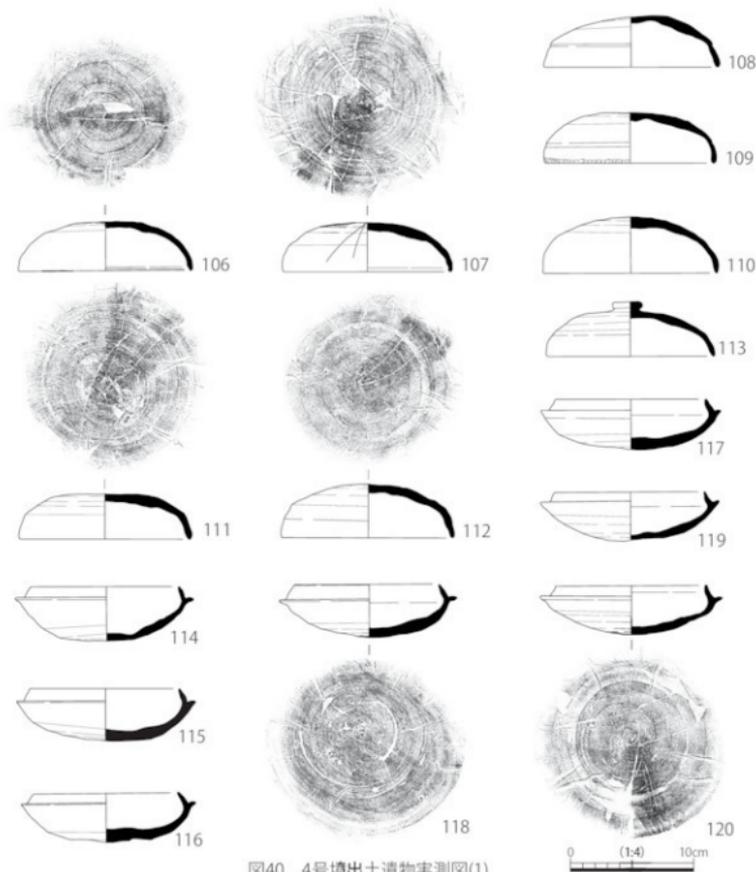


図40 4号墳出土遺物実測図(1)



図41 4号墳出土遺物実測図(2)

108の天井部と口縁部との間にはにぶい稜を認め、口縁は外方へのびて端部は丸い。焼成不良。109には天井部と口縁部の間に沈線を施すことによってにぶい稜が形成されている。口縁端部外面には、3～5mmの幅で刻み目状の圧痕がごく浅く認められる。縄や布等の陰影かと思われる。なお、器面には上に載っていた鉄製品の鉄分が付着している。110の口縁端部にも一部刻み目状圧痕と思われる痕跡を認めるが、ナデ消されている。天井と口縁の境や口縁端部の段の痕跡はまったく認められない。111は天井と口縁部の間に浅い凹線状のくぼみがめぐる。外面にはヘラ記号「八」。112にもヘラ記号「八」。天井部と口縁部の境で角度を変える。

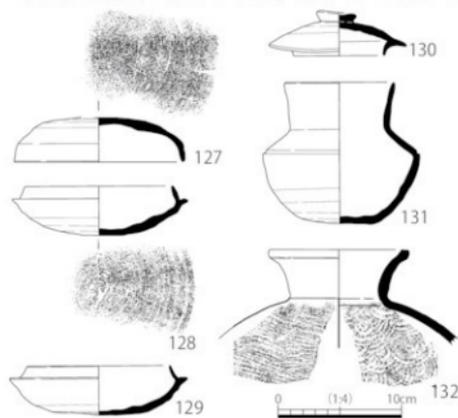


図42 4号墳出土遺物実測図(3)

113はツمامミ付の蓋で、有蓋高杯である121や122とセットになるものか。天井部と口縁部との境で角度を変え凹線状となる部分もあるが、明瞭な境は認められない。口縁部内面の一部には鉄分が帯状に付着する。

114～120は杯身。いずれも立ち上がりは短く内傾し、口縁端部や受け部は丸い。114～116・118のように口縁が内彎気味なものと117・119・120のように外彎気味に立ち上がるものがある。底部は114～118が深く丸いのに対して、119・120の底部は横に張らず、丸みが弱い。



図43 4号墳出土遺物実測図(4)

しを3方向に施す。脚端部は上下に肥厚し稜を認める。胎土は約1cmの礫が混ざるなどやや不良。123は無蓋高杯。口径11.6cm、脚部高13.0cm、器高17.5cm。杯部は2条の稜の間に斜線文をめぐらせる。3～4条の沈線が単位となっており、工具を用いて施文したものであろう。細い脚部の中位には沈線2条、透かしの下端にも沈線1条がめぐる。方形透かしは3方向で、その上下を分かち部分が欠損しているが破断面から二段透かしと考えられる。杯部内面と脚部外面に自然軸付着が顕著。胎土精選。

124・125は台付短頸壺。124の口縁はわずかに内彎して端部で内傾する緩やかな凹面をなす。頭部は右上がりのハケ調整後、横ナデ。体部上半はカキメ調整、下半は回転ヘラケズリが施されるが、上半には痕跡的に右上がりの平行タタキが観察される。脚部は外反しながら下方にのび、2条の稜をもって屈曲し裾部へ至る。方形の透かしが3方向に穿たれる。胎土精選。口径9.75cm、胴部径16.4cm、器高28.5cmを測る。125の口縁部はほぼ直にのび、脚部は丸い。頭部の屈曲は明瞭で、沈線2条を施す肩部も張る。胴部下半は回転ヘラケズリ調整。脚部の方形透かしは3方向。裾部の屈曲は緩やかで沈線2条をもって稜となし、内彎気味に裾部へ至る。裾部内面には端部整形による沈線がめぐる。頭部にはヘラ記号「×」。外面は自然軸の付着が著しい。胎土精選だが5mm程度の長石が混じる。口径8.9～9.3cm、胴部最大径14.9cm、器高24.2cm。

126は台付短頸壺。屈曲が明瞭な肩部に沈線1条がめぐり、その下に列点文が施される。胴部下半は回転ケズリ調整。脚部は細く、中位に沈線2条、下方に1条。裾端部は上下に肥厚して面をなす。透かし

114の回転ケズリには30°前後の幅で回転を止めた痕跡が認められる。116は歪んで平面形が楕円形になる。外面にはヘラ記号「八」らしき痕跡が認められるが、回転ケズリによって消されている。117は内面に鉄分付着著しい。118は外面に上部が交差するヘラ記号「八」。焼き締まって断面赤色をなす。119は底部に自然軸付着。受け部には重ね焼きの粘土痕あり。120の外面にもヘラ記号「八」。線の一部は受け部端まで及ぶ。

121は低脚の有蓋高杯。口径は14cmと蓋杯より大型。器高9.1cmながらも基部径は4.2cmと背の高い他器種とほとんど変わらない。脚部は短く外方にのびた後、屈曲し内彎して裾部を形成する。脚端部は面をなして稜を認める。透かしは施されない。胎土精選。

122は有蓋高杯。杯部の形態も大きさも蓋杯と同様である。脚基部径はやや太めの4.5cmで、外反気味に外方にのびる。中位に沈線2条をめぐらしその上下に方形透かし

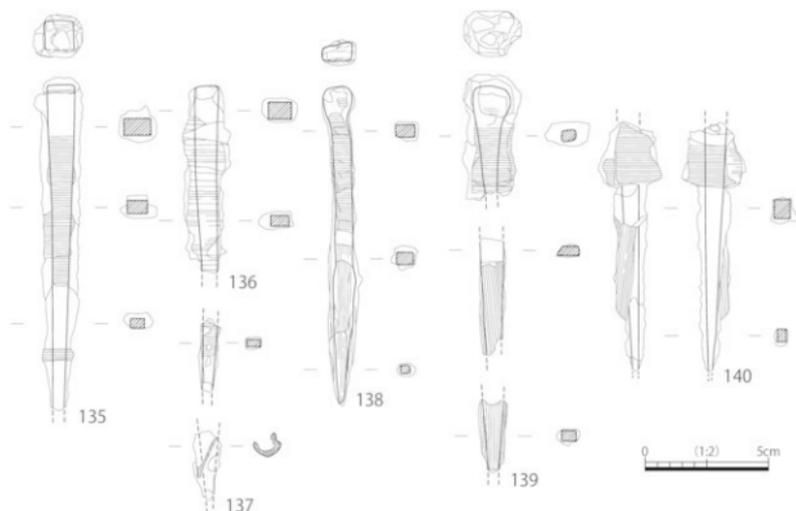


図44 4号墳出土遺物実測図(5)

はない。胎土精選で丁寧な作り。

127は**杯蓋**。天井部と口縁部の境で屈曲し、天井部側で凹みがめぐる。外面へラ記号「八」は上部が交差する。内面は褐灰色を呈する。128・129は**杯身**で立ち上がり短く内傾するもの。128の外面にはへラ記号「八」。内面は明褐色を呈する。129は内面全体に鉄分が付着する。130は**蓋蓋**。天井部に扁平なつまみを貼りつける。口径6.8～7.5cmとやや歪む。最大径11.1cm。どの個体とも離れた位置から出土したためセット関係は不明だが、胎土や色調は124とそっくりである。131は**直口壺**。屈曲の明らかな肩部に沈線1条を施している。底部は丸みを帯びるが平坦である。外面と底部内面には灰が融着し、自然軸付着。口径8.8cm、器高11.6cm。胎土には白色粗砂が目立つ。

132は**広口壺**もしくは**甕**。4号墳の東側で設定したベルト部分(e-e')で、底面から出土した。口縁は端部で屈曲して直立し上面で面をなす。体部外面には平行タタキ、内面には円弧タタキ。復元口径10.6cm。なお、同一個体と思われる丸底の底部が同じく周溝埋土から出土している。

**鉄製品**(図43・44、図版41) 133は内彎する刃部をもつ**曲刃鎌**と考えられる。残存長17.35cmで基部と切先を欠く。腐食著しく背部でも0.1～0.2cm弱とごく薄い。刃部はごく薄くなって欠失しているため残存する刃部幅2.15cmを大きく超えるものではなかろう。

134は**有袋鉄斧**。明瞭な肩部はもたないが、刃部へかけて緩やかに幅広になる。袋部は2.9cm×2.1cm程度の断面楕円形を呈し、内部には木質が残存する。破損部からは柄部の先端が覗く。合わせ目は観察できないため密着させていたと考えられる。残存長13.8cm、刃部は断面長方形で、幅4.5cm前後、厚さは袋部の2.1cmから徐々に薄くなり、断面を図化した部分では1.0cmを測る。

**鉄釘**は6点が出土している(図44)。いずれも断面長方形から

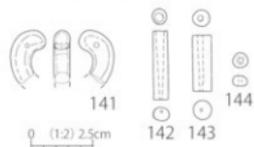


図45 4号墳出土遺物実測図(6)



図46 4号墳出土遺物実測図(7)

断面形はわずかに縦方向に長いがほぼ正円形。よく研磨されて面を残さず、3号墳出土品に比べて丁寧な作り。残存長2.15cm、径0.7cm×0.65cm程度。穿孔は片面だが、丁寧に施されほとんど両面の孔の大きさに差はない。孔径0.2～0.15cm。管玉は142・143の2点。いずれも暗緑色で良く磨かれ光沢をもつ。碧玉製であろう。ほぼ正円筒形を呈する。141は長さ2.8cm、径0.65～0.6cm。片面穿孔で孔径は0.3～0.1cm。142は長さ2.3cm、径0.8～0.75cmと太い。片面穿孔だが、X線写真によると下面側に段が生じている。下面は平滑でむかえ孔ではないため、穿孔時に位置を調整した痕跡かと考えられる。孔径0.2～0.1cm。小玉は144の1点が出土した。やや暗い緑色で光沢はない。ガラス製であろう。上下に平坦面をもち球状を呈する。長さ0.4cm、径0.65～0.6cm。孔径0.2～0.15cmを測る。

**丸太材** (図46、図版41-5) 棺台2とした木材である。節が残り、丸太材の表面を割っただけのものである。加工痕は観察できなかった。平らな面を上にして検出された。樹種不明だが木目は粗い。145は長さ95.6cm、最大で幅10.0cm、厚み3.6cm。146は長さ86.0cm、最大で幅6.0cm、厚み4.6cm。

**遺物の時期** 須恵器はTK43型式に位置付けられるものである。ただし106・107は口縁端部に凹面をもち、108・109は天井部と口縁部に段差を有するなど古い様相を呈する。新しい要素をもつものは見られず、3基のうちで最も古い須恵器をもつと言える。

なおこれらの古い様相をもつ須恵器は、その他の遺物と異なる位置で出土したのではなく、奥壁の遺物集中部でb・d・e群とした重ねられた杯の最下部や、鉄製品の下で検出されている。IV章で後述す

方形をなすもので頭部がわずかに折れる135・136と丸く膨れる138・139がある。表面に付着する木質や木目については既述した。135は先端を欠失する。残存長13.6cm、断面は頭部付近で1.1cm×0.7cmを測る。136も先端部を欠失する。残存長7.65cm、断面0.95cm×0.7cm。137は天井石の落ち込み直下から出土したもの。先端はソケット状になっており、鉄分が流出して固まったものか。この部分を除いて残存長3.0cm、断面0.55cm×0.4cm。138は全長13.0cm、断面は頭部付近で0.8cm×0.5cm。木目は頭部から横方向6.4cm、縦方向に6.6cmの長さで残る。139は3片に折れ先端を欠失する。3片を合わせた残存長は12.9cm、断面は0.8cm×0.45cmを測る。140は頭部と先端を欠失する。残存長10.2cm、断面は0.8cm×0.65cm。木目は頭部から横方向2.6cm、縦方向7.5cmを測る。

**玉類** (図45、図版41) 勾玉は141の1点が出土した。尾部を欠失する。石材は暗い淡橙色を呈し透明度は低いもので、メ

るように、埋葬の初期段階と捉えることも可能である。

## ⑥ 小結

石塚2～4号墳は、TK43～TK209型式期に密集して築造された12m前後の小円墳である。いずれも1区の南から西に入り込む小谷に向かって開口し、削平によって不明な点はあるものの、類似した規模や構造を有する。特に横穴式石室の構造においては、3枚の奥壁基底石、立柱状の袖石、礎床、短い羨道といった共通する特徴をもち、同一の指向をもつと言える。築造順については第IV章で詳述することとするが、須恵器の型式や古墳の配置から4号墳→2号墳→3号墳の順を想定できる。

良好に残る石室床面からは須恵器のほか、土師器、鉄製品、耳環、玉類、石製紡錘車が出土している。須恵器は2・4号墳がTK43型式、3号墳がTK43～TK209型式に比定される。遺物の出土状況は須恵器蓋杯が口縁部を上にして重ねられるなど、片付けたような状況を示すものであった。遺物の特徴としては、須恵器蓋杯にヘラ記号が多く、斧や鎌と言った農工具の出土や、多種にわたる玉類の出土が挙げられる。4号墳では棺台や鉄釘による埋葬位置の推定も可能であった。

## 第3節 古墳以外の調査の結果(1～3区)

### (1) 1区の遺構と遺物

概要(図7、図版20) 前節で示した古墳3基の他、ビット7基、耕作溝11本を調査した。検出面は古墳と同じ基盤層上面であるが、上層が削平された結果であり、埋土や出土遺物から中世の耕作に伴う遺構と考えられる。

#### i) ビット

SP1～7の7基を検出したが、建物等は構成しない(図7、図版20-1～3)。SP1～6は3号墳と4号墳の間に集中する。SP2～6は試掘3トレンチ調査時に検出したものである。SP5が直径12cm、他は直径20～30cmの円形もしくは不整形円形を呈する。深さはSP4～6は約5cmと浅く、SP1・2は約20cm、SP3は13cmを測る。単独で検出したSP7は2号墳の東に位置し、直径29cmの円形、深さ22cmを測る。埋土は直上に堆積する第II層と同様で、暗褐色シルトである。

遺物はSP7で瓦質土器の小片10点が出土しているが、実測に耐えなかった。

#### ii) 溝

SD8～18の11本の小溝を検出した(図7、図版20-4～6)。調査区北部に9本が分布し、2号墳の北東にSD17・18が並列する。いずれも幅20～30cm程度で、長軸方向は北北西かそれにはほぼ直交する西北西。切り合い関係によると後者が新しい。検出高は浅いものでは5cm弱とかなり削平が及んでいるが、SD17・18は10cm前後と比較的残りが良い。埋土はビットと同様、暗褐色シルトが堆積する。SD14やSD17・18のように完全に古墳を切るものもあり、古墳廃絶後の造成後に形成された耕作溝と考えられる。

遺物はSD18から須恵器2片、土師器10片、黒色土器2片、瓦質土器3片が出土している。うち148は黒色土器皿(図47、図版42-1)。復元口径12.7cm。口縁部は二段ナデ、端部はわずかに外反する。外面はにぶい黄褐色を呈し、内面黒変する。胎土に金雲母を多量に含む。11世紀末～12世紀初め頃の所産であろう。

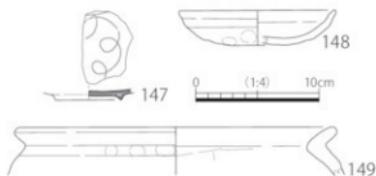


図47 1区包含層出土遺物実測図

### iii) 遺構に伴わない遺物

1区の包含層からは須恵器91片、土師器153片、瓦質土器119片のほか磁器や鉄釘等12片が出土している(図版42)。須恵器はほとんどが2号墳の検出時と4号墳のある調査区北半の包含層から出土しており、各古墳に由来するものと思われるため古墳の報告で述べた。

大半が実測に不適な小片であったが一部を図示した(図47)。なお、図版42には図化していない遺物も掲載している。147は瓦質土器椀の高台部。2号墳検出のため東側に拡張した際に出土した。復元高台径5.2cm。見込みみに連結輪状の暗文が見え、高台は断面三角形を呈する。尾上編年Ⅲ段階のものであろう。そのほか図化していないが、瓦質土器椀には口縁部内面に沈線を施し、密な暗文をもつ桶型と思われる破片や、退化した高台をもつものも確認している。149は土師器羽釜。くの字口縁をもち、内面は工具ナデ調整。復元口径25.2cm。

**遺物の時期** 須恵器を除くと中世前半期の遺物が出土している。主に瓦質土器椀から見ると12世紀後葉から13世紀前半のものを主体とするが、黒色土器がわずかに出土しており12世紀前後まで遡る可能性もある。

### iv) 小結

数基ではあるが、地山面で中世の耕作溝、ピットを検出した。Ⅱ層に見られる水平堆積の重なりによって耕作面を幾度も造成していたことが推測される。ごく少数ではあるが、石塚3号墳の上層や包含層中から出土した遺物はその時期を告げており、12世紀前後にその活動が始まり、12世紀後葉には古墳を削平した大規模な造成が始まったのではないかと考えられる。

## ② 2区の遺構と遺物

**概要(図48、図版20-7)** 2区は、石塚2~4号墳とは谷を挟んで南側に設けた425.8㎡の調査区である。石塚1号墳(試掘4-3トレンチ)の北~西側で一段下がる耕作面で、関連遺構や地形の検出を想定して調査した。調査前はほぼ平坦な面でT.P.+121.5m前後を測る(図版1)。

調査の結果、T.P.+112.3m前後の地山面を検出面として、2区の北側に大きく落ち込む河谷状の地形が広がっていた。その他には溝2本、ピット1基を検出したのみで遺物もごく少数であったが、現在に至るまでに大きな地形の変化があったことが判明した。

### i) 層序

第Ⅰ層:作土(①②)、第Ⅱ層:整地層(③)、第Ⅲ層:谷部上層(④⑤)、第Ⅳ層:谷部下層(⑥~⑩)から成る(図48)。

Ⅱ-③層はオリーブ褐色に灰オリーブ色が混じるシルトで層厚20cm弱を測る。薄く堆積するⅢ-④層は鉄分沈着が強い。Ⅲ-⑤層は暗オリーブ灰色の粘質シルトの均質な土層が最大60cm程度と厚く堆積する。稀に10cm程度の礫を含んでおり、上半には土器片も包含する。下層との層境には有機物が堆積する。

第Ⅳ層はSR1に堆積する⑥~⑩層とSR2に堆積する⑪~⑬層とがある。SR1の上層とSR2の層相は類似しており、ほぼ同時に埋まったものと思われる。いずれも上層はオリーブ黒~黒色の植物片を含む粘土(⑦⑩層)で、一時湿地のように水の淀む時期があったものと思われる。SR1中央では上層~粗粒化する粘質シルト(⑪層)の上に、粗砂と粘土のラミナが三度観察され(⑬層)緩やかな流れのある状況であったことが分かる。その両側は20cm程度までの礫を主体とする礫層(⑫層)が堆積している。地山に含まれる礫に良く似ており、地面から一気に流れ込んできたものであろう。良く似た礫はSR2最下層で、粗砂まじりの灰シルト(⑬層)の下に堆積していた。

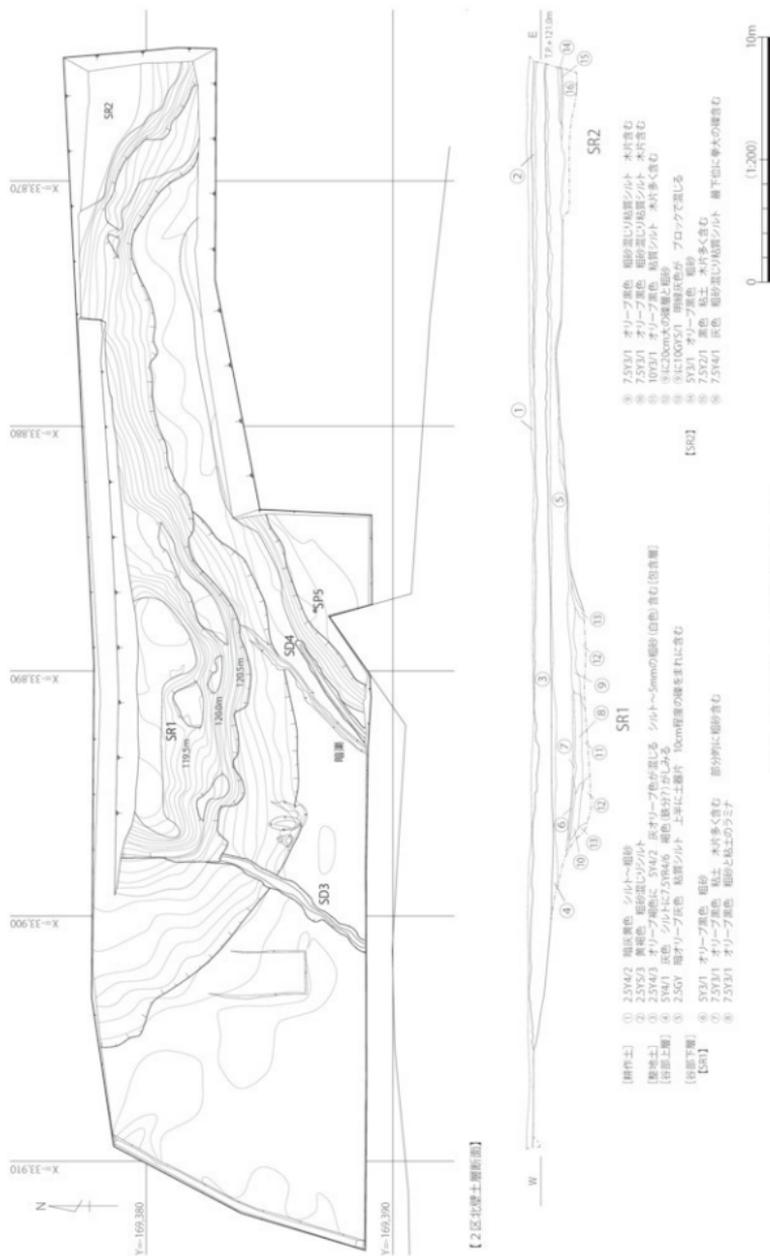


図48 2区遺構平面・北壁土層断面図



図 49-1 3区西遺構平面図

## ii) 河谷状地形

水平堆積する第Ⅰ・Ⅱ層を除去すると、基盤層上面で東～北壁沿いで不定形に広がる第Ⅲ層を検出した。東西約40mを測り、試掘4・7トレンチで検出した深い落ち込みの埋土と類似することから、かなりの深さが予想された。そこでⅢ-④層上面から北壁沿いに一段落を設けて掘削を進めた。

その結果X=33,875付近を境にして、北から分かれて入り込む谷状の地形が検出された。埋土は自然堆積の層相を示したため「河谷状地形」と称して西側をSR1、東側をSR2とした。

検出面からの深さは最も深いところでSR1は1.6m(T.P.+119.0m)、SR2は1.3m(T.P.+119.6m)を測る。2区北側に入り込む小谷につながるものであろう。

埋土は層序で既述した第Ⅲ層、第Ⅳ層にあたる。第Ⅳ層堆積時には水流があったことが指摘でき、それはSD3が刻むように周囲から流れ込む水によるものと推測される。その上層でSR1・2を厚く覆う第Ⅲ層にはこうした水流は想定できない。窪地に土が埋積していったものであろう。

遺物はⅢ-④層下位でまばらな暗文の見られる瓦質土器1片、Ⅳ-⑦層中で須恵器杯1片が出土したのみであった。周辺に関連する遺構は石塚1号墳のみであり、少なくとも古墳時代には谷が口を開けていたものと考えておきたい。

## iii) 溝・ピット

SD3 地山面上で南西からSR1の方向に向かって流れ込むような溝SD3を検出した。検出面で幅30～60cmと不定で、深さ20～30cmを測る。断面形は半円状から「U」字形を為す。暗灰黄色の粗砂泥じりシルトに混じって10cm前後の礫が充填されていることから、暗渠の機能が想定できる。SR1の壁面、少なくとも

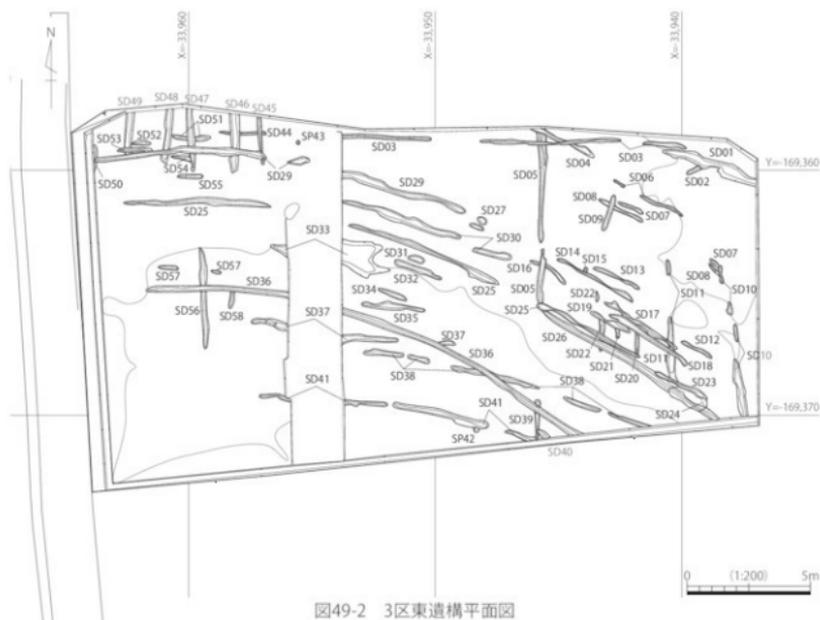


図49-2 3区東遺構平面図

も第Ⅲ層下部のレベルまで溝が刻まれており、この埋積時期までは機能していたと考えられる。埋土からは須恵器片1点が出土している。

**SD4** 南西-北東に中軸をもつ溝で、南東の一段高い耕作面に沿うように刻まれる。西で平行する溝には竹が入れ込んであり、現代の耕作に伴い、排水のために設けられたものと考えられる。

**SP5** 直径11.5cm、深さ4.0cmの円形ピットである。暗灰黄色の粗砂混じりシルトが堆積する。遺物は出土していない。

#### iv) 遺構に伴わない遺物

遺物はSR1・2で瓦質土器と須恵器各1片、SD3で須恵器1片が出土した他は、耕土や包含層から少量破片が出土したのみで、調査面積に比してごくわずかである。青磁1片、須恵器18片、瓦質土器7片、不明鉄片2片、炭化物1片とごくわずかであり、一部を図版に示した(図版42-3)。No.300は廃土、No.304は①層、No.305は西側③層からの出土である。なお須恵器については石塚1号墳と共に報告した。

#### v) 小結

2区では、北に続く河谷状地形SR1・2を検出した。時期についてはごくわずかな遺物に頼らざるを得ないが、古墳時代には谷の入り込む起伏のある地形であったとしておきたい。埋土上層の第Ⅲ層下位では瓦質土器が出土しており、中世には谷は埋まっていたのであろう。なお、他の調査区とは異なり耕作溝の検出はない。

調査区南東部の一段高い耕作面では石塚1号墳の墳丘検出を狙ったが、南壁土層断面で地山の高まりに可能性を指摘することとまった(図9)。ただし須恵器片が数点でも出土していることは、2区全体で

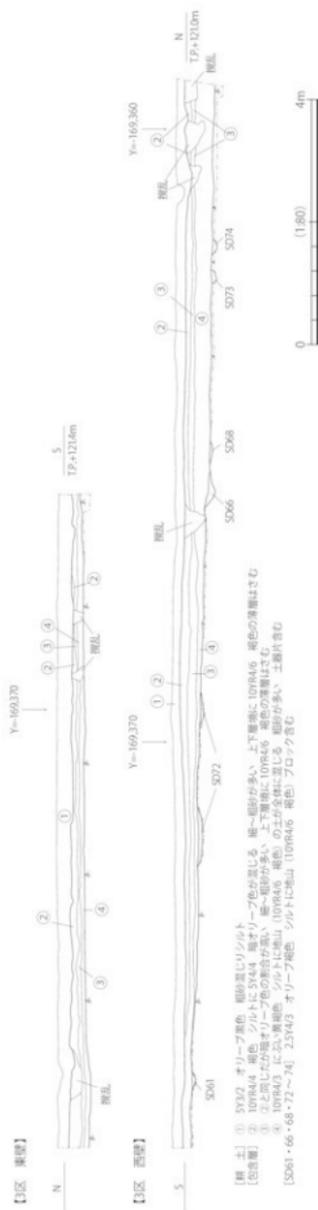


図50 3区東壁・西壁土層断面図

数点という出土遺物の少なさから言っても、1号墳の存在を裏付けられるものであると考える。

### ③ 3区の遺構と遺物

**概要(図49-1・2、図版21・22)** 3区は調査地の西側に位置し、調査前はT.P.+121.1～121.6m前後に広がる耕作面であった(図版1)。南北に走る農道と水路が耕作面を東西に区画しているが、いずれもほぼ同じ高さにあった。

調査面積は918.1㎡である。試掘9トレンチから耕作溝の広がりや関連遺構の存在が想定できており、耕作溝74本、ピット6基を検出した。検出面はT.P.+121.0～121.2mを測るほぼ平坦な基盤層上面で3区東半では北へ、西半では北西にわずかに低くなる。中世前半の遺物が少数出土している。

#### i) 層序

土層は3区の東西壁面を図化した(図50)。第1層:作土(①)、第2層:包含層・整地層(②～④)、第5層:基盤層から成る。遺構検出面は第5層上面、地山面である。

第1層は調査区ほぼ全面に水平に広がり、現代の耕作に伴う掘り込みや攪乱が見られる。第2～④層は、褐色シルトをベースとする土層で、暗オリーブのシルト土と混じった土である。上下の層境に褐色の薄層を挟んでおり、1区と同様、耕作面の更新に伴って成されたものと思われる。④層はにぶい黄褐色シルトに地山ブロックが含まれた土層である。②③層はほぼ水平な堆積だが、④層は東側では5～10cm程度、南西部で40cmほどと地山が低い場所ほど層厚を厚くし、上面を水平にする。上面で遺構検出はできなかったが、遺構検出面である地山面直上で、土器片が出土するものこの層であった。大きく耕作地を造成した時期に堆積したものであろう。なお、③④層は地山の高い3区南側ではほとんど堆積していなかった。

埋土は多少の差はあるが2.5Y4/3オリーブ褐色シルトもしくは2.5Y4/2暗灰色シルトであり、地山由来のブロック土や粗砂が混じるものもある。溝の方向による埋土の差は認められなかった。

#### ii) ビット

ビットはSP42・43、SP77～81の7基を検出した(図

49、図版22)。SP42・43以外はいずれも3区南西部に集中している。位置から建物等を構成するものではない。深さはSP42が28cm、SP43が11cmを測る他は10cm弱の浅いもので、埋土はSP42が暗褐色(10YR3/3)を呈し、SP43・77～81は溝と同様である。耕作に伴う杭等の痕跡であろうか。

### iii) 溝群

3区の東西で様相を異にするため、分けて記述する。東側ではSD01～SD58の58本を検出している。上面が削平され途切れて検出されたものが多いが、検出位置や土色等から、連続する遺構と判断できるものには可能な限り同一の遺構名を付している。

**東側** 溝はいずれも幅30～40cm、深さ5～10cm程度で断面U字形を呈する。埋土は2.5Y4/3オリーブ褐色もしくは2.5Y4/2暗灰黄色のシルトが堆積する。中軸方向から角度を違えて弧状に走るものと東西、南北に走るものの4類に区分でき、最も多いのは南東から北西方向に緩やかな弧を描くものである。そのなかでもSD29～31、SD36のように比較的角度が急なものと、SD38やSD41のように平行に近い緩やかなものがあり、切り合いから前者が後出する。角度を同じくする溝同士の間隔は最大で3.5～4.5mを測る。

東西方向に中軸をもつものはSD03、44、50～53がある。3区の北端に位置し検出数は最も少ない。弧状を呈する溝の一部であるかもしれないが、SD03とSD04のように切り合い関係があることから少なくとも時期は異なる。SD03は新しく、他は古い。

南北方向に中軸をもつ溝は、3区東側の北西部で6本の溝が互まご間隔で並び、東西方向のSD43、51、52、59を切る。弧状の溝は、SD05を除いて新しい。

切り合い関係によると大まかには南北方向、東西方向、緩やかな弧状、弧状といった変遷を辿っている。

**西側** 東側と連続する溝群は検出できず、遺構の空白地帯が東側に広がる。この部分は耕作土直下で大きく基盤層上面が検出されており、削平の影響が大きい。

溝はトレンチ西端で南北方向の溝を検出したほかは、南西から北東へ弧を描く溝群が平行する。東側とのびる方向の違いはあるが、規模は似通っている。東側で検出した溝と同様の性格ものであろう。

**溝群の性格** 形状から耕作溝として捉えておくが、弧状を呈する点が不可解である。道路状遺構とする意見もあったが、道路が整備されるような遺構は周囲でも検出されていないうえ、地形的にも続かない。周辺の地形に沿って耕作が行われた痕跡と捉えておきたい。

### iv) 出土遺物

出土遺物は1コンテナにも満たず、須恵器6片、土師器109片、瓦質土器102片、青磁1片、瓦2片、その他2片で、遺構から出土したのは瓦質土器や土師器の小片に限られる。青磁は3区東側、須恵器や瓦は西側で出土している。遺構出土の遺物を中心に図51、図版42に示した。図示できなかったが、須恵器は杯、同心円文タタキのある壺、沈線のある杯部や脚部(高杯・器か)等が出土している。瓦は内面に布目圧痕のある丸瓦である。

図51-150は**瓦質土器皿**。包含層から出土した。復元口径11.6cm、器高2.3cm、内面の暗文は渦巻き状のものであろう。半円状の丸皿で高台は完全に消失している。法量から尾上編年IV-3段階に位置付けられる。151はSD60出土の**土師器皿**。復元口径7.75cm、器高1.2cm、褐色を呈する。152は土師器皿。口径7.85cm、器高1.25cmで平底のもの。底部内面は強い横ナデによって圏線状に浅くくぼむ。底部内外面は不定方向のナデ。なお、152は今回調査区出土品ではない。地元の方がかつて採集したもので、調査区の東を走る府道21号線付近で出土したものであったらしい。調査中に寄贈を受けた。153はSD79出土

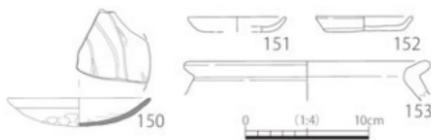


図51 3区ほか包含層出土遺物実測図

の土師器羽釜。復元口径は19cmだが、残存するのが口径の10分の1程度のため参考値としておく。

#### v) 小結

3区のほか全面で検出した溝群はゆるやかな弧状を描いて平行するものや南北にのびる

ものがあり、切り合い関係から少なくとも3時期に区分される。遺構は深さ数cmと非常に浅く、かなり削平を受けている。遺構を検出できなかった中央の空白部分にも、溝の存在は想定できよう。

これらの溝を耕作溝としたとき、その変遷はすなわち耕作地利用の変遷として捉えられる。検出が浅く切り合いが不明瞭な部分もあるが、東西・南北方向の溝を切って、方向を違った弧状の溝が幾条にも並行する。概括すれば正方位の土地利用から、地形に沿うような土地利用へと変化していると言うことができる。弧状の溝は検出数が格段に増えており、削平を考慮しなければ、この段階から耕作地としての利用が活発になったと考えられる。

ただし現在の水路や耕作地は主に南北方向に認められており、現在へ至るまでに再び南北方向へと土地利用の形態が変わったのであろう。

遺構から出土するのはわずかな瓦質土器や土師器の小片で、個別の遺構の時期は断定しづらい。包含層から出土した遺物を含めると、退化した高台をもつ瓦質土器碗の存在や土師器へそ皿の不在から3区の遺物は13世紀代を中心とするものと考えられ、1区よりやや時期が下る傾向がある。

なお遺構や出土遺物には古墳に関連するものは含まれていなかった。調査地の西側までは古墳群の範囲は広がらないものと考えられる。

#### 注

1 千早赤阪小学校の生徒が現場見学中に、廃土置き場から発見してくれた。調査担当者としては情けない限りであるが、この場を借りてお礼を申し上げます。

2 ①・②・③～⑤層は⑥層を細分した土層。

3 なお右袖部の⑤・⑧は組み合っているが逆位での出土であり、使用時の状態とは考え難い。

## 第IV章 調査成果のまとめ

### 第1節 芹生谷遺跡の調査成果

#### (1) 古墳時代

主たる成果は1区における石塚古墳群の発見である。少なくとも4基が近接して築かれ、11m前後の円墳で構成される。横穴式石室を主体部とし、床面から須恵器、土師器、鉄製農具、玉類など豊富な遺物が出土した。須恵器からTK43～TK309型式段階の築造と考えられる。1区の北側や3区では古墳の存在は認められなかったが、2区のすぐ南の農道法面に顔を出す「大石」によって、調査区の南にも古墳が続くことを予想させる(図52)。

試掘6-2トレンチや7-2トレンチ、2区のSR1・SR2でその一端を見たように、古墳時代後期は比高差2m以上の谷が入り込む起伏に富んだ地形であったと想定される(図52)。かつて古墳群は谷を抱く低丘陵の上に立地していたのである。これはおそらく調査地周辺にとどまるものではない。現在は平坦な耕作地が広がる河南台地であるが、耕地の造成前は小規模な谷が入り込む地形が広がっていたことを示唆する成果となった。江戸時代に造られた多くの溜池は、かつての地形の痕跡を物語っており、今後の台地上の調査においても考慮すべき事項である。

#### (2) 中世

古墳が築かれた後しばらく人の営みは見られないが、中世に入ると耕作地として利用され始めたようである。内黒の黒色土器の小片が数点出土しており、おそらく12世紀前後からわずかながら芹生谷遺跡周辺で人が活動し出したのであろう。

石塚3号墳では石室の上部が破壊された跡に、石材とともに瓦質土器や土師器の一群が見つかった。出土した瓦質土器碗は12世紀後葉に比定され、この時期をもって平坦面を造成する大規模な整地が開始されたと考えられる。古墳時代に口を開いていた河谷も土砂が流入して浅くなっていたと考えられ、徐々に埋没もしくは造成時に埋めて現在の地形へ近づいていったのであろう。試掘4-1トレンチで検出した礎石状遺構でも、上面から瓦質土器碗片が出土しており、その性格は不明ながらもこうした耕作地に関連して営まれたものであることが推測される。

さて芹生谷遺跡の位置する河南台地には、現在でも条里地割が広範に確認できる。ただし第1章で述べたように、遺跡周辺では等高線に沿った区画も同時に認められ、3区で検出した弧状の溝群はこうした地形に沿った土地利用の痕跡と考えられる。東西南北の溝が刻まれたのは、この前段階に想定される。検出数の少なから、開発の開始期には正方位の土地利用があったと考えておきたい。文献から指摘される条里施行や荘園との関連については、今後の課題としておきたい。

出土遺物は少なくとも13世紀代までは確認でき、中世前半に活発な耕作地の造成と利用が繰り返されていたと考えられる。既往の調査成果によれば、それ以降も耕作地としての利用が認められるが、遺物が13～14世紀に限定されることから、居住地と耕作地の分離が行われたと指摘する(大阪府教委2012)。中世前半に開始された土地への働きかけは、谷を埋める大規模な平坦地の造成を伴いつつ、現代の集落景観を徐々に形成していったのであろう。

### 第2節 石塚古墳群の特徴

石塚古墳群の特徴とその位置付けについてまとめ、詳細が不明な1号墳を除いて一部基礎的な分析を

行っておきたい。表1には一覧を示す。

### (1) 墳丘と石室

**墳丘の形状と規模** 墳丘規模は直径10～12mに復元される。3号墳は2号墳との境界で直線的な墳端ラインをもつが、明瞭なコーナーを呈するものではなくいずれも円墳としておく。周溝は部分的な検出にとどまったが、2・3号墳で共有すること、周溝底のレベルは水平ではなく谷部方向へと低くなることが指摘できる。特徴的なものとして3号墳の墳端の一部に、石列を検出している。第三章で詳述したように墓石とは考え難く、いわゆる外護列石とするにも小規模で部分的であるが、墳丘を保護するものであったと考えておきたい。なお、高安古墳群中には、服部川支群D-2グループ12号墳や、C-4グループ42号墳、C-2グループ132号墳、大窪・山畑29号墳など、墳丘盛土中に列石が認められる事例が存在する(一瀬2012)。これは巨石石室の構築に至る墳丘構築技法と考えられており、盛土の有無が不明かつ巨石を用いない石塚古墳群では詳しく検討することはできないが、類例として挙げておきたい。

**埋葬主体の種類・石室形式** すべて両袖式の横穴式石室である。2号墳は墓道からの推定、4号墳は平面形では右袖部の突出が弱いが、袖石の配置を重視し両袖式と考える。

**石室の特徴** 2～4号墳の横穴式石室には次の共通点が指摘できる。1)3枚で構成される奥壁基底部、2)立柱状の袖石、3)礎床、4)短い羨道部、である。

2)については編年上の指標としても用いられており(太田2000)、削平された2号墳も同様の構造をもつものと推測される。3)の礎床は不揃いの礎を用いた凹凸のある床面である。2号墳で見たように地山に含まれる礎を利用したと考えられる。排水の機能をもたせていた可能性もあろう。4)壁体をもつ羨道部分の長さは玄室長の半分以下と短い。羨道壁体は床面から斜めに上がって2～3石で収束し、壁体をもたない墓道へ続く点が最も特徴的である。その規模については次項で述べることとする。

以上、石材の大きさや壁体の積み上げ方はそれぞれ異なっているが、こうした特徴によって共通性を強く感じさせる結果となっている。

**石室の規模** 玄室の平面形はいずれも長方形で、玄室幅指数は2号墳0.46、3号墳0.49、4号墳0.54を示し、4号墳がやや幅広であるものの、ほぼ同様の形態・規模を有する。玄室床面積は、2号墳6.67㎡、

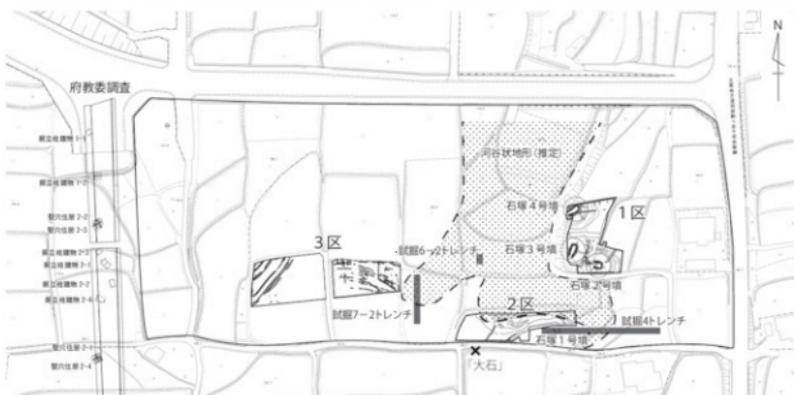


図52 調査区地形復元図

表1 石塚古墳群一覧

		1号墳(試掘)	2号墳(東)	3号墳(南)	4号墳(北)
墳丘	墳形	?	円	楕円	円
	直径	(9~13)	(11.4)	(11~12)	(10)
直径(周溝含)		-	(約14)	(13.5~14)	(16.5)
周溝		?	3号墳と共有	2号墳と共有	あり
		?	幅1.5前後	幅1.5	幅1.5~4.0
石室	規模	-	7.7	[6.5]	[5.55]
	全長	-	7.7	[6.5]	[5.55]
	玄室	幅[1.7]	幅1.67~1.84×長(3.8)	幅1.6~1.8×長3.5	幅1.8~1.9×長3.4
	羨道	?	両袖? 幅(0.8)	両袖 幅1.0×長1.5	両袖 幅1.2×長0.9
	墓道	?	羨道と合せて長3.9	長[1.5](復元4.0)	幅1.1以下×長[1.2]
	開口方向	南南東 S-14°-E	西北西 N-74.9°-W	南南西 S-25.1°-W	南西 S-54.6°-W
床面の高さ	TP+122.0前後か	T.P.+121.7~121.9	TP.+120.9	T.P.+120.0	
棺	木棺	木棺	木棺	木棺(棺台あり)	
頭位	?	西北西か	北北東	北東	

※単位m、( )復元、[ ]残存

3号墳5.95㎡、4号墳6.29㎡を測り、一須賀古墳群や高安千塚、平尾山古墳群で主体を占める小中規模の古墳と同様な数値と言える。

羨道長について一須賀古墳群と比較した(図53)。時期に限らず法量の判明している石室との比較であるが、一須賀古墳群でもJ-11号墳やI-16・21号墳など羨道長1.2~1.4mを測るものがあり、最も羨道の短いグループにあたる。その他寛弘寺古墳群中やTK209型式期の河内長野市三田市古墳群10号墳、やや時期は下るが太子町尼ヶ谷古墳など、羨道の短い石室は一定程度存在したようである。ただ、羨道壁体が斜め上方に収束する点は石塚古墳群に特有であり、石室構造の共通性と考え合わせるとごく小地域での在り地色とでも言えよう。

**石室の時期と築造順** 石室から出土した須恵器、特に杯蓋の型式によると、TK43~TK209型式段階のほぼ一時期に求められるが、その築造順について考えておきたい。

4号墳では杯蓋(106~109)に古い様相を見ることが出来る。2号墳では立ち上がりが高く、口径の小さい杯身(7・8)のような新しい様相を見せる資料が含まれる。3号墳では玄門側にある杯身(59)に同様の要素を見出せ、長頸壺(70)も新しい傾向をもつ器種と言える。ただし70は墓道埋土で出土しており、埋葬の時期よりも新しくなる可能性がある。玄室内の須恵器に限定すると2号墳と同様TK43型式のうちにおさまるものであろう。遺物からは4号墳が古く、2・3号墳については確実に前後関係を述べられるものではない。

ここで2~4号墳の占地や墳形を見ると、3号墳は他の2基に挟まれる位置にあって、その東辺は2号墳に影響されて直線的となり、墳丘は石室中軸方向に長い楕円形を呈する。これは先に占地していた2・4号墳の間に3号墳を築いたために、墳形が規制された結果であると想定できる。さらに3号墳東辺の石列を2号墳周溝からの流水保護に用いたと仮定すると、2号墳が先に築かれていたと考えられるのである。

以上から、築造順は4号墳→2号墳→3号墳とすることができよう。石室壁体に比較的大型の石材を用いる4号墳が後出するようと思われるが、出土遺物や占地を考慮するとまったく逆となる。その理由

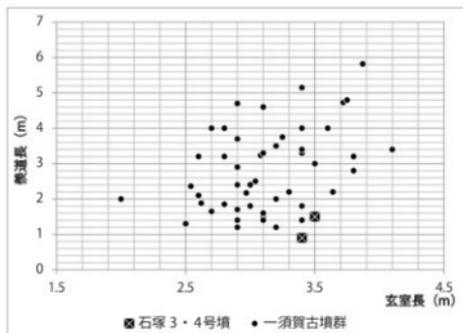


図 53 石室規模の比較

として石材獲得の容易さといった視点を挙げておきたい。石材の質は肉眼観察では3基とも類似している。一部は風化して砂状となるものもあり、わざわざ遠方に行って採取するほど良質な石材とは思われない。まったくの推定にはなるが、近辺で産出する石材を用いたために時期を経るほどに小ぶりの石材を壁体に用いるようになったのではないだろうか。石種の同定は未実施で一部サンプルを採取することどまっており、石材採取地については今後の課題としたい。

**石室の開口方向** 石室の開口方向は西～南と一定した方角を示さない。2～4号墳は地形に規制され谷を向くものであろう。ただし1号墳はそれらとは別方向に開口していると考えられ、さらに南側の地形や別の要因を考慮する必要がある。

**埋葬棺と頭位方向** 鉄釘の出土から釘付式木棺の存在を想定できる。釘や玉類、耳環の位置から見た頭位方向には、石室の長軸方向に沿う点以外では傾向は見いだせなかった。

**埋葬数** 石室内の遺物からは4号墳では2体、2・3号墳の埋葬者は1体と考えられる。4号墳では棺台が2か所検出されており、その位置が重複するため追葬が想定できる。須恵器2～3点が重なった蓋杯のグループでは最も下に古い要素をもつ資料があり、追葬によって上に須恵器を重ねた、と見ることも可能である。

3号墳では、玄門付近に集中する杯や墓道を埋める黒色土に含まれる長頭壺に、新出する要素を認めることができる。しかし、玄室内では追葬を確実視させる資料は求められなかった。墓前祭祀の継続を想定し、追葬はなかったものとして考えておきたい。

**3号墳の閉塞** 3号墳の墓道は黒色土によって閉塞されていた。そしてその土中から石材とともに須恵器長頭壺、短頭壺2点、土師器鉢、石製紡錘車が出土している。閉塞に伴う儀礼が想定されるとともに、埋葬と閉塞に時期差があった可能性も指摘できよう。

**墳丘・周溝出土土器** 2・3号墳が共有する周溝で、須恵器杯蓋、低脚高杯、大甕が出土している。4号墳の周溝や周辺の包含層からも須恵器杯や甕を認める。特に甕は石室内から出土しておらず、墳丘上で使用されたと考えてよからう。

## ② 遺物の検討

**遺物の組成** 図54-1に石室出土遺物の組成を、図54-2には須恵器の器種組成を示した。2号墳は攪乱を受けているため参考とし、築造順にその様相を述べておきたい。須恵器は2号墳でさき半分以上の割合を占める。4号墳では出土のなかった土師器は、2号墳の段階から甕と鉢が用いられ始め、3号墳では壺、高杯も加わって器種が揃う。3号墳では遺物点数、玉類の種類が増えるとともに石製紡錘車も加わっている。須恵器は杯が7割程度まで占めるようになり、いずれの古墳でも壺を欠く点も特徴的である。

**須恵器** 上述したように須恵器は4号墳ではTK43型式段階、2・3号墳ではTK43型式でもTK209型式の要素が入り新しい様相を示す。特に3号墳の長頭壺(70)は高台が付く以前の独特の器形と言えようか。図

55は杯の法量を出土位置別に示したものである。出土位置によって特に差異は認められないが、2号墳はばらつきが大きい。一方、4号墳では口径の値が身は12.0cm前後、蓋では14.0cm前後にまとまっている。後述するようにヘラ記号にも特徴があり、同じ窠からもたらされた可能性が指摘できよう。なお、



図 54 遺物組成・器種組成

調査区西側の集落域で出土した須恵器（大阪府教委 2013）の胎土は古墳出土資料と非常に似通っており、芹生谷遺跡一帯の須恵器は同一の生産地から供給されたと考えられる。

**須恵器のヘラ記号** 杯には「×」「||」「#」「|」「∧」「Λ」の6種類のヘラ記号が認められた。主に施されるのは蓋杯で、壺や大甕にも見られる。特に4号墳では杯17点中の7点に「∧」が施され、ヘラ記号の施される須恵器の割合が高いことが指摘できる。生産地において古墳に用いる須恵器が弁別されていた可能性があろう。

**遺物の配置** 2号墳では奥壁と袖石付近、3号墳では奥壁、右袖、玄門部、4号墳では奥壁に配置が集中する。出土する器種は、3号墳では奥壁部で杯・高杯が、左袖部では土師器を含めて壺類が集中する傾向にある。蓋と身が組み合せて出土するのは3号墳と4号墳の各1セットのみで、ほとんどは蓋が逆位で出土している。2号墳では土師器鉢の下に杯身2点が重なって出土し、4号墳では蓋や身が口縁を上に向けて重なっていた。こうした出土状況によると、内容物を入れた器として供献品として機能していたというより、使用後に重ねて片付けた、もしくは収納状況を示す副葬品として位置付けるのが妥当であろう。

**鉄製農具** 2号墳にのみ鉄鋸が出土するが、鉄製品には斧・鎌・刀子といった工具が優越する。鉄斧は小型の手斧であり、木材加工用のものと考えられているものである。鎌は2号墳に渡来系と言われる刃先を右にする資料が認められる。

**紡錘車** 3号墳墓道出土品(95)で、供献品と考えられる。近辺では、神山丑神5号墳(土製)、寛弘寺73号墳に類例があり、いずれもTK43～TK209型式段階とほぼ同時期の横穴式石室である。周辺地域では一般的とは言わないまでも一定程度の出土が認められる。古墳時代後期段階では「紡錘車を伴う供献祭祀行為は造墓から一定の時間が経過した段階で先祖供養を目的としておこなわれた」（角南 2005）との想定は、墓道から出土した長頸壺(70)を玄室出土遺物より新しく位置付けることと整合的であり、事例の一つとすることができよう。

### ③ 石塚古墳群の位置付け

以上、石塚古墳群の特徴について述べてきた。非常に雑駁であるがその位置付けについて述べておきたい。石塚古墳群は、一須賀古墳群のような大規模な古墳群の群形成からみると、小支群といった最も

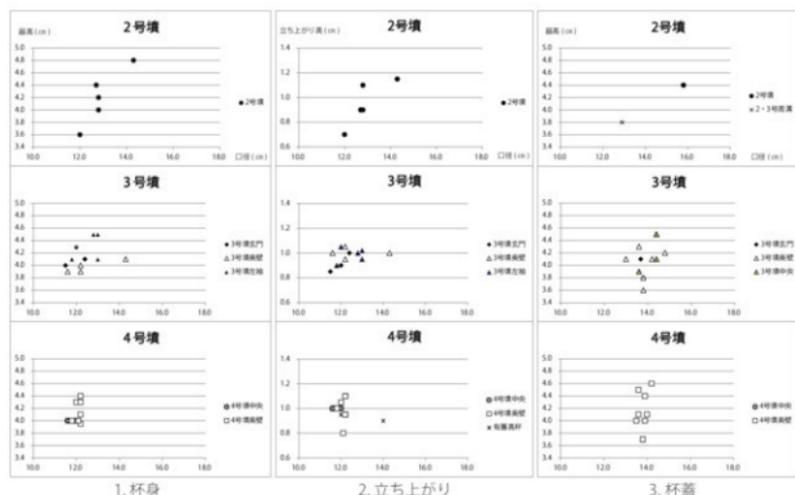


図 55 須恵器法量

下位の単位に位置付けられる。須恵器のほぼ一型式のうちに連続して築かれた規模や副葬品の等質的な古墳群であり、一集団によって営まれたと推定される。その被葬者像を考えるにあたっては、鉄製工具の副葬を重視しておきたい。特に鉄斧、鉄鎌とともに農耕や鍛冶との関連を示唆するものである。鉄鎌は半島由来とされる右に刃先の付く型式が出土しているが、その他渡来人と関連が強いとされるミニチュア炊飯具や垂飾付耳飾り、釵子といった資料は出土していない。一方、一須賀古墳群の被葬者には渡来系氏族が想定されており、半島との関わりが強い地域であったと想定される。鉄鎌の型式をもって石塚古墳群の被葬者を渡来系とするには不足があり、6世紀末葉には渡来的要素をもつ鎌が在地化されていたと捉えておきたい。

鉄斧／鉄鎌が出土する横穴式石室は、横穴式石室研究会(2007)の集成によると近畿で72／64基と少なく、うち30／38が大和、特に被葬者に鍛冶工人が推定されている寺口忍海古墳群、寺口千塚に集中する。類例の少ないなか石塚古墳群3基すべてに鉄製農工具が出土することを評価すると、その被葬者集団が地域の小鍛冶を担う工人のような役割を担っていたと積極的に評価することもできるのではないだろうか。ただしこの評価には今後、時期や個別資料などのより詳細な検討が必要である。

さて、第1章で述べたように、石塚古墳群の周辺には金山古墳をはじめとして、古墳時代後期から終末期にかけての古墳が多く営まれている(図56)。一須賀古墳群や平石古墳群といった古墳が目立ってきたが、時期的に併行する御旅所古墳や御旅所北古墳、神山丑神古墳群、浄真寺山古墳、寛弘寺古墳群、井阪古墳など、河南台地とその周辺には点々と小規模な古墳も認めることができるのである。こうした小墳は、地域色というよりは独自の個性をもち、その場所場所で生業を営んでいた小集団の長が葬られたと想定することができよう。芹生谷遺跡では、石塚古墳群よりやや古い時期(TR43型式段階のうちには比定される)の堅穴建物や掘立柱建物が検出されている(大阪府教委2013)。石塚古墳群はさらに南にも展開すると予想され、同時期の古墳があってもおかしくはない。この集落は短期間の居住と推定され

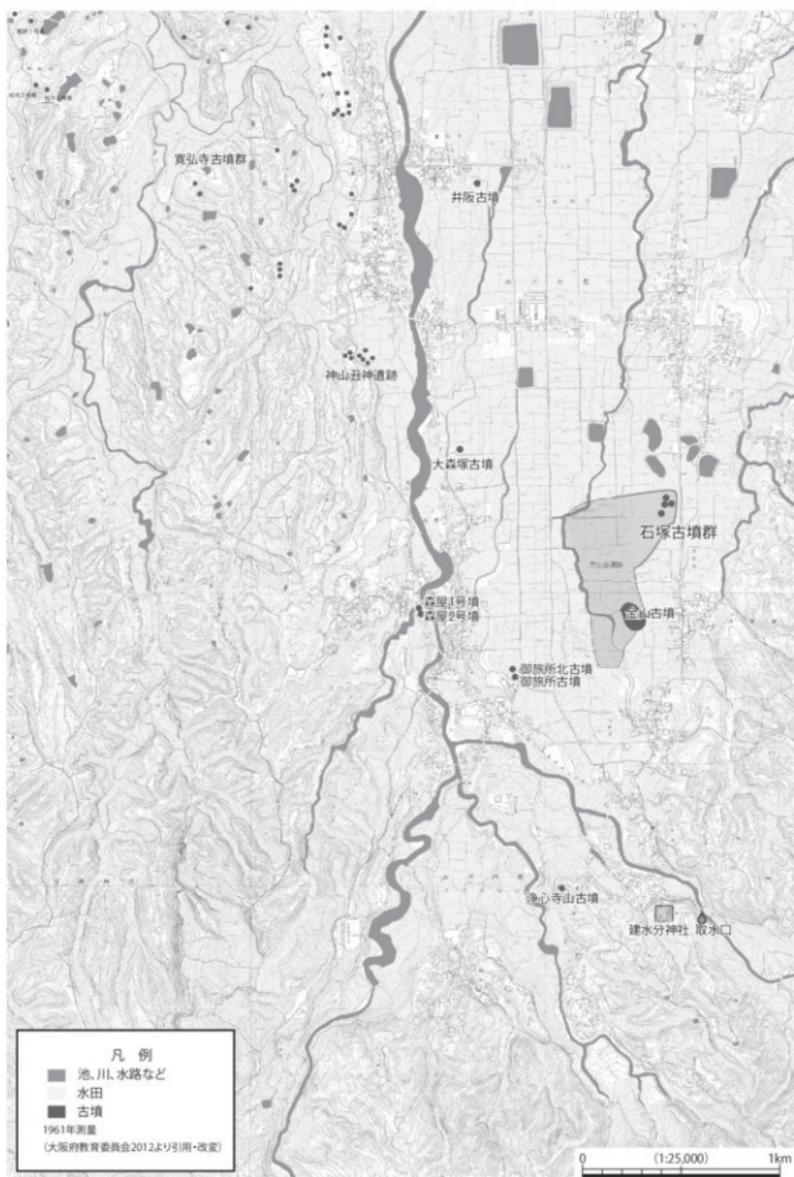


図56 芦生谷遺跡周辺の古墳

ているが、集落遺跡と古墳がごく近辺で検出される好例であると言える。他の古墳の近辺にも居住地が付随する可能性が指摘でき、古墳に伴う集団の居住が想定できよう。

一方で金山古墳は、その特異な双円墳という墳形とともに85.5mという当時としては隔絶した規模をもつ古墳である。石塚古墳よりやや新しいTK43～TK209型式の古い段階に比定され、大王墓や蘇我氏や物部氏といった有力氏族の族長墓に次ぐ規模であることから、白石氏はその被葬者を大伴氏と想定されている(白石2010)。被葬者については今後も検討は必要であろうが、いずれにせよ畿内政權でもかなり有力な地位をもっていたことは確実である。その権力基盤は河南台地にとどまらず広い背景を擁したことが想定され、調査地周辺はそのひとつであったのであろう。河南台地における金山古墳の立地は、台地を潤す水路の取水口のほど近く、北へ下る台地を睥睨する小丘陵の上にある。水路の成立自体は条里と関連すると考えられるため当時の状況について確実視できるものではないが、水源地に近い上流地点を占地することは間違いなく、河南台地周辺に生きる小集団にとっては命脈を握られたも同然であったことだろう。金山古墳の被葬者は、水利権を掌握し台地の小集団を統括する首長として位置付けることができる。しかし周囲の小墳には金山古墳のように双円形を呈する古墳もなく、石室の形態等をみてもそれぞれ独自の特徴を有し、相互の関係性を示すものではない。おそらくその支配の実態は小集団が独自に生計を営む、独立性の高いものであったのではないかと想定される。石塚古墳群は、古墳時代後期から終末期にかけての河南台地における重層的な集団のあり方、ひいては当時の中央政權の地方支配の実態を物語っているのではないだろうか。

#### 注

- 1 八尾市教育委員会2012を参照した。
- 2 ただし法量の斉一性や共通するヘラ記号をもつ資料を同時期のものとすれば、その配置に意味を見出すことはできなくなり、木塚棺台は台石(棺台)からずれたものとも考えることもできよう。また鉄釘は出土数が少なく、組合式木棺に補助的に用いられていた可能性がある。
- 3 調査中に実見・実測をさせていただいた。
- 4 なお一須賀古墳群では刀子は認められるものの、鉄斧や鉄鋸は出土していない。付近では、神山丑神古墳群5号墳で曲刃の鉄鎌が出土しているが、これは左側に刃先をもつものである(大阪府教委1992)。
- 5 各古墳についてはより詳細な検討が必要であり、未報告である井阪古墳の報告を含め後述を期したい。

#### 【引用・参考文献】

- 一須賀古墳群発掘調査委員会1996『太子カントリー倶楽部建設に伴う植田遺跡(まか)発掘調査報告書』
- 一瀬和夫2002「高安千塚にみられる石室と墳丘構築に関する一画図」
- 『高安千塚古墳群 基礎調査総括報告書〔附論編〕高安千塚古墳群の研究』八尾市教育委員会
- 一瀬和夫・福永伸哉・北条芳隆編2013『副葬品の型式と編年』古墳時代の考古学4 同成社
- 太田安明2003「畿内型石室の変遷と伝播」『日本考古学』第15号 日本考古学協会
- 大阪府教育委員会1963『金山古墳および大藪古墳の調査』大阪府文化財調査報告書第二輯
- 1986『寛弘寺遺跡発掘調査概要IV』
- 1987『寛弘寺遺跡発掘調査概要V』
- 1987『寛弘寺遺跡発掘調査概要VI』
- 1988『神山遺跡発掘調査概要I』
- 1989『寛弘寺遺跡発掘調査概要VII』
- 1989『寛弘寺古墳群発掘調査概要VIII』

- 1900『寛弘寺遺跡発掘調査概要 IX』  
 1901『寛弘寺遺跡発掘調査概要 X』  
 1902『寛弘寺古墳群発掘調査概要 XI』  
 1902『神山丑神遺跡発掘調査概要 I』  
 1903『神山丑神遺跡発掘調査概要 II』  
 1904『寛弘寺遺跡発掘調査概要 XIII』  
 2003『加納古墳群・平石古墳群』  
 2010『山城廃寺発掘調査概要』  
 2011『芹生谷遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 2010-9  
 2012『芹生谷遺跡II』大阪府埋蔵文化財調査報告 2011-6  
 2013『芹生谷遺跡III』大阪府埋蔵文化財調査報告 2013-1

河南町誌編纂委員会 1968『河南町誌』河南町役場

白石太一郎 2010「大阪府河南町金山古墳の再検討」

『大阪府立近つ飛鳥博物館 館報 13』大阪府立近つ飛鳥博物館 p. p. 3-14

角南総一郎 2005「古墳副葬・供献紡錘車の検討—近畿地方を中心に—」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』

大阪大学文学研究科考古学研究報告第3冊 大阪大学稲荷塚古墳発掘調査班

田辺昭三 1966『須恵邑古窯址群 I』平安学園考古学クラブ

近つ飛鳥博物館編 2000a『一須賀古墳群の調査 A・O・Q 支群』

2000b『一須賀古墳群の調査II WA 支群』

2002『一須賀古墳群の調査III I 支群』

2004『一須賀古墳群の調査IV B 支群』

2005『一須賀古墳群の調査V D・E・F・J・K・L・P 支群』

千早赤阪村教育委員会 1983『御旅所・御旅所北古墳調査報告書』千早赤阪村文化財調査報告書第1冊

2003『川野辺遺跡発掘調査報告書』

2005『森屋西遺跡発掘調査報告書II』

2007『大森遺跡発掘調査概要 I』

中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

中村 浩 1978「和泉須恵邑出土の時期編年」『須恵邑III』大阪府教育委員会

富田林市史編集委員会編 1985『富田林市史』第1巻 本文編 富田林市

西川寿勝・向井妙 2013「河南台地の集落と古墳」『季刊考古学』123号 p. 107-108 雄山閣

野村 豊 1962『河内石川村学術調査報告：近世村落資料』

大阪府南河内郡石川村石川村学術調査報告刊行会

宮崎泰史 2006「一須賀古墳群の調査VI～分布・出土遺物の再整理作業から～」

『大阪府立近つ飛鳥博物館 館報 10』

八尾市教育委員会 2002『高安古墳群 基礎調査統括報告書』

山田幸弘 1993「石川流域における灌漑施設の復元的考察に関する覚え書き」『さやま誌』

横穴式石室研究会 2007『近畿の横穴式石室』

吉川周作 1993「5 大阪盆地南部」『大阪層群』創元社

表2 遺物観察表

掲載No.	区	遺構名	種別	器形	時期	口径	体部径	底径	器高	色調	胎土	焼成	登録No.	備考
001	1	2号墳 上層	須恵器	杯蓋	古墳	13.8			3.9	灰白色	密	良好	124	ヘラ記号
002	1	2号墳	須恵器	杯蓋	古墳	15.8			4.4	灰色	密	良好	104	完形、取上④
003	1	2号墳 上層	須恵器	杯蓋	古墳	14.2			3.8	灰白色	密	良好	122	取上⑧と接合
004	1	2号墳	須恵器	杯身	古墳	14.3	受部径 (16.8)		4.8	灰色	密	良好	106	ほぼ完形、取上 ⑥
005	1	2号墳	須恵器	杯身	古墳	12.7	受部径 (15.2)		4.4	明オ リーブ 灰色	密	良好	105	ほぼ完形、取上 ⑤、ヘラ記号
006	1	2号墳	須恵器	杯身	古墳	12.8	受部径 (15.4)		4.2	灰色	密	良好	103	完形、取上③
007	1	2号墳	須恵器	杯身	古墳	12.8	受部径 (15.0)		4.0	灰白色	密	良好	109	ほぼ完形、取上 ⑨
008	1	2号墳	須恵器	杯身	古墳	12.0	受部径 (14.1)		3.6	灰色	密	良好	108	ほぼ完形、取上 ⑧
009	1	2号墳 墓道	須恵器	高杯	古墳	11.4	脚部高 (11.7)	10.8	16.0	灰色	密	良好	068	
010	1	2号墳	須恵器	壺	古墳	12.8	16.2		(15.0)	灰色	密	良好	114	口縁部接合、取上 ⑩⑪
011	1	2号墳	須恵器	壺	古墳	12.7	16.9		16.4	灰色	密	良好	101	ほぼ完形、取上 ①
012	1	2号墳	須恵器	短頸壺	古墳	9.0	14.6		8.8	灰色	密	良好	110	反転復元、取上 ⑪
013	1	2号墳	須恵器	短頸壺	古墳	8.0	15.3		8.9	灰色	密	良好	112	反転復元、取上 ⑫
014	1	2号墳 上層	須恵器	提瓶	古墳	8.4	9.8		20.1	灰色	密	良好	120	
015	1	2号墳	土師器	甕	古墳	13.4	13.6		12.0	橙色	密	良	102	ほぼ完形、取上 ②
016	1	2号墳	土師器	鉢	古墳	10.0			4.7	橙色	密	良	107	完形、取上⑦
017	1	2号墳・ 3号墳 周溝	須恵器	杯蓋	古墳	12.9			3.8	灰褐色	密	良好	069	
018	1	2号墳・ 3号墳 周溝	須恵器	低脚杯	古墳	12.4		7.2	5.9	灰色	密	良好	070	
019	1	2号墳・ 3号墳 周溝	須恵器	短頸壺	古墳	7.9	15.0		9.0	灰色	密	良好	071	
020	1	2号墳・ 3号墳 周溝	須恵器	大甕	古墳	23.6	41.7		39.0	青灰色	密	良好	067	ヘラ記号
021	1	2号墳	鉄	鐵	古墳	8.8	1.95	0.2					135	鉄⑤
021	1	2号墳	鉄	鐵	古墳	3.5	2.3	0.2					136	鉄⑤の下、西より

残存値〔 〕、復元値〔 〕、単位 cm

表2 遺物観察表

掲載No.	区	遺構名	種別	器形	時期	口径	体部径	底径	器高	色調	胎土	焼成	登録No.	備考
022-024	1	2号墳	鉄	不明	古墳	3.45	2.2	0.5					142	鉄②
025	1	2号墳	鉄	鏃	古墳	3.9	1.05	0.2					137	鉄⑤の破片
026	1	2号墳	鉄	曲刃鎌	古墳	6.9	2.2	0.4					138	鉄④
027	1	2号墳	鉄	曲刃鎌	古墳	5.7	2.2	0.15					139	鉄④
028	1	2号墳	鉄	曲刃鎌	古墳	6.9	2.2	0.4					133	鉄⑤
029	1	2号墳	鉄	刀子	古墳	4.7	1.75	0.4					134	鉄⑦
030	1	2号墳	鉄	刀子?	古墳	長さ 3.45	幅 0.8	厚さ 0.25					128	鉄①
031	1	2号墳	鉄	釘	古墳	6.5	0.8	0.45					130	鉄③
032	1	2号墳	鉄	釘	古墳	4.6	0.65	0.45					132	鉄⑤
033	1	2号墳	鉄	釘	古墳	長さ 2.3	幅 0.55	厚さ 0.4					144	2号墳検出中
034	1	2号墳?	鉄	不明	古墳	長さ [2.9]	長さ [1.3]	厚さ 0.5					118	拡張時包含層
035	1	2号墳	耳環	中実	古墳	外径 2.65	内径 1.45		断面径 0.6				145	銅土銀板巻か
036	1	2号墳?	玉類	切子玉	古墳	1.7			1.5				214	廃土中、(水晶)
037	1	3号墳 奥壁	須恵器	杯蓋	古墳	14.2			4.1	灰色	密	良好	026	完形、取上①
038	1	3号墳 奥壁	須恵器	杯蓋	古墳	14.4			4.5	浅黄色	密	やや不良	028	取上⑤
039	1	3号墳 奥壁	須恵器	杯蓋	古墳	14.8			4.2	灰白色	密	良	016	完形 (No. 029 と 接合)、取上③ ⑥
040	1	3号墳 奥壁	須恵器	杯蓋	古墳	13.6			4.3	灰白色	密	良	023	ほぼ完形、取上 ②
041	1	3号墳 奥壁	須恵器	杯蓋	古墳	13.8			3.6	灰色	密	良好	015	完形、取上②
042	1	3号墳 奥壁	須恵器	杯蓋	古墳	13.8			3.8	灰白色	密	良好	030	(No. 031-034 と 接合)、取上⑩ ～⑫
043	1	3号墳 奥壁	須恵器	杯蓋	古墳	13.0			4.1	灰色	密	良好	017	完形、取上④
044	1	3号墳 奥壁	須恵器	蓋(つまみ付)	古墳	6.9	つまみ径 (3.3)	つまみ高 (1.0)	3.35	灰色	密	良	057	完形(蓋蓋)、 取上⑧
045	1	3号墳 奥壁	須恵器	杯身	古墳	14.3	受部径 (14.4)		4.1	灰色	密	良好	027	完形、取上⑪
046	1	3号墳 奥壁	須恵器	杯身	古墳	12.2	受部径 (14.4)		3.9	灰色	密	良好	021	完形、取上⑤

残存値〔 〕、復元値〔 〕、単位 cm

表2 遺物観察表

掲載No.	区	遺構名	種別	器形	時期	口径	体部径	底径	器高	色調	胎土	焼成	登録No.	備考
047	1	3号墳 奥壁	須恵器	杯身	古墳	12.2	受部径 (14.7)		4.0	灰色	密	良好	023	完形、取上㉔
048	1	3号墳 奥壁	須恵器	杯身	古墳	11.6	受部径 (13.9)		3.9	灰色	密	良好	020	完形、取上㉕
049	1	3号墳 奥壁	須恵器	高杯	古墳	11.9	脚部高 (12.1)	10.8	16.5	灰色	密	良好	022	(No.014、018と 接合)、取上㉖、 ㉗、㉘
050	1	3号墳 奥壁	須恵器	高杯	古墳	11.9	脚部高 (12.1)	11.0	16.7	暗灰色	密	良	024	完形、取上㉙
051	1	3号墳 奥壁	須恵器	提瓶	古墳	6.6	14.3		18.1	灰色	密	良好	019	完形、取上㉚
052	1	3号墳 玄室手 前	須恵器	杯蓋	古墳	13.6			3.9	灰色	密	良好	038	ほぼ完形、取上 ㉛
053	1	3号墳 玄室手 前	須恵器	杯蓋	古墳	14.4			4.5	灰白色	密	不良	036	取上㉜
054	1	3号墳 玄室手 前	須恵器	杯身	古墳	11.8	受部径 (13.9)		4.1	灰色	密	良好	037	ほぼ完形、取上 ㉝、へろ記号
055	1	3号墳 玄室手 前	須恵器	杯蓋	古墳	14.4			4.1	灰白色	密	不良	047	完形、取上㉞
056	1	3号墳 玄室手 前	須恵器	杯身	古墳	12.8	受部径 (15.1)		4.5	灰黄色	密	不良	044	ほぼ完形、取上 ㉟
057	1	3号墳 玄室手 前	須恵器	杯身	古墳	13.0	受部径 (15.4)		4.1	灰黄色	密	不良	048	完形、取上㊱
058	1	3号墳 玄室手 前	須恵器	杯身	古墳	13.0	受部径 (15.8)		4.5	灰白色	密	不良	046	ほぼ完形、取上 ㊲
059	1	3号墳 玄室手 前	須恵器	杯身	古墳	12.0	受部径 (14.7)		4.3	灰色	密	良好	041	ほぼ完形、取上 ㊳
060	1	3号墳 玄室手 前	須恵器	台付壺	古墳	9.0	14.9	13.0	26.6	灰白色	密	良好	042	(No.43,45,58,59 と接合)、取上 ㊴
061	1	3号墳 玄室手 前	須恵器	脚付長 頸壺	古墳	11.4	15.5		19.0	灰白色	密	良好	038	脚部欠損、取上 ㊵
062	1	3号墳 玄室手 前	土師器	高杯	古墳	10.5		10.2	12.0	橙色	密	良好	040	指頭痕多い、取 上㊶
063	1	3号墳 玄室手 前	土師器	長頸壺	古墳	12.0	14.0		19.3	橙色	密	良好	039	口縁部欠損、全 体的に磨減、取 上㊷
064	1	3号墳 玄門	須恵器	杯蓋	古墳	13.68			4.1	灰色	密	良	049	完形、取上㊸
065	1	3号墳 玄門	須恵器	杯蓋	古墳	13.8			3.8	灰色	密	良好	053- 2	完形、取上㊹上
066	1	3号墳 玄門	須恵器	杯身	古墳	12.4	受部径 (14.5)		4.1	灰白色	密	やや 不良	051	(No.60、174と 接合)、取上㊺、 ㊻
067	1	3号墳 玄門	須恵器	杯身	古墳	12.0	受部径 (14.1)		4.3	灰色	密	良好	053- 1	完形、取上㊼下

残存値〔 〕、復元値〔 〕、単位 cm

表2 遺物観察表

掲載No.	区	遺構名	種別	器形	時期	口径	体部径	底径	器高	色調	胎土	焼成	登録No.	備考
068	1	3号墳玄門	須恵器	杯身	古墳	11.5	受部径(14.0)		4.0	灰色	密	良好	050	ほぼ完形、取上⑦
069	1	3号墳玄門	土師器	甕	古墳	14.2	14.1	7.8	13.0	黄橙色	密	良	052	黒斑あり、取上⑧
070	1	3号墳墓道	須恵器	長頸壺	古墳	12.6	14.5		18.9	灰色	密	良	061	墓道埋土中
071	1	3号墳墓道	須恵器	短頸壺	古墳	7.8	14.9		9.8	灰褐色	密	良好	054	完形、取上④
072	1	3号墳墓道	須恵器	短頸壺	古墳	7.6	15.1		9.1	灰白色	密	良好	058	ほぼ完形、取上⑥、ヘラ記号
073	1	3号墳墓道	土師器	碗	古墳	11.4			4.9	黄橙色	密	良好	056	全体的に磨滅、取上③
074	1	3号墳	鉄	鎌	古墳	長さ14.7	幅3.5	厚さ0.3					073	鉄①
075	1	3号墳	鉄	鎌	古墳	6.6	2.5	0.2					80-2	鉄⑦
076	1	3号墳	鉄	鎌・鉞	古墳	13.7	4.0	0.6					074	鉄②
077	1	3号墳	鉄	刀子	古墳	8.8	1.3	0.2					081	鉄⑤
077	1	3号墳	鉄	不明	古墳	2.25							083	破片
078	1	3号墳	鉄	刀子	古墳	6.25	0.9	0.2					082	鉄②
079	1	3号墳	鉄	不明	古墳	2.3	2.2	0.4					080-3	鉄⑦
080	1	3号墳	鉄	斧	古墳	7.7	2.5	0.85					079	鉄⑥
081	1	3号墳	鉄	斧	古墳	10.3	2.75	0.5					080-1	鉄⑦
082	1	3号墳	鉄	釘	古墳	5.8	0.9	0.4					075-1	鉄③
082	1	3号墳	鉄	釘	古墳	1.6	1.2	0.3					075-2	鉄③
083	1	3号墳	鉄	釘	古墳	5.0	0.6	0.25					077	鉄⑤
084	1	3号墳	耳環	中空	古墳	外径2.99	内径1.8		断面径0.4				096	金銅か
085	1	3号墳	耳環	中空	古墳	外径2.8	内径1.85		断面径0.4				097	金銅か
086	1	3号墳	玉類	勾玉	古墳				2.3	淡橙～橙色			089	玉⑥(メノウ)
087	1	3号墳	玉類	勾玉	古墳	2.3			0.8	淡橙～橙色			085	玉②(メノウ)
088	1	3号墳	玉類	切子玉	古墳	1.5			1.1	半透明			084	玉①(水晶)

残存値 [ ], 復元値 ( ), 単位 cm

表2 遺物観察表

掲載No.	区	遺構名	種別	器形	時期	口径	体部径	底径	器高	色調	胎土	焼成	登録No.	備考
089	1	3号墳	玉類	管玉	古墳	0.25			2.0	黒～青色			091	玉⑤(凝灰岩か滑石)
090	1	3号墳	玉類	管玉	古墳	2.0			0.8	暗緑色			086	玉③(碧玉類似岩)
091	1	3号墳	玉類	霽玉	古墳	0.3			2.1	赤褐色			096	玉⑦(コハク)他コハク⑩あり
092	1	3号墳	玉類	霽玉	古墳	0.2			2.0	緑灰色			092	玉⑨(凝灰岩類似岩)
093	1	3号墳	玉類	小玉	古墳	0.4			0.6	スカイブルー			088	玉⑤(ガラス)
094	1	3号墳	玉類	小玉	古墳	0.5			0.5	ネイビーブルー			087	玉④(ガラス)
095	1	3号墳	石製品	紡錘車形	古墳	3.4			1.5	灰緑～灰色			094	玉⑪(滑石)
096	1	3号墳上層	土師器	皿	中世	8.8			1.6	灰白色	密	良好	005	完形
097	1	3号墳上層	土師器	皿	中世	7.7			1.2	にぶい褐色	密	良好	001	
098	1	3号墳上層	土師器	皿	中世	14.2			2.15	にぶい褐色	密	良好	009	
099	1	3号墳上層	土師器	椀	中世	14.25			4.2	にぶい褐色	密	良好	003	ほぼ完形
100	1	3号墳上層	瓦器	椀	中世	15.1			5.8	灰色	密	良好	008-2	
101	1	3号墳上層	瓦器	椀	中世	14.6			5.2	灰色	密	良好	008-1	
102	1	3号墳上層	瓦器	椀	中世			高台(5.4)	(1.1)	黒色	密	良好	008-3	
103	1	3号墳上層	土師器	羽釜	中世	31.6	鐙(38.0)		(15.8)	にぶい赤褐色	密	良好	004	
104	1	3号墳上層	土師器	羽釜	中世	29.2	鐙(37.0)		(6.4)	浅黄色	密	良好	011	
105	1	3号墳上層	土師器	羽釜	中世	28.4	鐙(34.6)		(1.1)	にぶい褐色	密	良好	007	
106	1	4号墳奥壁	須恵器	杯蓋	古墳	13.9			4.0	暗灰色	密	良好	156	ほぼ完形、ヘラ記号、取上⑤
107	1	4号墳奥壁	須恵器	杯蓋	古墳	13.5			4.0	灰色	密	良好	149	完形、ヘラ記号、取上④
108	1	4号墳奥壁	須恵器	杯蓋	古墳	14.0			4.1	灰白色	密	良好	156	取上①、②と接合
109	1	4号墳奥壁	須恵器	杯蓋	古墳	13.6			4.1	灰色	密	良好	158	完形、取上③
110	1	4号墳奥壁	須恵器	杯蓋	古墳	14.2			4.6	灰色	密	良好	170	取上⑥⑦
111	1	4号墳奥壁	須恵器	杯蓋	古墳	13.9			4.4	青灰色	密	良好	148	ヘラ記号、取上③

残存値〔 〕、復元値〔 〕、単位 cm

表2 遺物観察表

掲載No.	区	遺構名	種別	器形	時期	口径	体部径	底径	器高	色調	胎土	焼成	登録No.	備考
112	1	4号墳奥壁	須恵器	杯蓋	古墳	13.8			3.7	暗青灰色	密	良好	147	ヘラ記号、取上
113	1	4号墳奥壁	須恵器	杯蓋	古墳	13.6	つまみ高(2.4)	つまみ高(0.6)	4.5	灰色	密	良好	157-2	完形、つまみ付、取上⑤上
114	1	4号墳奥壁	須恵器	杯身	古墳	12.2	受部径(14.4)	脚部高(12.5)	4.4	灰色	密	良好	155	完形、取上⑥
115	1	4号墳奥壁	須恵器	杯身	古墳	12.2	受部径(14.5)		4.3	灰色	密	良好	171	完形、取上⑥
116	1	4号墳奥壁	須恵器	杯身	古墳	11.8	受部径(14.2)		4.0	灰色	密	良好	153	完形、取上⑤
117	1	4号墳奥壁	須恵器	杯身	古墳	12.2	受部径(14.6)		4.1	灰白色	密	良好	157-1	完形、取上⑥下
118	1	4号墳奥壁	須恵器	杯身	古墳	12.2	受部径(14.8)		3.95	灰色	密	良好	151	ほぼ完形、ヘラ記号、取上⑥、⑦と接合あり
119	1	4号墳奥壁	須恵器	杯身	古墳	12.1	受部径(14.5)		4.0	灰色	密	良好	152	ほぼ完形、取上⑦
120	1	4号墳奥壁	須恵器	杯身	古墳	12.0	受部径(14.5)		4.3	灰白色	密	良好	154	完形、取上⑥、ヘラ記号
121	1	4号墳奥壁	須恵器	短脚高杯	古墳	14.0	受部径(16.4)	10.0	9.1	灰色	密	良好	162	ほぼ完形、取上⑧
122	1	4号墳奥壁	須恵器	高杯	古墳	12.0	受部径(14.5)	13.5	16.5	灰色	密	良好	159	取上⑧
123	1	4号墳奥壁	須恵器	高杯	古墳	11.6	脚部高(13.0)	11.2	17.5	灰色	密	良好	163	ほぼ完形、取上⑧
124	1	4号墳奥壁	須恵器	台付壺	古墳	9.75	16.4	13.7	28.3	灰色	密	良好	160	ほぼ完形、取上⑨
125	1	4号墳奥壁	須恵器	台付直口壺	古墳	9.3	14.9	11.6	24.2	灰色	密	良好	164	取上⑨、ヘラ記号
126	1	4号墳奥壁	須恵器	脚付短頸壺	古墳	7.0	脚部高(11.3)	10.0	18.2	灰白色	密	良好	146	完形、取上①
127	1	4号墳玄室中央	須恵器	杯蓋	古墳	13.8			3.7	灰色	密	やや不良	167	取上④、ヘラ記号
128	1	4号墳玄室中央	須恵器	杯身	古墳	12.0	受部径(14.3)		4.0	灰色	密	良	163	ほぼ完形、取上⑨、ヘラ記号
129	1	4号墳玄室中央	須恵器	杯身	古墳	11.6	受部径(14.4)		4.0	灰色	密	良好	166	完形、取上⑨
130	1	4号墳玄室中央	須恵器	壺蓋	古墳	7.3	受部径(11.1)		3.7	灰色	密	良	168	ほぼ完形、取上⑩
131	1	4号墳玄室中央	須恵器	短頸壺	古墳	8.8	12.7		11.6	灰白色	密	良好	169	完形、取上⑩
132	1	4号墳周溝	須恵器	甕	古墳	10.6			7.6	灰白色	密	良好	178	東側ベルト、No.179、186、194、195接合
133	1	4号墳	鉄	鎌	古墳	17.35	2.15	0.1					202	鉄③

残存値〔 〕、復元値( )、単位 cm

表2 遺物観察表

掲載No.	区	遺構名	種別	器形	時期	口径	体部径	底径	器高	色調	胎土	焼成	登録No.	備考
134	1	4号墳	鉄	斧	古墳	13.8	5.0	1.0					200	鉄①
135	1	4号墳	鉄	釘	古墳	13.6	1.1	0.7					201	鉄②
136	1	4号墳	鉄	釘	古墳	7.65	1.0	0.7					205	鉄⑤
137	1	4号墳	鉄	釘	古墳	3.0	0.8	0.6					207-1	石室内落ち込み粘土層上層
137	1	4号墳	鉄	釘	古墳	2.8							207-2	石室内落ち込み粘土層上層
138	1	4号墳	鉄	釘	古墳	13.3	1.4	1.2					206	鉄⑦
139	1	4号墳	鉄	釘	古墳	5.1	2.3	1.0					204-1	鉄⑤
139	1	4号墳	鉄	釘	古墳	4.8	0.8	0.45					204-2	鉄⑤
139	1	4号墳	鉄	釘	古墳	3.0	0.55	0.45					204-3	鉄⑤
140	1	4号墳	鉄	釘	古墳	10.2	0.65	0.8					203	鉄④
141	1	4号墳	玉類	勾玉	古墳	2.2			0.6	淡橙色			211	玉④(メノウ)
142	1	4号墳	玉類	管玉	古墳	2.7			0.6	暗緑色			208	玉①(碧玉)
143	1	4号墳	玉類	管玉	古墳	2.3			0.8	暗緑色			209	玉②(碧玉)
144	1	4号墳	玉類	小玉	古墳	0.6			0.6	グリーン			210	玉③(ガラス)
145	1	4号墳 玄室中央	木	棺台	古墳	残存長	95.6	残存幅	10.0	残存厚	3.6		212	取上①
146	1	4号墳 玄室中央	木	棺台	古墳	残存長	86.0	残存幅	6.0	残存厚	4.6		213	取上②
147	1	拡張部 包含層	瓦器	椀	中世	(0.8)		5.2	0.8	灰色	密	良好	118-1	高台のみ、暗文あり
148	1	拡張部 包含層	黒色土器	杯	中世	12.7			1.85	にぶい 黄褐色	密	良好	115	
149	1	拡張部 包含層	土師器	羽釜	中世	25.25			3.9	橙色	密	良好	118-2	口縁部のみ
150	3	3区	瓦器	皿	中世	11.6			2.3	暗灰色	密	良好	506-1	
151	3	3区	土師器	小皿	中世	7.8			1.2	灰黄褐色	密	良好	500	
152		その他	土師器	小皿	中世	7.8			1.3	橙色	密	良好	199	採集資料
153	3	3区	土師器	羽釜	中世	19.1			3.2	褐色	密	良好	506-2	

残存値[ ], 復元値( ), 単位 cm

# 圖 版





1. 芥生谷遺跡遠景（大阪府教育委員会提供）



2. 金山古墳から調査地を臨む（南から）



4. 2区調査前（西から）



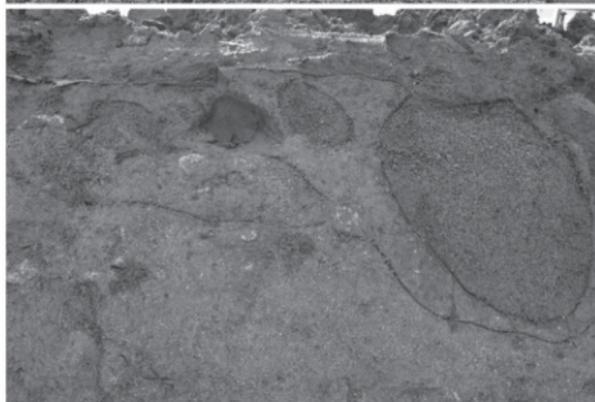
3. 1区調査前（南から）



5. 3区調査前（東から）



1. 石室検出状況  
(南から)



2. 北壁土層断面・  
石室奥壁部(北から)



3. 不定形土坑土層断面  
(北から)



1. 1区全景(南東から)



2. 2号墳全景(西から)



1. 2号墳北側周溝  
土層断面(西から)



2. 拡張前調査区  
南壁断面(北から)



3. 拡張前2号墳墓道  
須恵器検出状況  
(西から)



1. 石室床面検出状況(拡張後・西から)



2. 奥壁側(西から)



1. 北から



2. 南から



3. 東から



1. 北側壁(西から)



2. 奥壁(南から)



3. 南側壁(西から)



1. 奥壁方向（西から）



2. 奥壁南隅（西から）



3. 床面断ち割り・排水溝土層断面（西から）



1. 南西から



2. 南東から  
(手前は2号墳)



3. 南西から



1. 南西から



2. 玄室(南東から)



3. 玄室～羨道  
(南東から)

1. 玄室(北西から)



2. 玄室～羨道  
(北西から)



3. 床面断ち割り状況  
(北東から)





1. 東側壁掘り方  
(北東から)



2. 掘削状況(南から)



3. 玄室中央断面  
(北東から)



1. 墓道上層堆積土中  
須惠器長頸壺  
(南西から)



2. 墓道床面  
(南東から)



1. 墓道床面  
(南東から)



2. 玄室から羨道方向  
(北東から)



3. 左袖部(南東から)

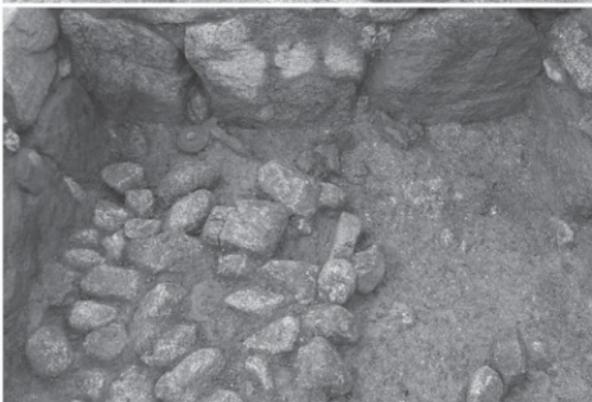
1. 羨道から奥壁方向  
(南西から)



2. 北東側  
(手前が奥壁)



3. 須恵器取上げ後  
下層須恵器・  
鉄製品出土状況  
(南西から)





1. 検出状況(トレンチ拡張前・南東から)



2. トレンチ拡張後(南西から)



1. 羨道から奥壁方向(南西から)



2. 玄室から羨道方向(北東から)



1. 南東側壁を臨む  
(北西から)



2. 北西側壁を臨む  
(南東から)



3. 南東側壁掘り方  
土層断面(北東から)

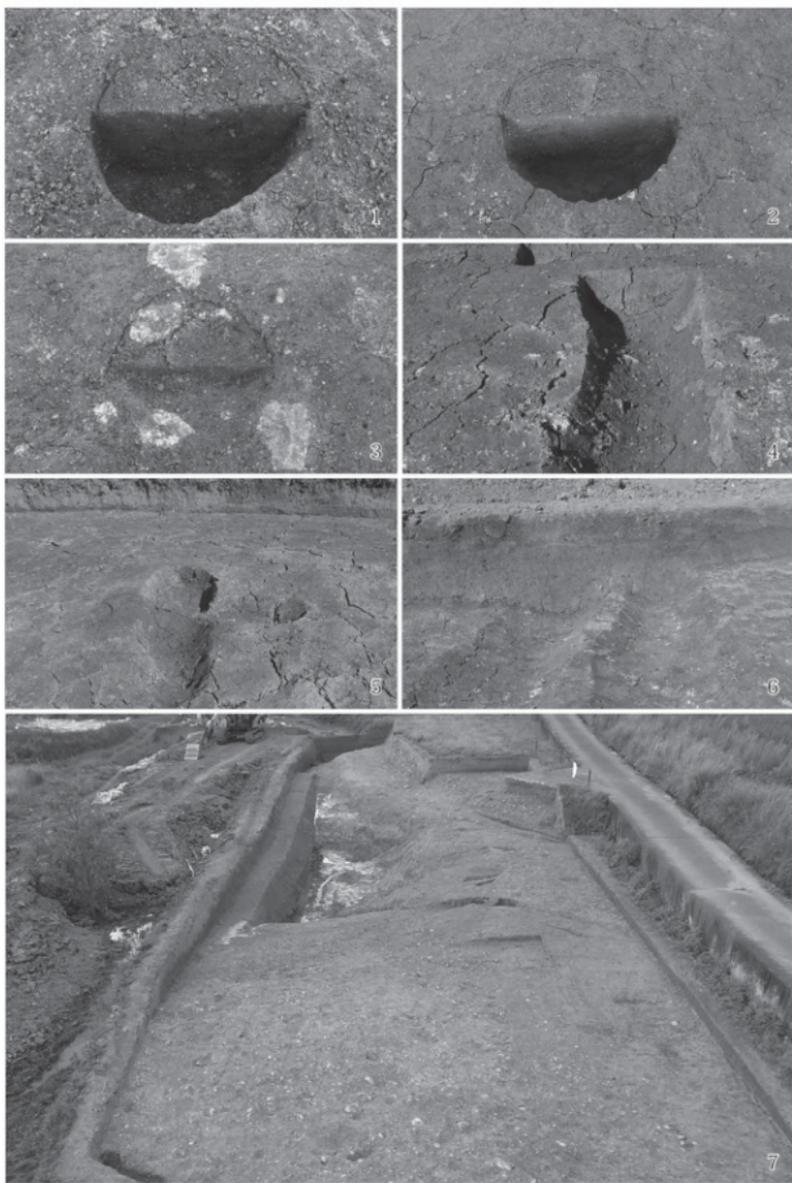
1. 羨道から奥壁方向  
(南西から)



2. 奥壁から羨道方向  
(北東から)



図版 20  
芦生谷遺跡 1 区  
溝・土坑土層断面 / 2 区  
完掘状況



1. SP1(南から) 2. SP7(南から) 3. SP3(南から) 4. SD12(南から) 5. SD15・16(西から)  
6. SD17・18(南西から) 7. 2区完掘状況全景(東から)



1. 西側(東から)



2. 東側(東から)



1・2. 東壁土層断面  
(西から)



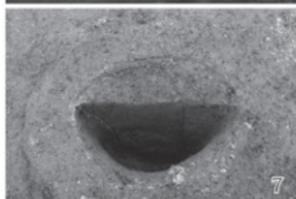
3. 西側完掘状況  
(南から)



4. SP77(西から)  
5. SD59~61(北東から)



6. 東側検出状況  
(東から)



7. SP42(西から)  
8. SP43(西から)



9. SD37・38・40  
(東から)  
10. SD25・30~32  
(東から)

1. 3-2トレンチ  
遺構検出状況(西から)



2. 4-2トレンチ  
礎敷状遺構(南西から)



3. 保存・看板設置状況  
(北から)





1. 石塚2号墳石室出土遺物



2. 石塚4号墳石室出土遺物

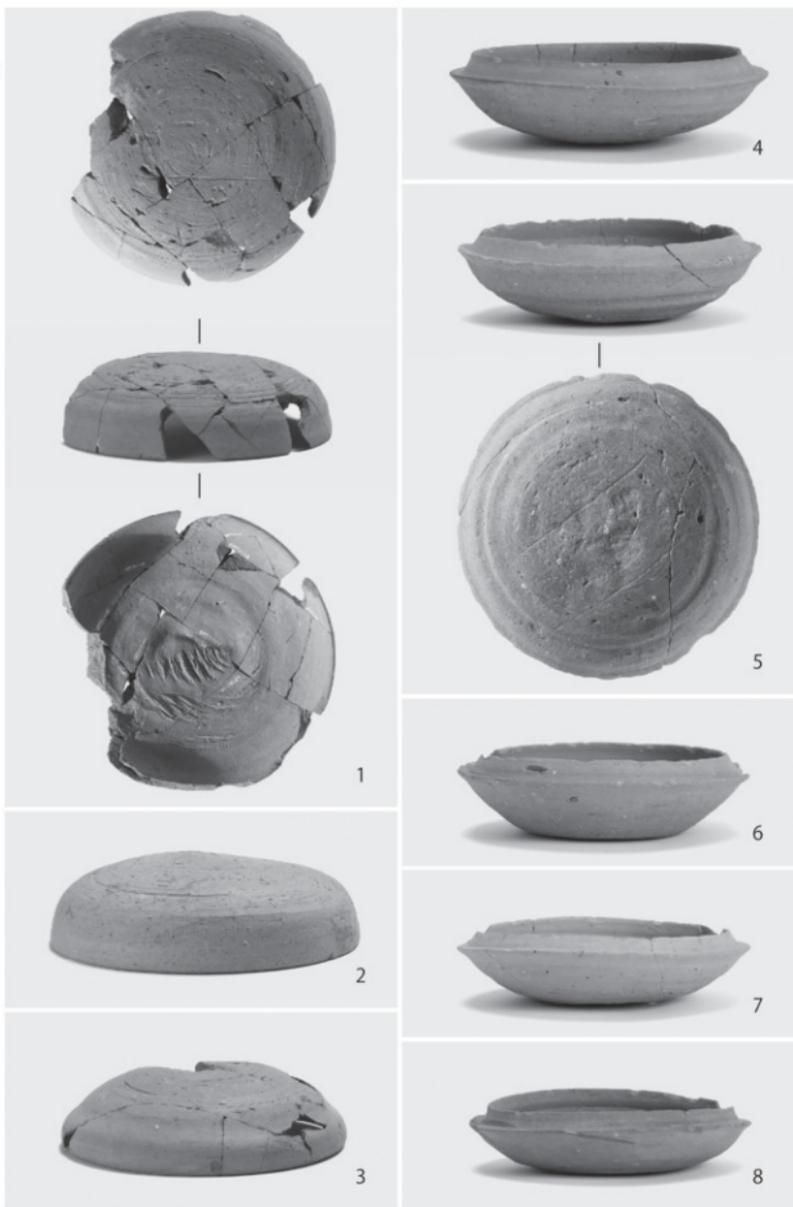


1. 須恵器・土師器



2. 鉄製品・耳環・玉類・石製紡錘車

图版26 石塚2号墳石室出土須恵器







17



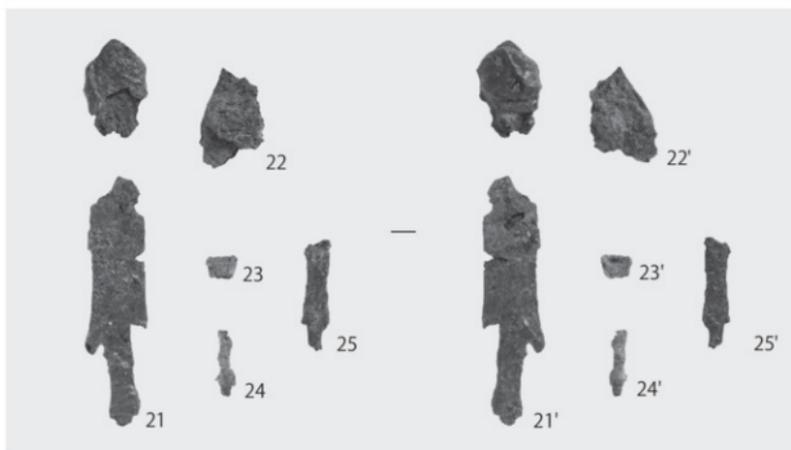
19



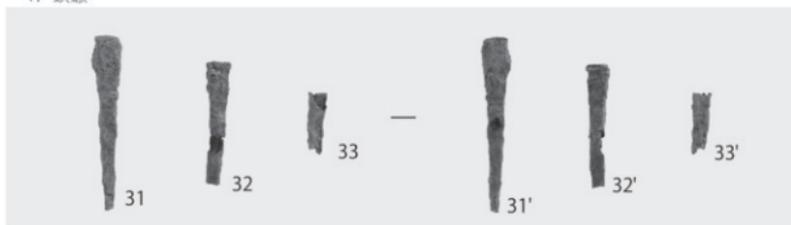
18



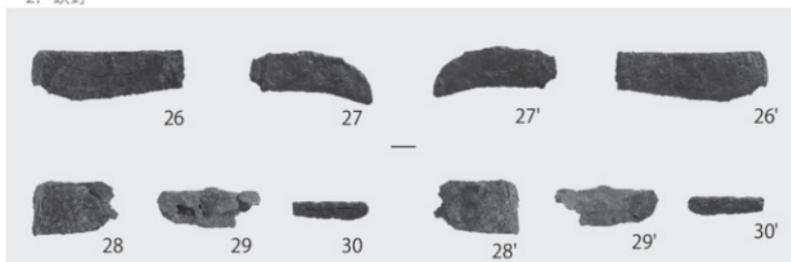
20



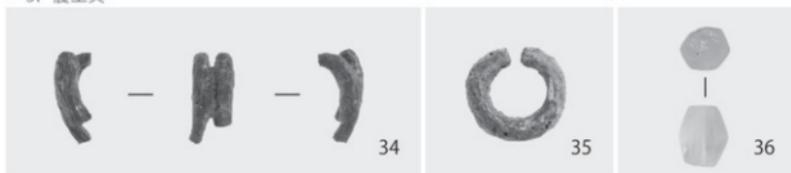
1. 鉄鏃



2. 鉄釘



3. 農工具



4. 不明鉄製品

5. 耳環

6. 水晶切子玉



37



43



38



44



39



45



40



46



41



47



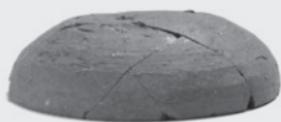
42



48



49



52



53



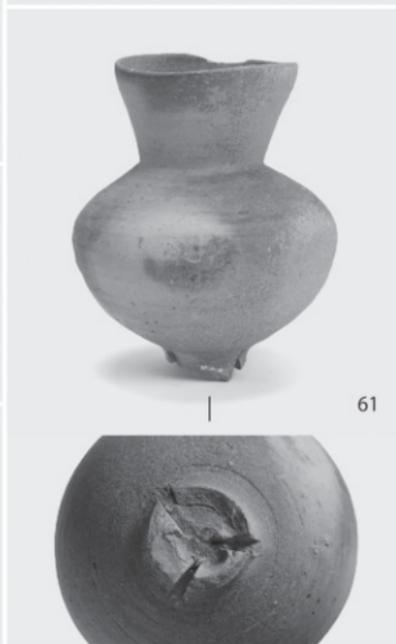
54



50



51





62



63



64



65



66



67



68



69



70



73



71



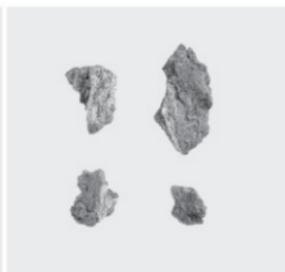
72

1. 須恵器・土師器

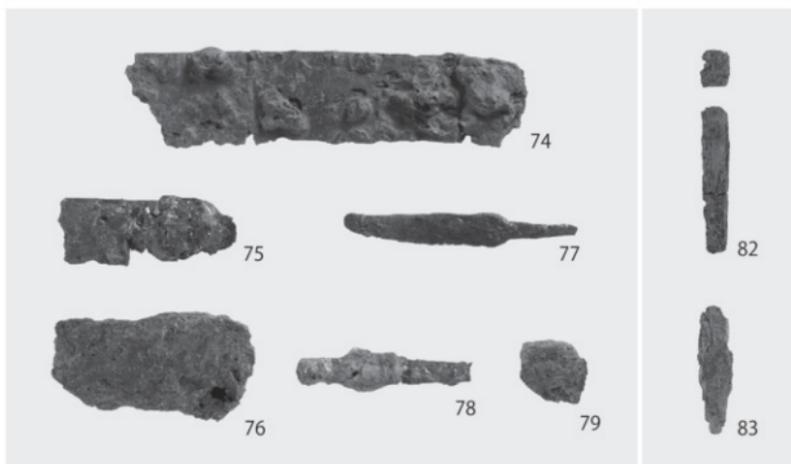


95

2. 石製紡錘車

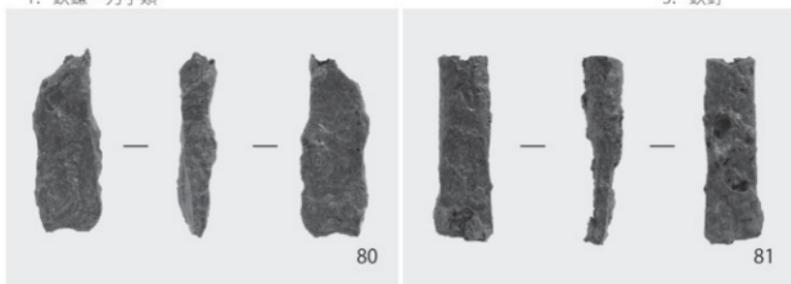


3. 有機物サンプル(骨か)

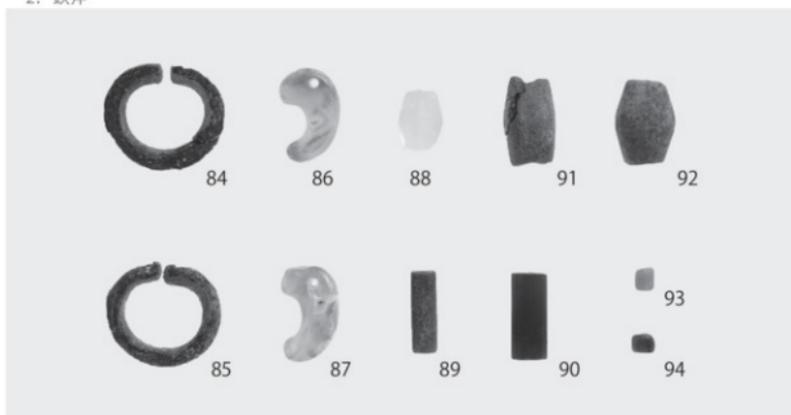


1. 鉄鎌・刀子類

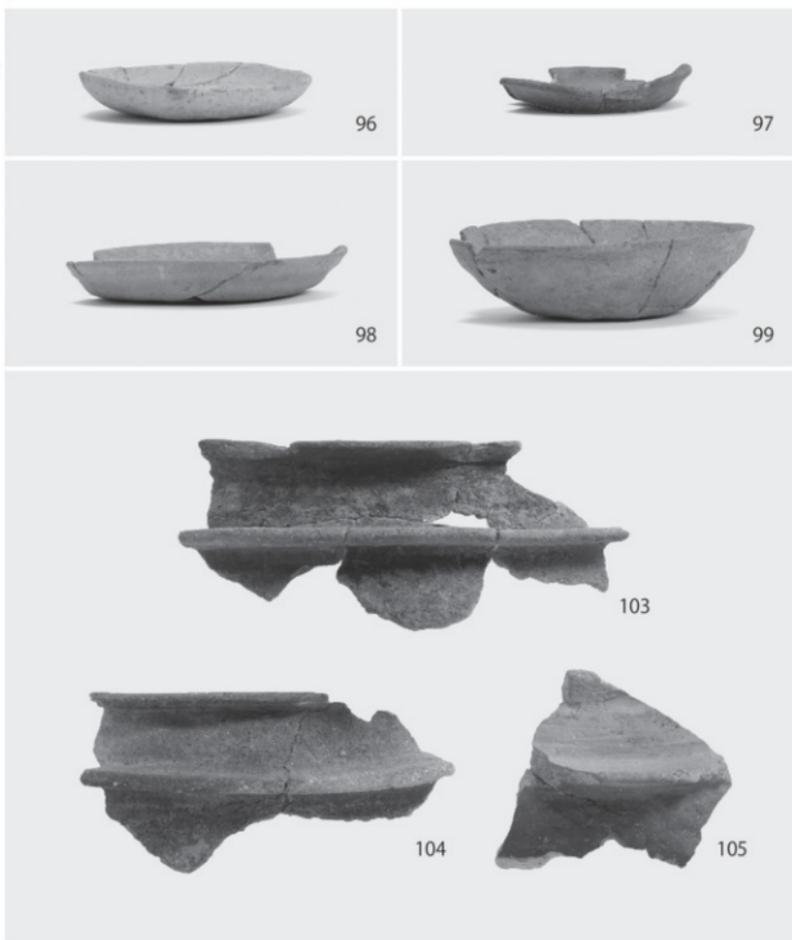
3. 鉄釘



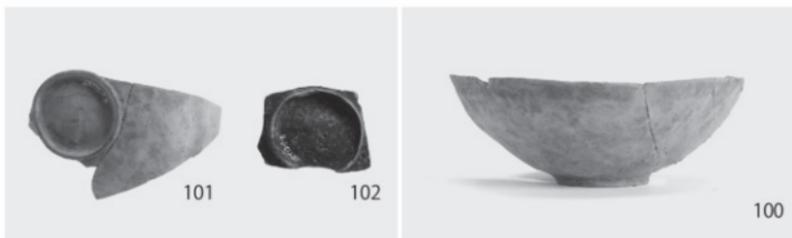
2. 鉄斧



4. 耳環・玉類



1. 土師器



2. 瓦質土器



106



112



107



113



108



114



109



115



110



116



111



117



118



119



120



111'



112'



106'



118'



107'



120'



121



122



123



124



125



126



128



127



129



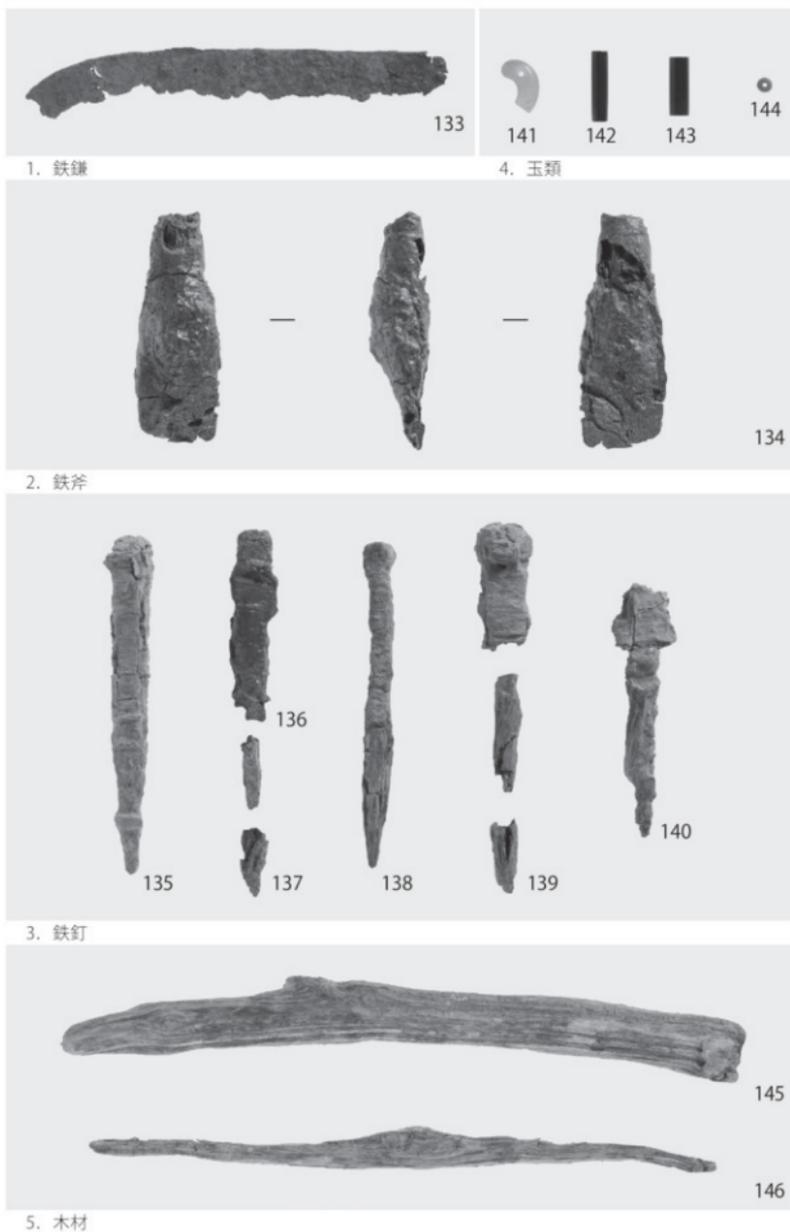
130

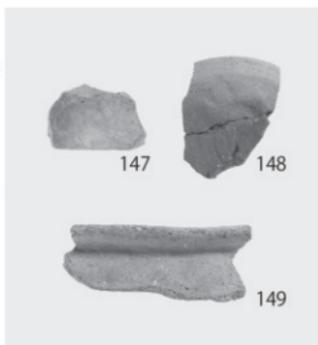


132

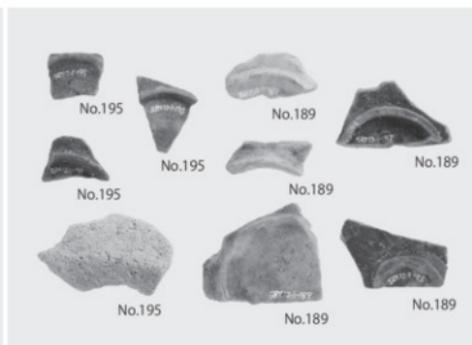


131





1. 1区包含層出土瓦質土器・土師器



2. 1区包含層出土瓦質土器・土師器



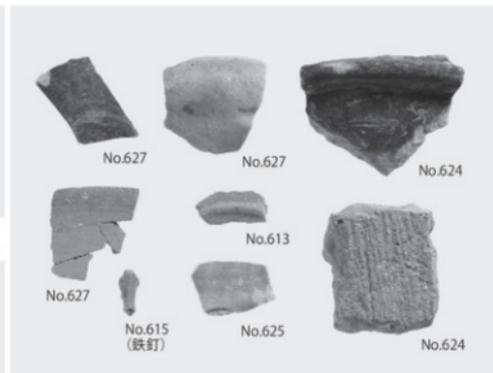
3. 2区包含層出土遺物



4. 3区SD60出土土師器／包含層出土瓦質土器・土師器



5. 遺跡周辺出土土師器



6. 試掘トレンチ出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	せりゅうたにいせき・いしづかこふんぐん							
書名	芹生谷遺跡・石塚古墳群							
副書名	スーパーセンターオークワ河南店建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻次								
シリーズ名	河南町文化財調査報告							
シリーズ番号	第4冊							
編著者名	向井 妙							
編集機関	河南町教育委員会							
所在地	〒585-8585 大阪府南河内郡河南町大字白木 1359 番地の6 TEL 0721-93-2500							
発行年月日	西暦 2015年 3月 31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
芹生谷遺跡 いしづかこふんぐん 石塚古墳群	大阪府南河内郡 河南町 大字中	27382		34° 28' 22"	135° 37' 51"	20120712 ～ 20121031	1,848	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
芹生谷遺跡	生産遺跡	中世前期	耕作溝、ピット		瓦質土器、土師器			
石塚古墳群	墳墓	古墳後期	古墳4基		須恵器、土師器、鉄製品（鏃、斧、鎌、刀子、鉄釘等）、耳環、玉類、石製紡錘車、瓦質土器		石室の残存 状況良好	
要約	<p>古墳時代後期の古墳4基を検出し、石塚古墳群の新規発見となった。2～4号墳は直径12m前後の小円墳で、試掘の1号墳を除き近接して築かれる。主体部は横穴式石室で類似した構造を有し、副葬品が床面で検出される良好な遺存状態を保っていたものである。中世前半には耕作地へと変貌している。石塚3号墳の石室上層では、石室石材とともに12世紀後葉の土器群が検出され、開発の開始期を示唆する。耕作面の造成は広く行われ、起伏が均され谷地も埋まったものであろう。中世の大規模な開発の状況を伝えるものである。</p>							

河南町文化財調査報告第4冊  
芹生谷遺跡・石塚古墳群

スーパーセンターオークワ河南店建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

発行 河南町教育委員会

〒585-8585

大阪府南河内郡河南町大字白木 1359 番地の 6

TEL 0721 - 93 - 2500 (代表)

発行日 平成 27 年 3 月 31 日

印刷 株式会社 地域文化財研究所

〒578-0941

大阪府東大阪市岩田町 1 丁目 17 番 9 号

TEL 072 - 968 - 7321